



D地区全景(南東から)

6. 薪遺跡第8次発掘調査報告

1. はじめに

この調査は、主要地方道八幡木津線道路整備促進事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

薪遺跡は、京都府京田辺市大字薪小字高木・狭道に所在する。薪遺跡の調査次数は、7次を数え第1・2次調査は、京田辺市教育委員会が行なっている。本道路整備促進事業に伴う調査は、当調査研究センターが平成13年度(第3次調査)より開始し、平成15年度(第5次調査)までに15か所の試掘調査(調査面積1,480m²)と、それに基づく2次にわたる本調査(第6・7次調査)を実施している(調査面積3,250m²^(注1))。今回の第8次調査で、本事業に伴う調査はすべて終了となる。

調査地は、薪遺跡西側を南北に縦貫する道路建設路線帯で、現薪集落の東側の水田、畑地を対象である。調査地区は2か所に分かれており、平成17年度調査地区に続くD・E地区で実施した。D地区では試掘調査を実施していないが、平成16年度第6次調査で縄文時代の竪穴式住居跡を検出した調査地に近接しており、集落の広がり確認されるものと想定された。またE地区では、平成13年度第3次調査(2トレンチ)で埴輪を持つ古墳の溝が確認されており、平成15年度第5次調査(5トレンチ)では、中世の溝や奈良時代の土坑が検出されている。E地区における調査結果では、いずれも遺構・遺物包含層が確認されており、良好な遺構の検出が期待され、過去の試掘トレンチを含め調査を実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長森正、同主任調査員松井忠春・増田孝彦、同専門調査員竹井治雄、調査第2課調査第1係調査員松尾史子、調査第2課調査第3係主査調査員柴暁彦が担当した。調査期間は、平成18年6月12日～同年12月22日まで実施した。調査面積はD地区1,700m²、E地区1,100m²の合計2,800m²である。本概要報告は、増田が執筆した。

調査に際しては、京田辺市教育委員会・京都府教育委員会・京都府山城北土木事務所・地元自治会をはじめとする関係諸機関からご指導・ご協力をいただいた。また、現地調査・整理作業については、補助員・整理員の参加・協力を得た。記して感謝したい。^(注2)

なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

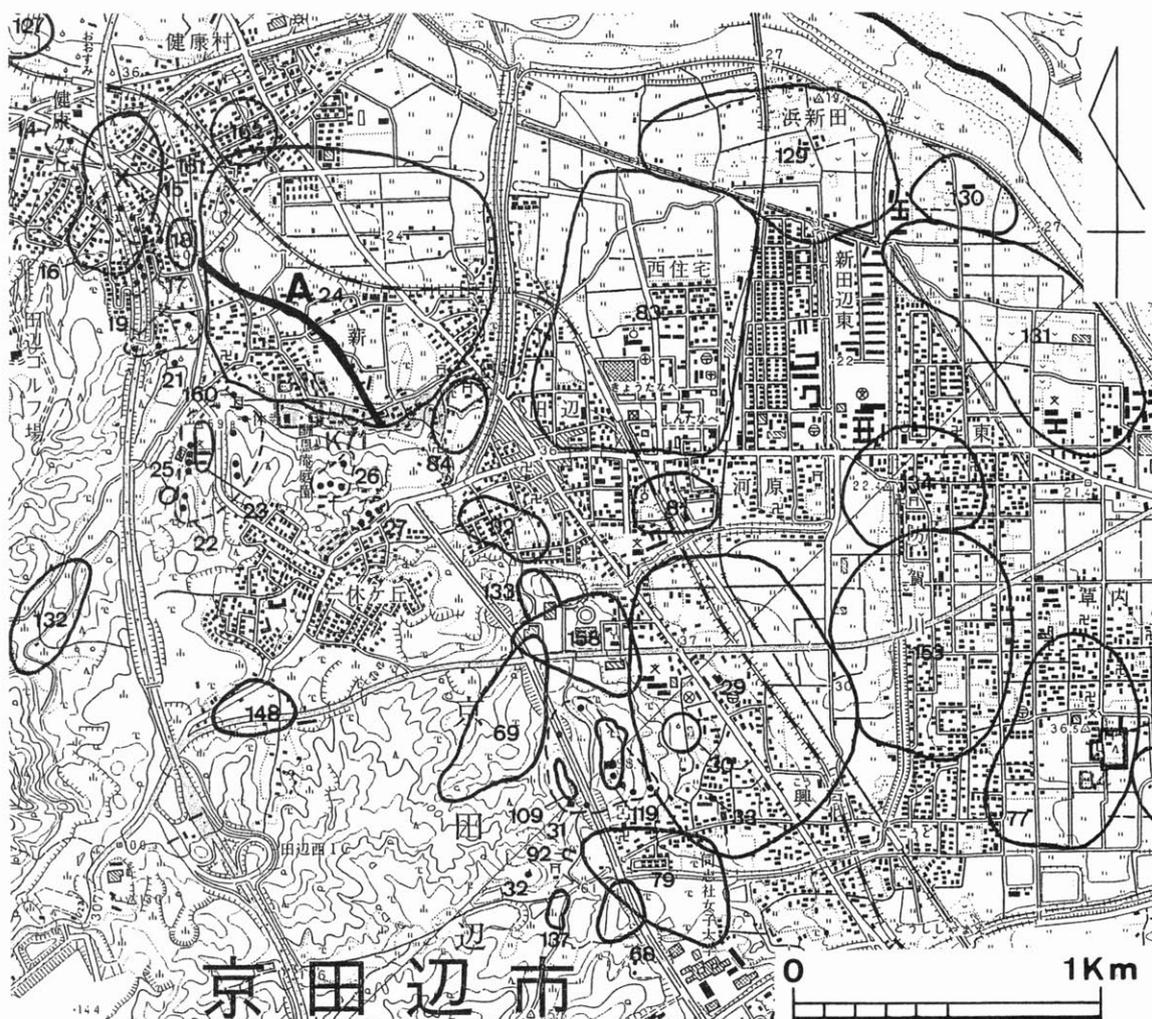
2. 位置と環境

薪遺跡は、京田辺市の中心部の北西側、木津川左岸の丘陵裾部に位置する。西側に甘南備山に源を発する手原川、東側に天津神川、南側を天理山丘陵に囲まれ、手原川により形成された扇状地に立地する。過去の調査成果などから、縄文時代時代から近世にかけての長期間にわたる大規模な複合遺跡として知られ、東西南北方向とも約900m四方の広範囲に及ぶ遺跡である。

薪遺跡周辺の歴史的環境をみてみると、旧石器時代～縄文時代の遺跡は数少なく、旧石器時代ではサヌカイト石核が出土した高ヶ峰遺跡が知られている。縄文時代では、三山木遺跡(縄文晩期～鎌倉時代)や天津神川を挟んだ東側に薪遺跡と対峙する稲葉(東薪)遺跡(縄文晩期)がある。

弥生時代になると、市内各所に遺跡が展開するようになるが、弥生時代前期の遺跡には、稲葉遺跡・宮ノ口遺跡・宮ノ下遺跡・三山木遺跡がある。中期の遺跡も田辺遺跡・興戸遺跡・南垣内遺跡など多く所在し、薪遺跡背後の丘陵部には中期の土器・石器が出土した狼谷(小谷)遺跡がある。後期の遺跡としては、住居跡や方形周溝墓が検出された飯岡遺跡、水田跡が検出された興戸遺跡、田辺天神山遺跡が知られている。薪遺跡でも、後期の遺物が少量出土している。

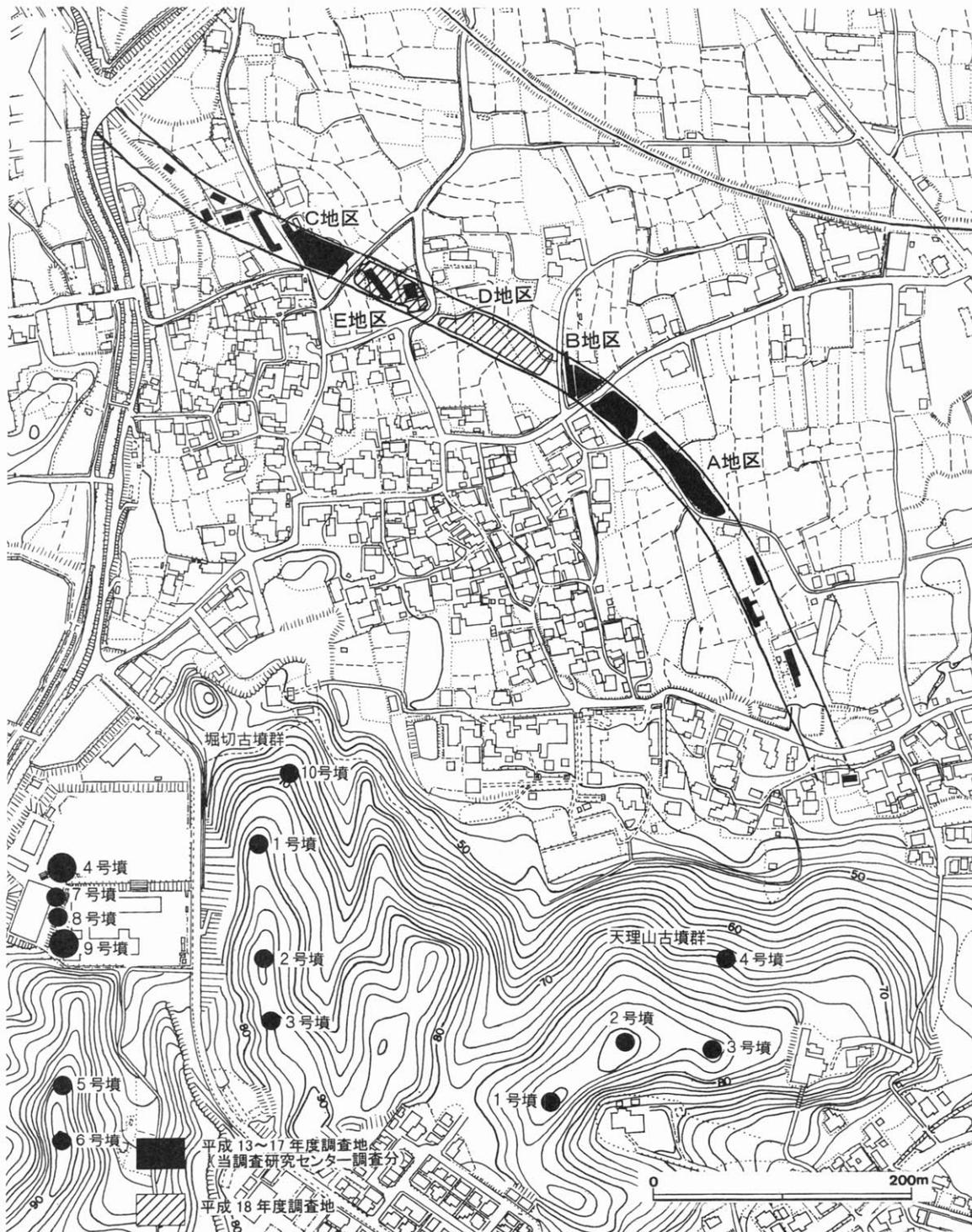
古墳時代では、前期の古墳として著名な飯岡車塚古墳(全長90m)や、中期では薪遺跡の北方に大住車塚古墳、大住南車塚古墳などの前方後円墳が知られている。薪遺跡周辺の丘陵部にも、前



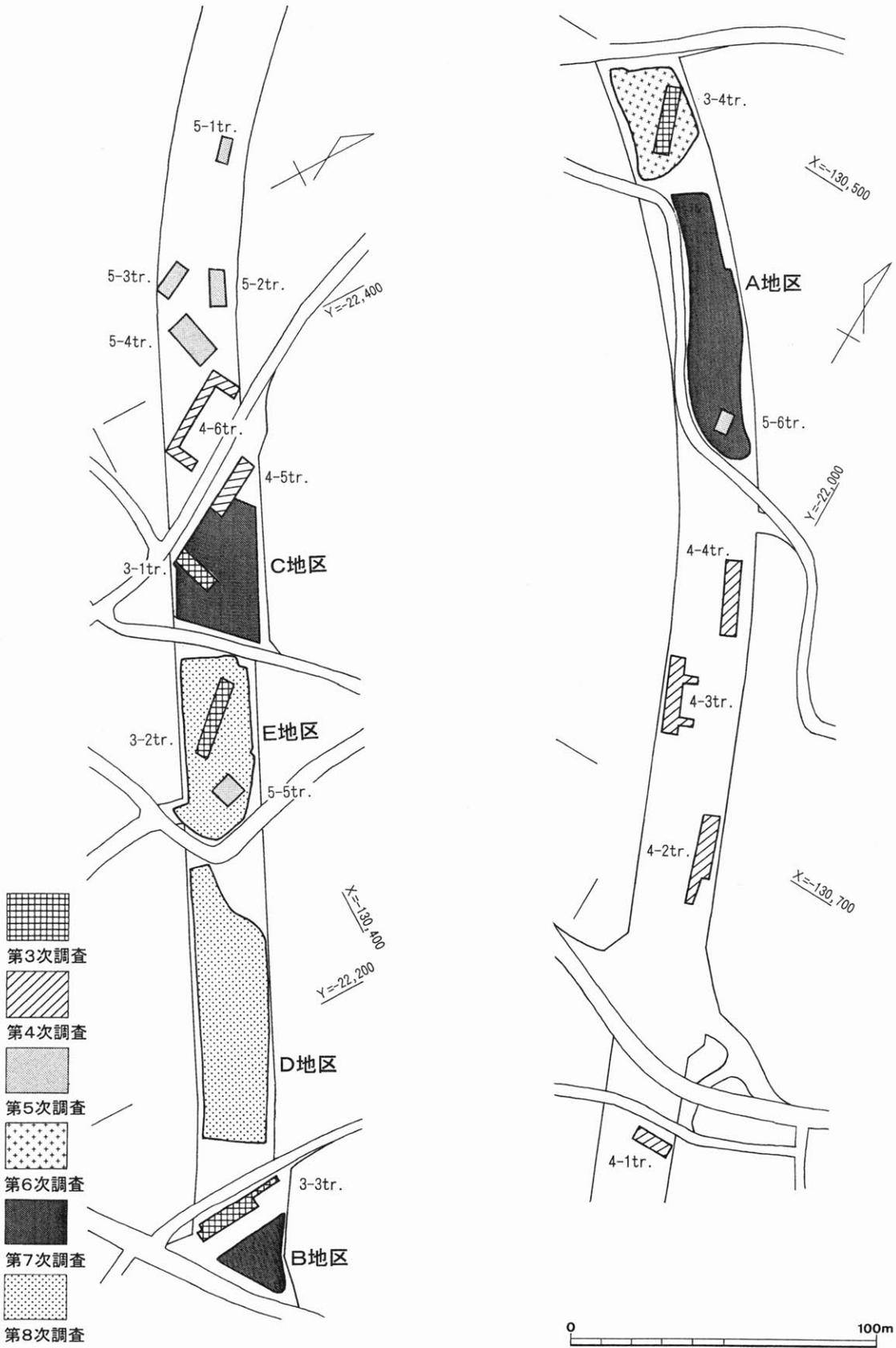
- | | | | | |
|-------------|-------------|-----------|--------------|-----------|
| A. 調査対象地 | 5. 大住車塚古墳 | 6. 大住南塚古墳 | 7. 姫塚古墳 | 15. 大欠1号墳 |
| 16. 狼谷遺跡 | 17. 畑山古墳群 | 18. 畑山遺跡 | 19. 西山古墳群 | 22. 堀切古墳群 |
| 23. 堀切横穴群 | 24. 薪遺跡 | 25. 西薪遺跡 | 26. 天理山古墳群 | 27. 小欠古墳群 |
| 29. 興戸遺跡堀 | 30. 興戸廃寺 | 31. 興戸古墳群 | 69. 田辺城跡 | 72. 宮ノ口遺跡 |
| 79. 興戸宮ノ前遺跡 | 84. 棚倉孫神社遺跡 | 85. 三野遺跡 | 109. 興戸丘陵東遺跡 | 122. 奥村遺跡 |
| 158. 田辺遺跡 | 162. 薪城跡 | | | |

第1図 調査地および周辺の主要遺跡(『京都府遺跡地図』「第3版」第3分冊から転載)

期から後期にかけて多くの古墳が築かれている。西側の丘陵には、郷土塚古墳群(6基)、畑山古墳群(4基)、西山古墳群(3基)、南側には堀切古墳群(10基)、天理山古墳群(4基)、小欠古墳群(3基)が築造されている。天理山古墳群(1号墳)でも粘土槨が露出し、中期古墳が存在することが明らかとなっている。このうち、郷土塚2号墳(中期)では、豊富な鉄器とともに家形埴輪・鳥形埴輪が出土している。堀切7号墳(後期前半)では人物埴輪・船形埴輪・靱形埴輪などの形象埴輪が多く出土している。



第2図 調査地位置図(1)



第3図 調査地位置図(2)

古墳時代末には、丘陵斜面には横穴墓も築かれ、松井横穴群、

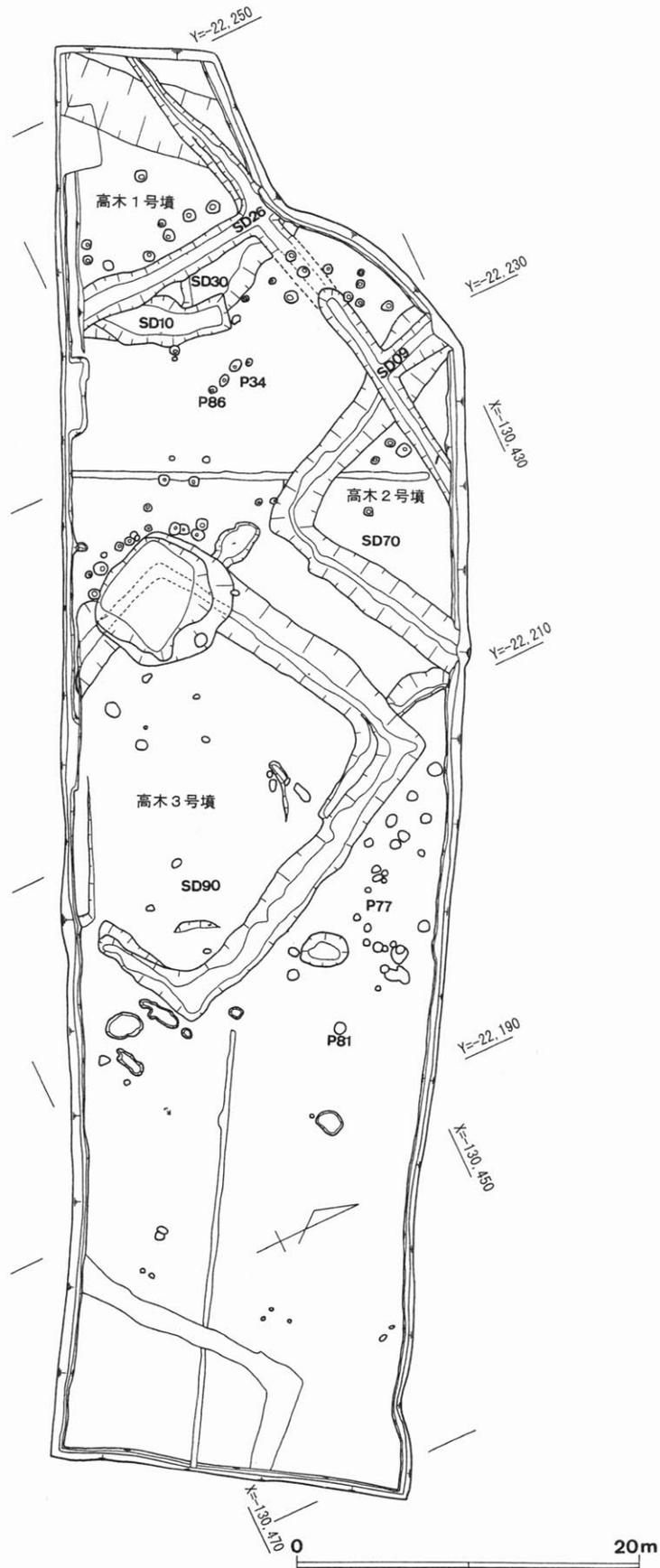
飯岡横穴群、薪遺跡南側には堀切横穴群が存在する。堀切10号横穴からは、8世紀の銅製帯金具が出土している。

飛鳥・奈良時代については、薪遺跡内でも多くの遺物が出土しており、徐々に遺跡の一端が明らかになりつつある。7世紀には京田辺市内に山陰道が通過し、和銅四(711)年には山本駅が設置される。8世紀には、現在に国宝の十一面観音立像を伝える観音寺(普賢寺)が建立される。

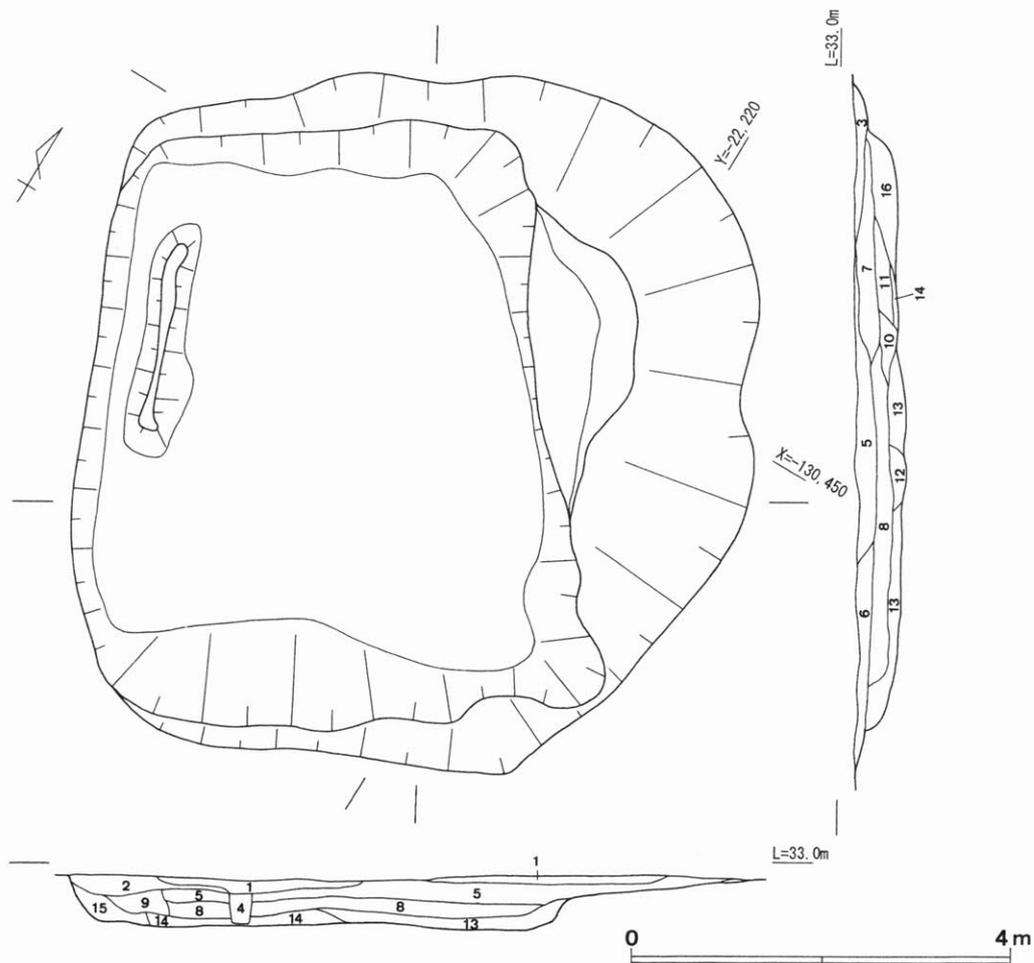
平安時代以降は、平安京造営の南目印とされた甘南備山に神奈比寺が建立される。平安時代後期末から鎌倉時代にかけての薪集落は、「薪荘」と呼ばれる石清水八幡宮の荘園に含まれていたようである。京田辺市教育委員会が実施した第2次調査では、一休禅師が晩年を過ごしたといわれる酬恩庵に隣接する地点で、中世の園池が検出されている。薪遺跡内でも中世までの多くの遺物が出土することから、今後の調査に期待される。

3. 調査概要

D・E地区とも重機により表土を除去し、遺物包含層を確認



第4図 D地区平面図



1. 淡褐色礫混じり土 2. 褐色礫混じり土 3. 黒灰色砂質土（礫混じり）
4. 暗茶褐色礫混じり土（淡黄褐色粘質土含む） 5. 茶褐色礫混じり土（土器多い）
6. 明茶褐色礫混じり土（土器混じり） 7. 暗褐色礫混じり土（土器多い）
8. 暗茶褐色礫混じり土（土器混じり） 9. 淡茶灰色礫混じり土 10. 淡黄灰色土
11. 淡黄褐色礫混じり土 12. 暗褐色礫混じり砂質土 13. 淡茶褐色礫混じり土 14. 淡黒灰色砂質土
15. 淡茶灰色砂質土 16. 焼土

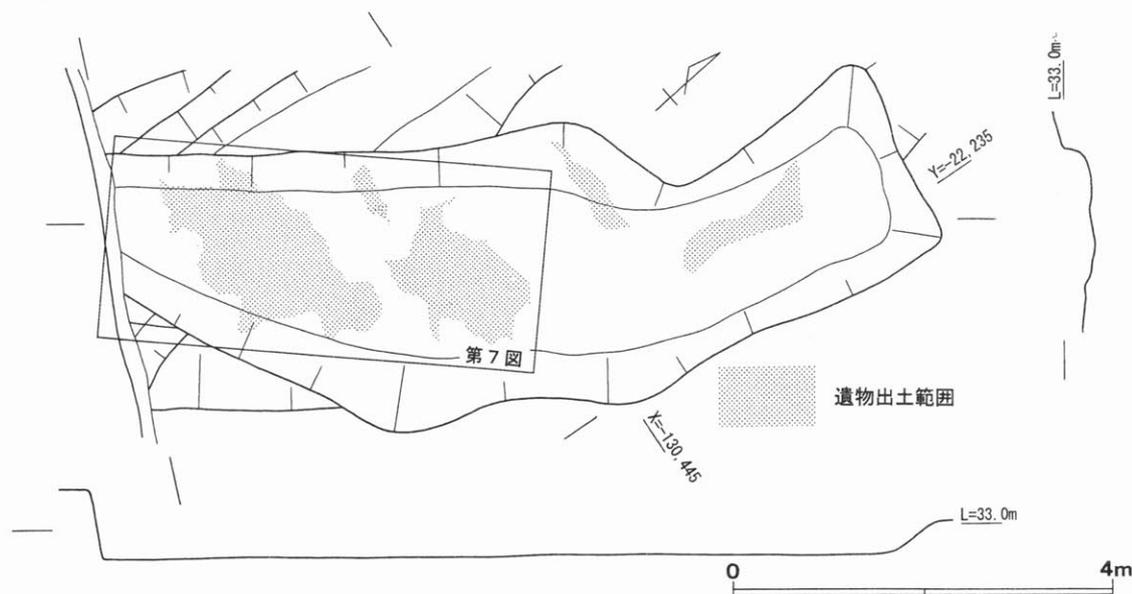
第5図 土坑SK01実測図

した後、人力掘削を行った。調査前には、D地区は畑・水田、E地区の一部は住宅地跡であり、多量の盛土が施され、部分的ではあるが、それに伴う現代の攪乱、削平を受けていた。掘削にあたっては、D・E地区とも表土と掘削土砂、コンクリート、アスファルトなど産業廃棄物の分別を行なって、掘削を実施した。また、調査地内の湧水については、汚泥流出防止環境対策として、調査地内に沈砂池を設け、泥水を沈殿させた後、排水するようにした。なお、D・E地区で確認された古墳については、周辺にまだ古墳が存在する可能性が高いことから、大字と小字no名を冠してD地区が薪高木1～3号墳、E地区のものを薪狭道1号墳とした。各地区の検出された主要遺構について、以下に概要を述べる。

(1) D地区

1) 基本層序(第9図)

現況は水田であり、南側から東に向かって段状に下がる地形を成す。手原川により形成された



第6図 溝S D 10実測図

扇状地の最高所に位置しており、砂・礫の流入による河川堆積を成している。

トレンチ西端での土層の堆積状況は、耕作土が約0.25～0.4mの厚さで堆積し、その下には淡茶褐色砂質土からなる床土層が約0.12mある。その下層は酸化物が約2～3cm沈着した硬い茶褐色砂質土からなる層が0.1～0.15mあり、この下層より下は、縄文土器を含む暗灰褐色砂質土の遺物包含層が0.15～0.2mあり、これを除去すると遺構検出面となるが、この面は、削平に伴い河川の流入による自然流路や、氾濫に伴う洪水砂および砂礫の堆積が各所に認められた。段地形が物語るように、遺構検出面は上段にあたる西側では標高33.25m、中段の中央部分では32.85m、下段の東側では31.80mと東側ほど低くなり、削平度合いも大きいようである。これに比例して、東側では遺構の密度も低く、近世以降の遺構が検出されている。各所により遺構検出面の基盤層は異なるが、基本的には黄褐色粘質土ないし黄褐色礫混じり粘質土である。削平が著しい場所では、下層の氾濫に伴う砂礫層が露出した面で検出したものもある。

2) 検出遺構(第4図)

遺構の分布は上段・中段に密集しており、トレンチ中央部分の薪高木3号墳より東側は少なく、削平を受けたようで近世以降の柱穴・土坑・溝などの遺構が認められる。このうち、トレンチ西端で検出したS D 09・26は現在の畦畔とは異なり、ほぼ方位に沿って方形に区画されるもので、溝4条を検出した。時期は不明であるが、埋土内から混入遺物として、奈良時代～中世の遺物が出土している。近世以降の田畑の耕作に伴う区画溝と考えられる。検出された遺構は、上層遺構として奈良時代から平安時代にかけての土坑、奈良時代～中世の柱穴・土坑・溝、下層遺構面では古墳3基を検出した。柱穴は建物跡を特定するまでには至らなかった。

①奈良時代の遺構

土坑S K 01(第5図、図版第5・6)



第7図 溝S D10遺物出土状況図(遺物番号は実測図に対応)

トレンチ中段の南端付近で検出した。薪高木3号墳S D90北西角付近に設けられたものである。S D90に平行する一辺7.1mの隅丸方形土坑である。底面はほぼ平坦である。検出面からの深さ0.5mを測る。検出面上からは須恵器、土師器、製塩土器、瓦、銅製帯金具、鉄製品、石製品、縄文土器片、フイゴ羽口、鉄滓が出土した。特に須恵器、土師器は多量に出土した。出土した遺物の大半は、細片化している。当初、規模から井戸の可能性を想定して掘削を開始したが、検出面となる淡褐色礫混じり土・黒灰色礫混じり砂質土・茶褐色礫混じり土・明茶褐色礫混じり土より出土する遺物を除くと、下層からは遺物はほとんど出土せず、炭や焼土が混入したほぼ水平堆積の状況を呈する。土坑北端の底面には、1.4m×0.6m、厚さ0.3mにわたって焼土の堆積が認められた。この土坑は、多様な遺物の出土や細片化していることなどから、廃棄土坑と推

定される。出土遺物から8世紀後半と考えられる。

溝S D10(第6・7図、図版第6・7)

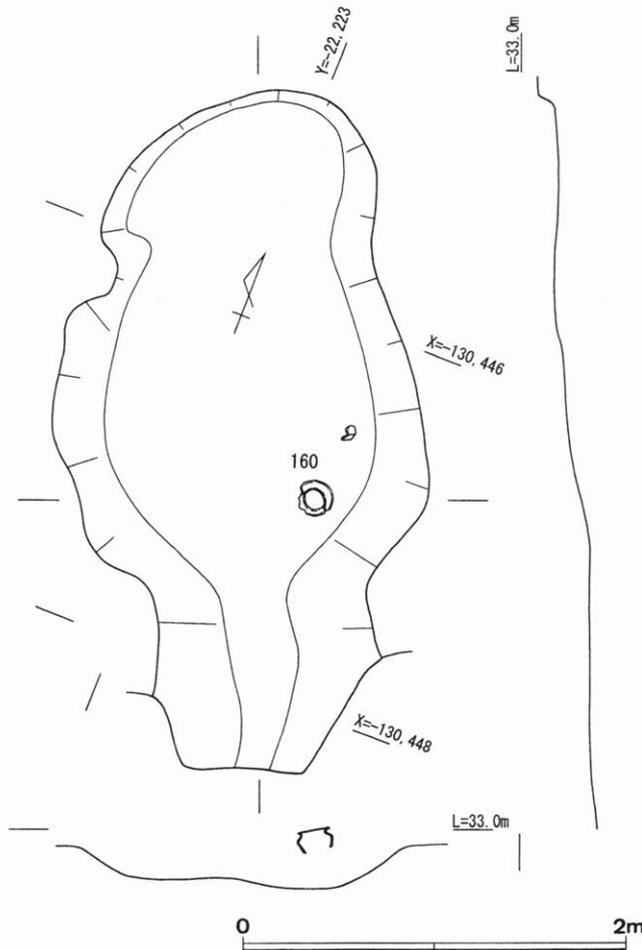
トレンチ北西端、上段と中段の境で検出したもので、薪高木1号墳S D30の上に設けられたものである。北端が途切れ、上方は田畑の耕作に伴う溝S D26に削平を受ける。検出長8.3m、幅1.5~2.9m、深さ0.3mを測る。中央部が広く、両端が極端に狭くなる。埋土は暗褐色・灰褐色土で、埋土中から須恵器、土師器、円筒形土製品などとともに円筒埴輪・朝顔形埴輪片が出土した。S D30掘削面に接して遺物が出土することから、溝が掘削されて間もなく投棄されたものと考えられる。溝としたが、土坑の可能性もある。出土遺物から8世紀後半頃と考えられる。

土坑S K13(第8図) S K01の北側で検出したもので、S K01に切られる。形状から土坑としたが、溝の可能性もある。検出長3.5m、幅1.1~2.1m、深さ0.1m~0.3mを測り、北から南に向かって緩やかな傾斜をもつ。埋土は暗茶褐色粘質土で、須恵器杯蓋・身、壺、平瓶、土師器甕が出土した。古墳時代の遺物も含まれるが、8世紀後半と考えられる。

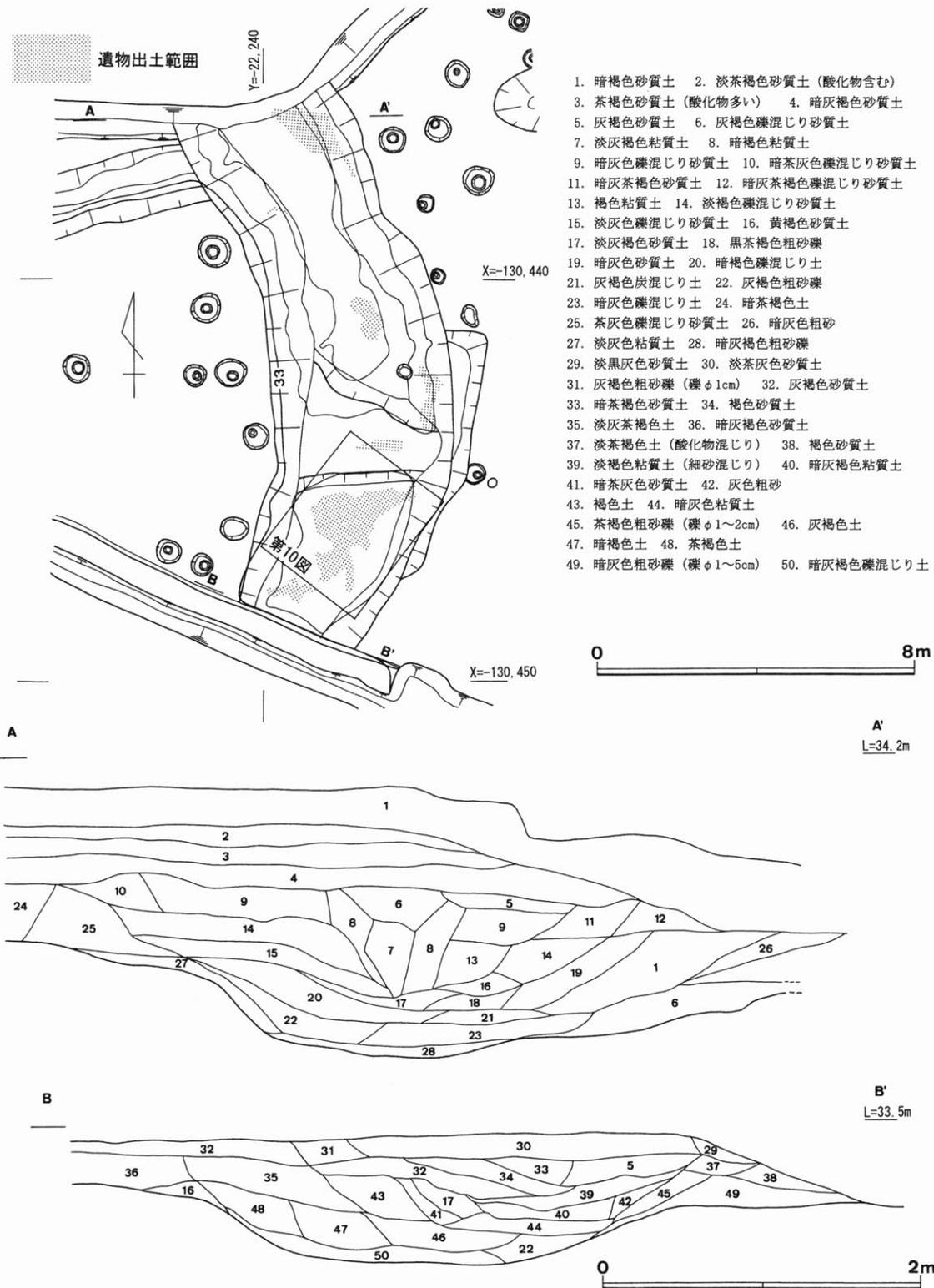
②古墳時代の遺構

薪高木1号墳溝S D30(第9図、図版第7~10) トレンチ北西端の上段部分で古墳の周溝の一部を検出した。耕作に伴う溝S D26と奈良時代の溝S D10と切り合う。地形を見る限り調査地

外の北側、南側は現地形より高く、断面図でも溝が良く残っているが、調査地内は削平が著しい。上段の墳丘側と中段側との比高差は約0.2mあり、中段側が土地利用に伴い大きく削平を受けている。溝が弧を描いていることから、直径20m前後の円墳と推定される。大半が調査地外となるが、検出した部分だけで見た場合、溝の中央部分が幅3mにわたり、南・北側の底面から約20~24cm高くなっている。陸橋状の施設の可能性もある。周溝の規模は幅約3.2~4.6m、深さ0.6mを測り、約13mを検出した。周溝内からは、全域で細片化した円筒埴輪・朝顔形埴輪片、甲冑形埴輪草摺・家形埴輪片が出土した。特にS D



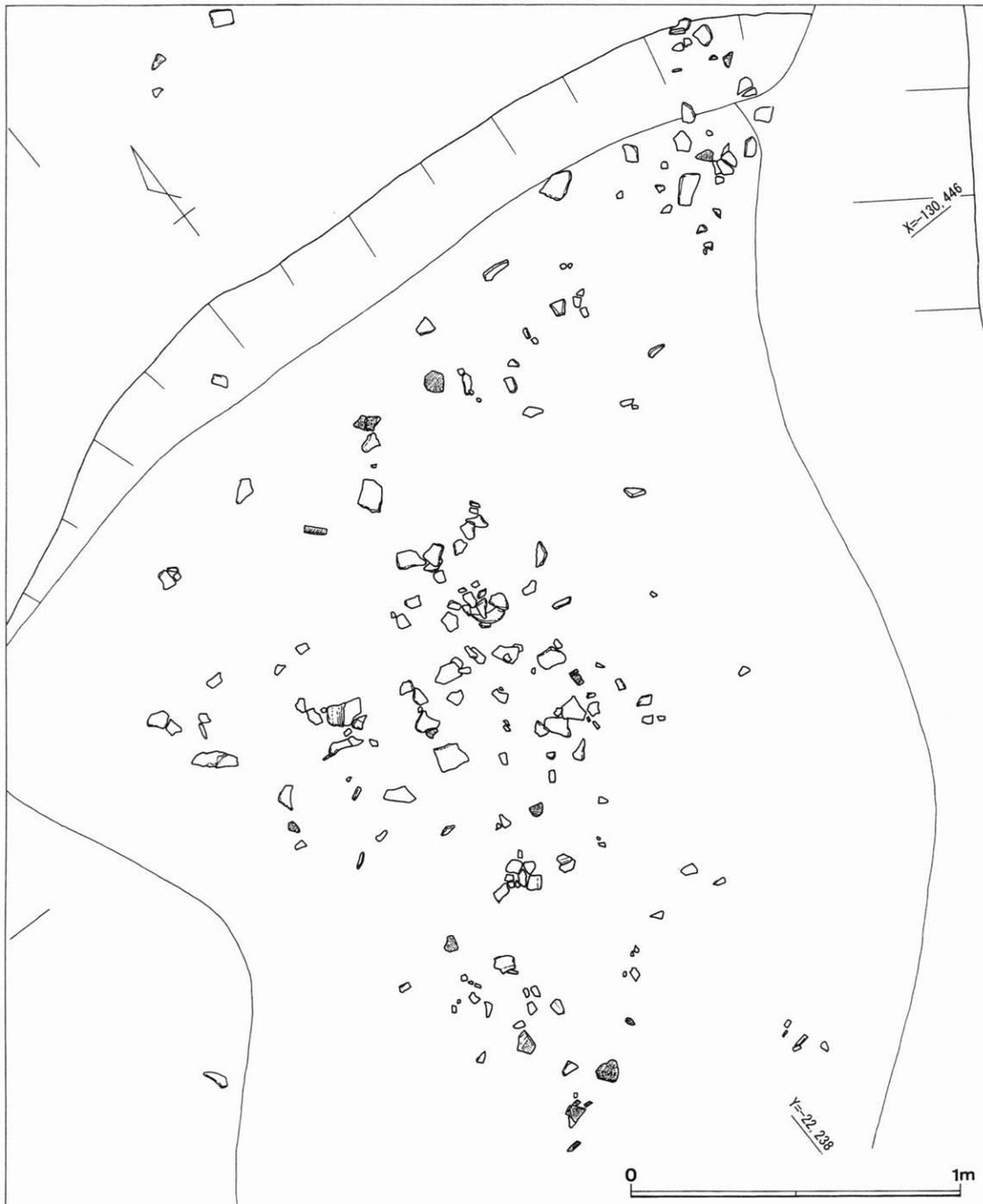
第8図 土坑S K13実測図



第9図 薪高木1号墳SD30実測図

10の下からはやや大型の朝顔形埴輪片が認められた。

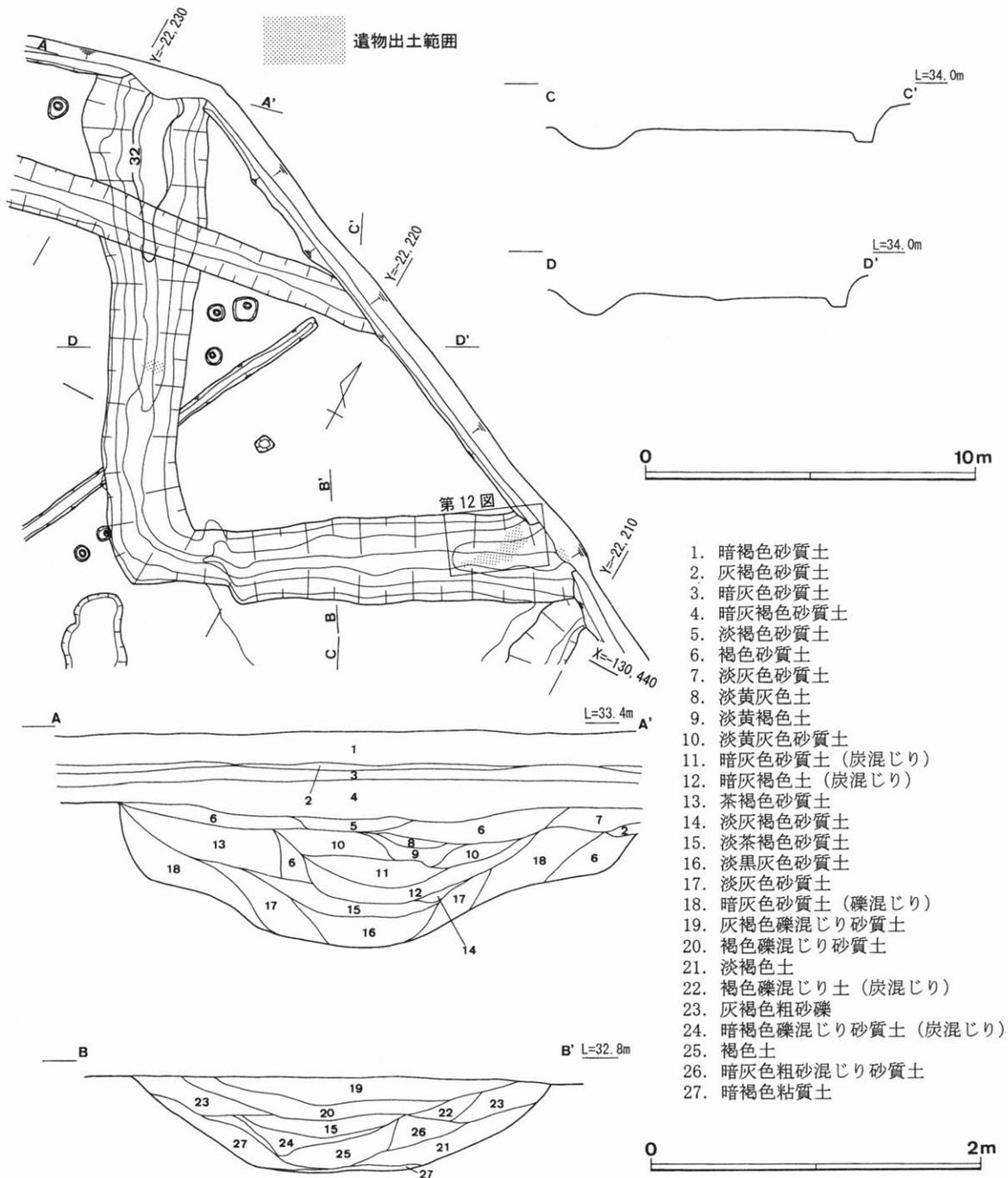
埋土の堆積状況は、南壁では最下層に墳丘からの流入土とともに遺物が出土する暗灰褐色礫混じり土、灰褐色粗砂礫層がある。北壁では最下層に灰褐色粗砂礫、暗灰褐色礫混じり土の流入土があり、この上の灰褐色炭混じり土、暗灰色礫混じり土は埴輪を含む墳丘を壊した時期の層となる。これより上層は、墳丘の削平土及びSD10・26で整地されている。



第10図 薪高木1号墳S D30遺物出土状況図(遺物番号は実測図に対応)

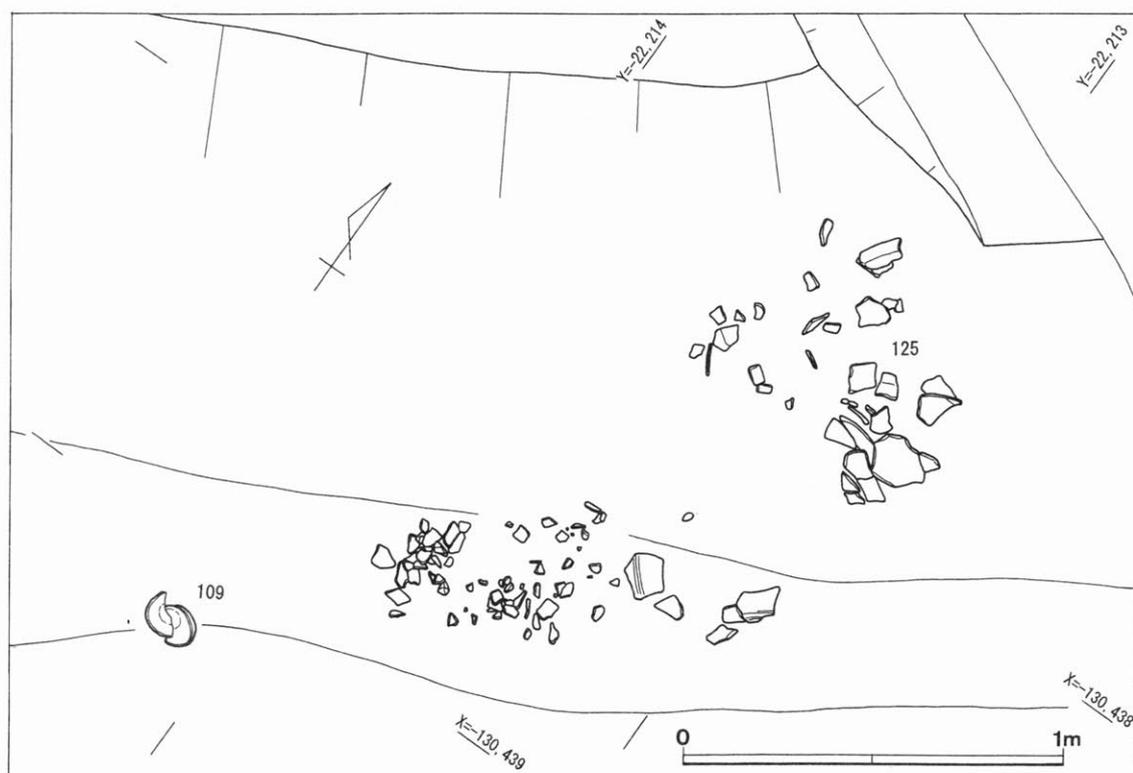
墳丘上では、中世及び奈良時代と考えられる柱穴が検出されたが、建物跡を特定することはできなかった。また、これらを切る形で墳丘中央部には自然流路が認められ、中世以降も河川の氾濫があったものと推察される。墳丘中央付近まで断ち割り、主体部の有無の確認を行ったが、上記した流路により流失したためか存在しなかった。

墳丘の削平時期については、周溝内に認められた出土遺物から、遅くとも7世紀後半頃と考えられる。



第11図 薪高木2号墳S D70実測図

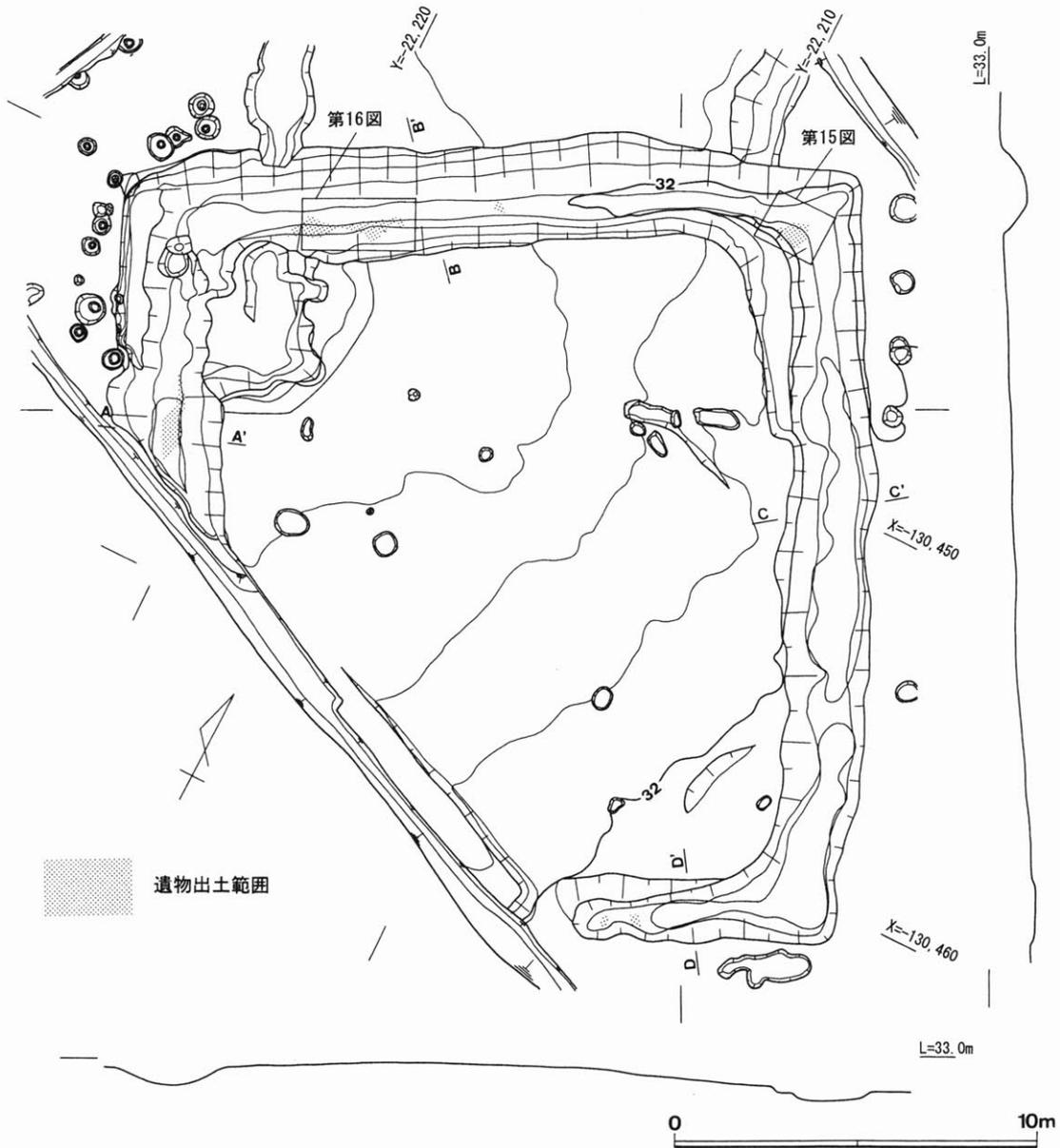
薪高木2号墳S D70(第11・12図、図版第11~14) 中段のトレンチ北端で、墳丘周囲を巡る方墳の周溝の一部を検出した。東西方向に延びるS D09、それより分岐して周溝内を平行して延びる溝に一部切られているが、周溝の幅は北西側で3.1m、深さ0.8m、北東側の幅1.7m、深さ0.6mを測る。埋土の状況は、南東溝で見た場合1・20・21・23~25層の褐色系の炭・粗砂・礫混じり土は墳丘の削平土である。23・25層は、遺物を多く含む墳丘を壊した時期の層となる。その下層の28層は、暗褐色粘質土(腐植土層)であり、一定期間周溝内に水があった時期に堆積したもので、遺物は含まれない。21~23層には墳丘盛り土を構成する土砂と遺物が混入しており、短期



第12図 薪高木2号墳S D70遺物出土状況図(遺物番号は実測図に対応)

間に人為的に埋められたものといえる。北西側の溝内からは、古墳に副葬されていたと考えられる須恵器杯・甕・鉄製品、南東周溝からは、壊した際に混入した円筒形土製品や土師器杯が出土している。7世紀後半には墳丘が削平され、8世紀後半には再び平坦化されたと考えられる。周溝内からは石材の出土もなく、埋葬施設は木棺直葬墳であったと考えられる。2号墳は、墳丘隅部分が1カ所しか確認されなかったが、周溝規模が似ていることから、3号墳同様、一辺19m前後を測る方墳と考えられる。

薪高木3号墳S D90(第13～16図、図版第14～19) 薪高木2号墳の南側に並ぶ、トレンチの中央部の中段と下段にまたがる周溝を検出した。一辺19mを測る方墳で、墳丘北・西・東隅部分を確認した。水田造成時に墳丘中央より東側は大きく削平を受け、北東側の溝は農業用水路と重なっているため、残存状況が良好でない。また、西隅付近はS K01と切り合う。良好な検出状況である北西側溝中央付近では幅2.9m、深さ0.8mを測る。南側では幅1.6m、深さ0.12mを測る。北西周溝の埋土の11～16層は、墳丘の削平土である。暗褐色粘質土、黄褐色系の粘質土・礫混じり土の17～20層は、遺物を多く含む墳丘を壊した時期の層となる。いずれの土層断面でもその最下層の22層は黒褐色粘質土(腐植土)であり、一定期間周溝内に水があった時期に堆積したもので、遺物は含まれない。19・20層には墳丘盛り土を構成する土砂と遺物が混入しており、短期間に人為的に埋められたものといえる。北隅付近の墳丘側斜面では、須恵器甕が転落した状態で出土した。墳丘削平時に転落したものである。この甕より西側からS K01下層、南側のトレンチ端までは、溝内全面に副葬されていたと考えられる細片化須恵器、土師器、鉄製品などの遺物が出土している。また南側の周溝検出面からは、滑石製紡錘車も出土している。溝内の出土遺物から、



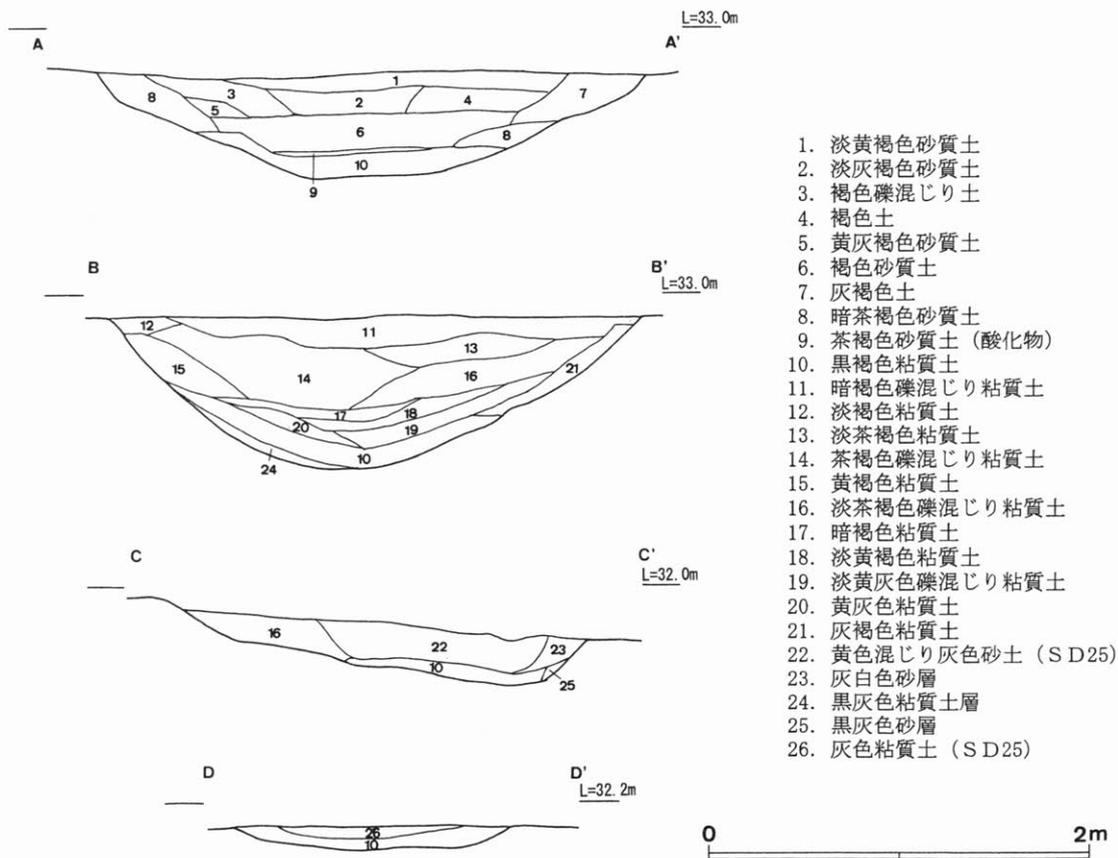
第13図 薪高木3号墳S D90実測図

7世紀後半には墳丘が削平されたと考えられ、8世紀後半には新たな土地利用に伴い削平後に整地が行なわれたようである。周溝内からは石材の出土もなく、埋葬施設は木棺直葬墳であったと考えられる。

(2) E地区

1) 基本層序(第18図)

現況は水田であるが、トレンチ中央部分の第5次調査地周辺は宅地で、盛土が0.8m施されていた。また、それに伴うコンクリート擁壁の基礎が遺構面にまで達していた部分もある。D地区との境付近を最高所に東側が一段高く、西側が低い二段からなる段地形を成す。土層の堆積状況は、盛土を除去すると、表土下約1mで旧耕作土ないし床土と考えられる灰褐色粘質細砂土があり、その下層には酸化物を多く含む硬い暗茶褐色砂礫土がある。この層を除去すると、遺構検出



第14図 薪高木3号墳S D90土層断面図

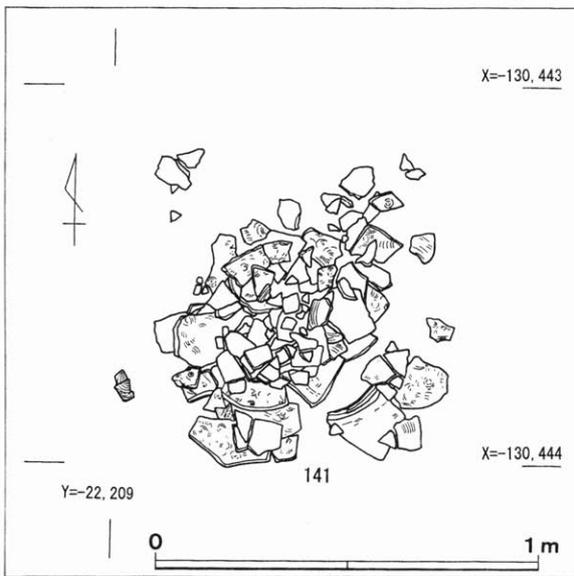
面である黄褐色粘質土となる。遺構検出面は、場所にもよるが低位側では暗灰褐色系の砂礫や砂礫混じりの粘質土となっている。遺構検出面は、東側の高位側で標高33.5m、西側の薪狭道1号墳付近で33.5m、S K40北側で33mと全体的に南から北に向かって緩やかに下がる。第5次調査で検出されていた縄文時代の遺物包含層ないし基盤層と考えられる暗緑青灰色粘質土は、この遺構検出面の下層に広がるものである。暗緑青灰色粘質土の下層は、砂礫・砂礫混じりの粘質土が広がり、南から流れ込んだ流路跡の堆積をなしており、この暗緑青灰色粘質土は部分的にしか認められなかった。第3次調査トレンチでも古墳下層は砂礫の堆積が認められる部分があり、E地区の古墳時代以前の遺構面は、流路により削られている可能性があり、それに伴い暗緑青灰色粘質土は流失した可能性もある。

2) 検出遺構(第17図)

遺構の分布としては、トレンチ東端に多く密集し中央部分は少ない。検出した遺構は、古墳1基、竪穴式住居跡1基、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝1条、湿地である。平成17年度調査地C地区の東側に位置するが、C地区東端で検出されていた縄文時代後期の流路跡は検出されなかった。古墳北側にC地区同様の堆積状況を示す流路跡を検出したが道路近くであり、崩壊の危険もあるため掘削できなかった。C地区南西から薪狭道1号墳方向に流れている流路が、古墳から北に方向を転じているかも知れない。いずれにしろ、両地区を挟む道路付近を流れるものと考えられる。



第15図 薪高木3号墳S D90遺物出土状況図(1)(遺物番号は実測図に対応)



第16図 薪高木3号墳S D90遺物出土状況図(2)
(遺物番号は実測図に対応)

1) 奈良時代の遺構

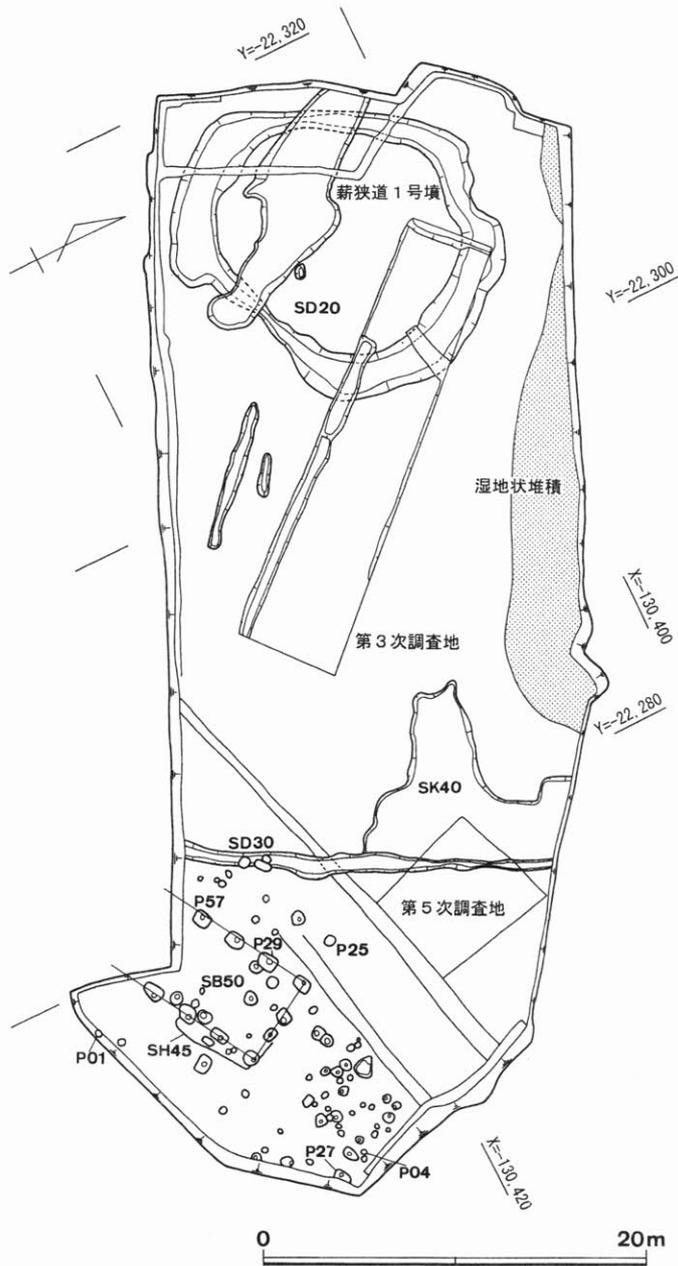
掘立柱建物跡 S B 50(第19図、図版第2・22)
調査地東端で検出したもので、桁行が調査地外となる。竪穴式住居跡 S H 45と重なり合っている。建物規模は、東西3間以上(7.2m)、南北2間(4.9m)の東西棟建物である。柱掘形は隅丸長方形で、一辺0.6~1mあり、深さは0.18m~0.5mを測る。柱間寸法は梁間が2.3m、1m、1.6m、桁行は2.1m(7尺)の等間隔である。柱穴の埋土は、暗灰褐色粘質土ないし暗茶褐色粘質土である。柱の痕跡は直径25cmを測る。建物の主軸主軸はN30°Eである。時期は、奈良時代前期~後期と考えられる。

土坑 S K 40(第20~23図、図版第22~26) 掘立柱建物跡 S B 50の北側で検出したもので、不整形な形をした広範囲に広がる土坑で、湿地状の落ち込みとも考えられる。深さ0.24~0.48mを測る。埋土内から須恵器や土師器の杯・高杯・皿・鉢・鍋・甕・甑・製塩土器など多数出土したほか、瓦や円面硯などの出土も認められた。出土状況から奈良時代後半の廃棄土坑と考えられる。第5次調査で検出されていた溝・土坑については、狭い調査面積であることから、S K 40が埋まっていく過程での土層の相違から遺構と判断されたもので、断面図からもそれが確認できる。一方、縄文時代後期の遺構とされた S X 12や包含層については、広範囲の断ち割りを行った結果、黄褐色粘質土の遺構検出面の下層は流路となっており、砂礫の堆積上に形成されていることが明らかとなった。暗緑青灰色粘質土の縄文時代の包含層ないし基盤層は、試掘トレンチ東端でこの流路により削られた状態で確認した(第18図、図版第27)。S X 12はこの包含層が一部流失したも

のと考えられる。この包含層は、5次調査トレンチ北角から南東角より西側に約1mと、東側に約50cm程の狭い範囲に残存しており、細片化した縄文土器が少量出土した。

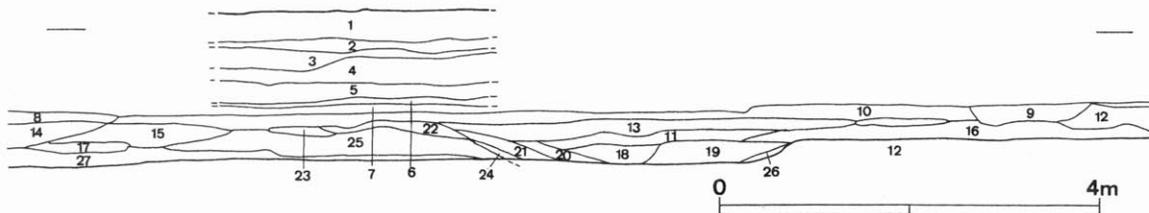
溝SD36(第24・25図、図版第22・23) 第5次調査トレンチ北西側で検出されていたSD13の延長部分である。南西から北東に向かって直線的に流れるもので、溝幅約0.5~1.5m、深さ0.18m~0.55mを測り、19mを検出した。SK40上を通過している。内部埋土は、淡褐色粘質土であり、遺物は細片化した土師器、須恵器が少量出土した。出土遺物から8世紀後半と考えられる。

そのほかに、SK40西側から薪狭道1号墳北側にかけてのトレンチ北壁沿いで、河川の流入堆積後に形成されたと考えられる、浅い湿地状の堆積を確認した。湿地と遺構検出面境には、拳大の礫が点々と存在しており、削平されたときに混入したものと考えられる。埋土中には埴輪片を含む瓦器が混じっており、中世段階の湿地と推定される。



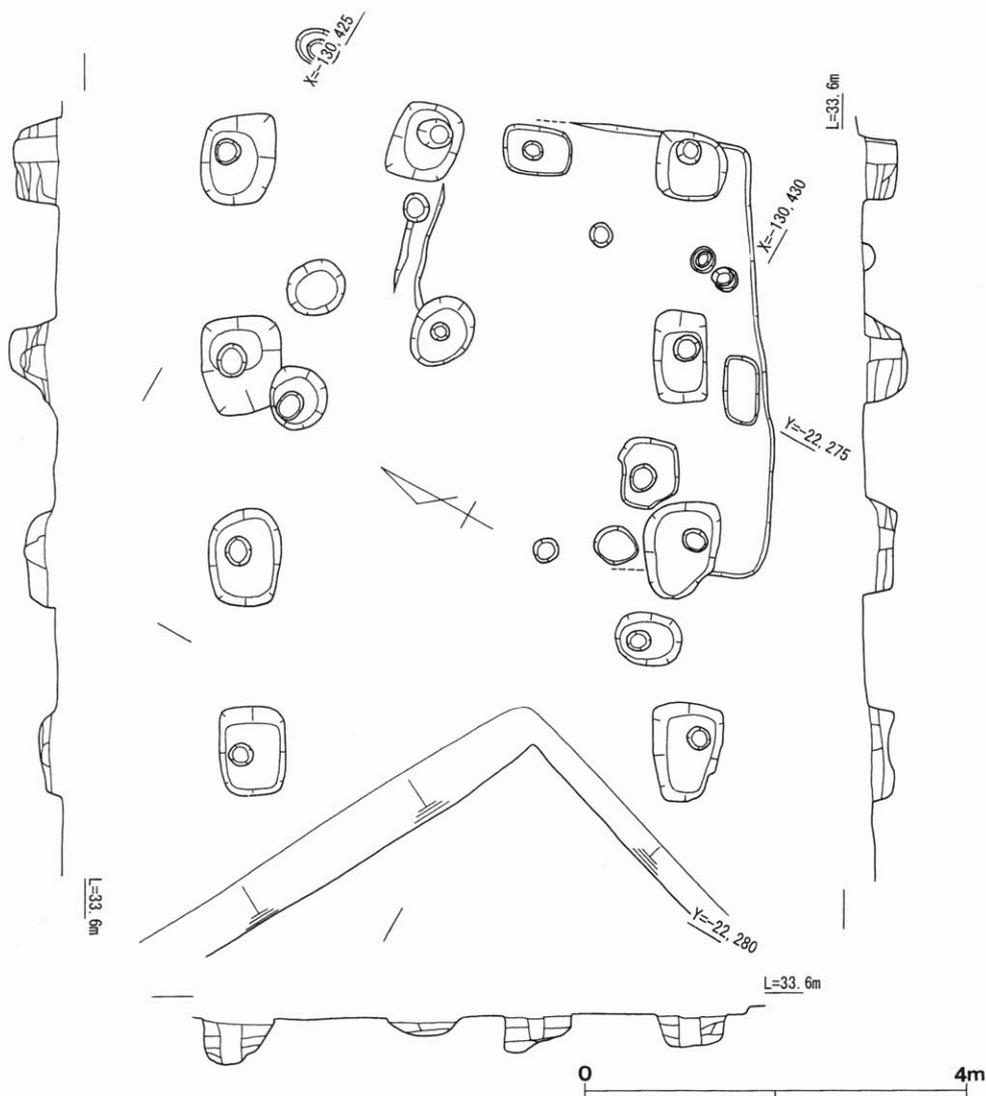
第17図 E地区平面図

2)古墳時代の遺構



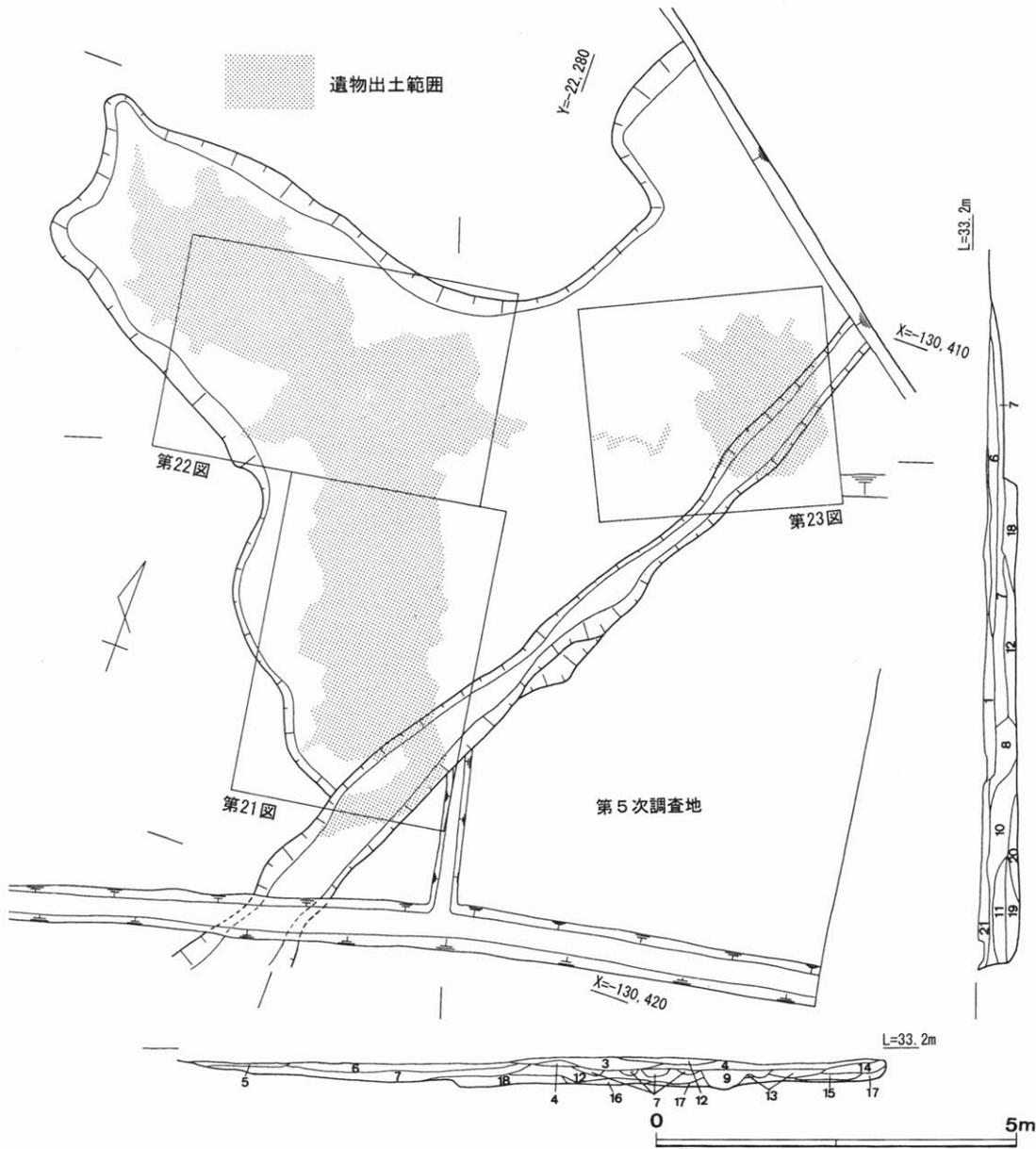
1. 濁黄灰色砂質土 2. 灰色粘質土 3. 暗黄灰色粘質土 4. 明黄灰色砂質土
5. 黒灰褐色砂質土(旧表土) 6. 灰褐色シルト混じり細砂 7. 黄褐色粘質土 8. 淡褐色砂質土
9. 暗茶褐色礫混じり砂土 10. 黄茶褐色砂質土(酸化物多い) 11. 淡灰色礫混じり粘質土
12. 暗灰青色粘質砂 13. 緑灰色粘質砂 14. 茶褐色礫混じり粘質土 15. 淡茶褐色粘質土
16. 明褐色粗砂礫 17. 淡茶褐色礫混じり粘質土 18. 褐色粗砂礫 19. 淡灰色粗砂礫 20. 褐色粗砂
21. 暗灰色粗砂礫 22. 淡緑灰色砂 23. 暗灰色細砂 24. 暗灰青色粘質土 25. 暗緑青灰色粘質土
26. 灰褐色粗砂礫 27. 暗褐色粗砂礫(礫少ない)

第18図 E地区土層断面図



第19図 掘立柱建物跡 S B 50・竪穴式住居跡 S H 45実測図

薪狭道1号墳 S D 20(第26~28図、図版第27~34) トレンチ西端で検出したもので、墳丘中央付近には南から北に向かって流れる自然流路が認められる。削平が著しいが、溝の中心間で直長径15.5m、短径12.5mを測る、ややいびつな楕円形の円墳である。周溝幅0.6m~2.7m、深さ0.2m~0.4mを測り、北側が最も深い。良好な検出状況である北西周溝中央付近では、幅2.7m、深さ0.3mを測る。北側での埋土の状況は暗褐色砂質土(1層)は墳丘の削平土である。淡褐色砂質土、黒灰色砂質土、黒褐色粘質土(2~4層)は、遺物を多く含む墳丘を壊した時期の層となる。2・3層には墳丘盛り土を構成する土砂と遺物が混入しており、短期間に人為的に埋められたものといえる。西側の周溝内最下層は一定期間滞水していたようで、黒褐色粘質土(腐植土)が確認できた。周溝内全面にわたり細片化した円筒埴輪片が出土したが、西側・北側では特に多くの埴輪片とともに、墳丘削平時に転落したものと思われる、須恵器壺、土師器杯、円筒埴輪・家形埴輪・馬形埴輪・甲冑形埴輪・盾形埴輪・鶏形埴輪、鉄斧が出土した。埋葬施設については、後世の土地利用に伴い墳丘が削平されているため残存しなかった。石材等の出土が認められないことから、木棺直葬墳と考えられる。溝内の出土遺物から奈良時代前半には、墳丘が削平されたと考



- 1. 茶褐色粘質砂土 (酸化物多い) 2. 灰色粘質土 3. 淡灰褐色砂質土 (酸化物混じり)
- 4. 灰褐色砂質土 (酸化物混じり) 5. 淡褐色粘質砂土 6. 黒褐色粘土 (炭混じり)
- 7. 淡黒褐色粘質砂土 (炭混じり) 8. 黒褐色砂質土 9. 茶褐色粘質砂土 (炭混じり)
- 10. 緑灰色粘質砂 11. 淡灰色礫混じり粘質土 12. 淡黄灰色粘質土 13. 暗灰色砂質土
- 14. 淡灰褐色砂質土 15. 灰褐色粗砂 16. 黄灰褐色砂 17. 暗灰色粗砂 18. 淡灰色粗砂
- 19. 淡灰色粗砂礫 (φ 1cm) 20. 淡灰色粗砂礫 (φ 1cm) 21. 緑灰色粘質砂

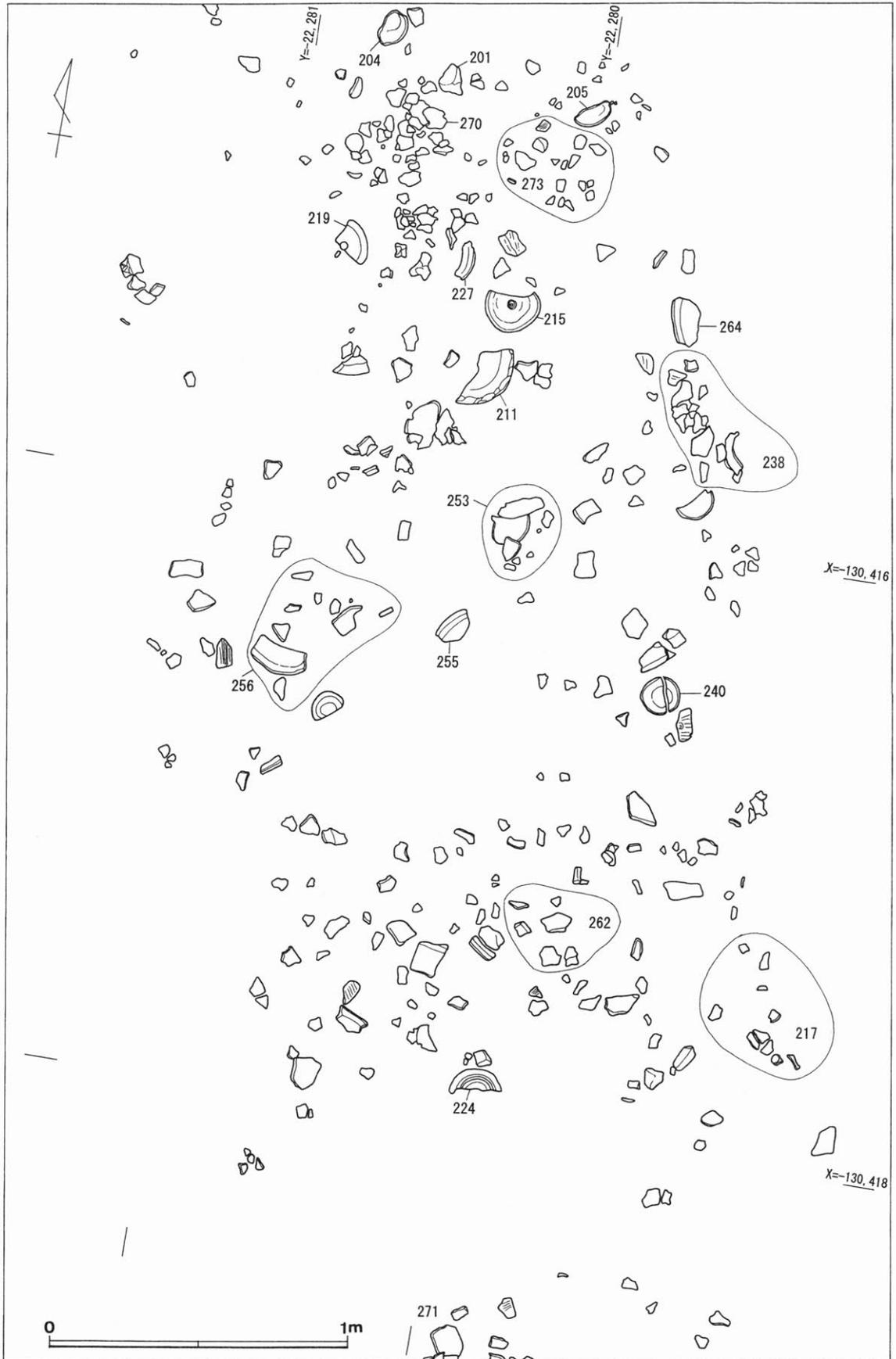
第20図 土坑S K40実測図

えられる。

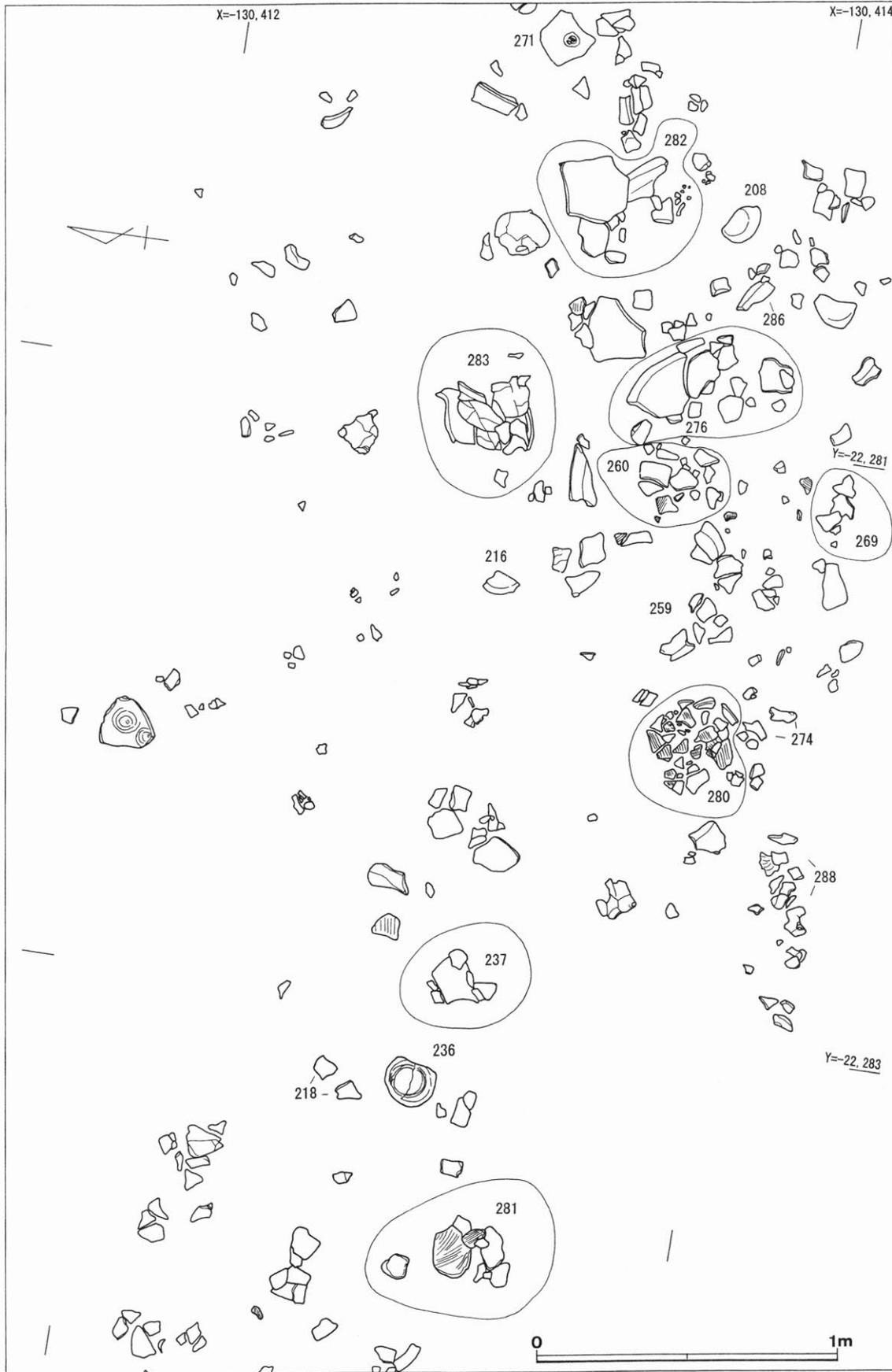
竪穴式住居跡S H45(第19図、図版第2・22) 一辺約5m四方の方形の住居と推定されるが、西側1/2が削平されている。深さ約8cmが残存していた。主柱穴は掘立柱建物跡S B50と切り合っているものと考えられる。遺物は出土しなかったが、周辺から出土する遺物から6世紀末～7世紀前半にかけての住居跡と考えられる。古墳築造に関わるものであろうか。

4. 出土遺物

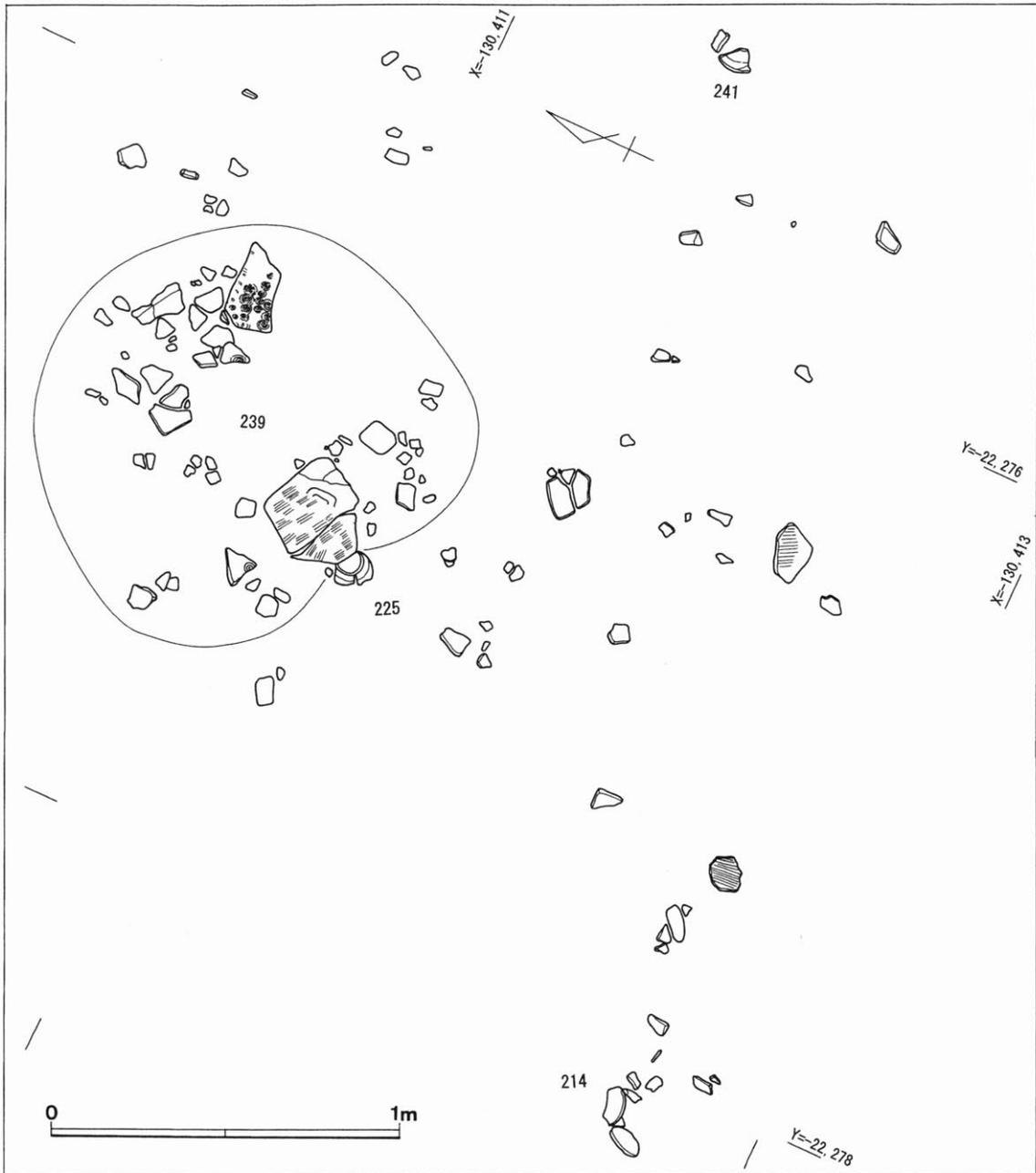
今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、埴輪、黒色土器、緑釉



第21図 土坑S K 40遺物出土状況図(1)(遺物番号は実測図に対応)



第22図 土坑S K40遺物出土状況図(2)(遺物番号は実測図に対応)

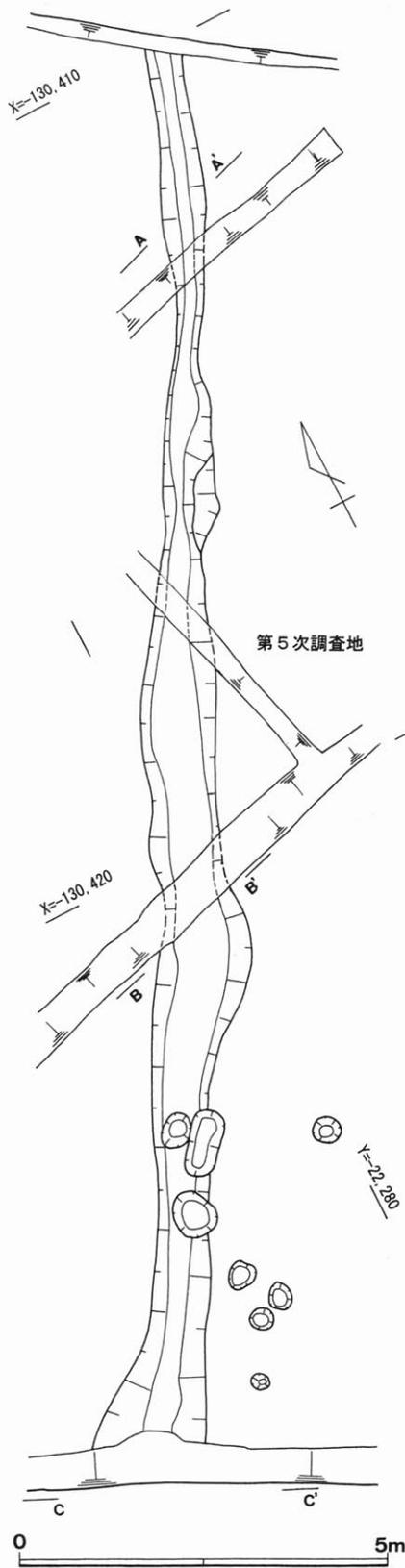


第23図 土坑S K 40遺物出土状況図(3)(遺物番号は実測図に対応)

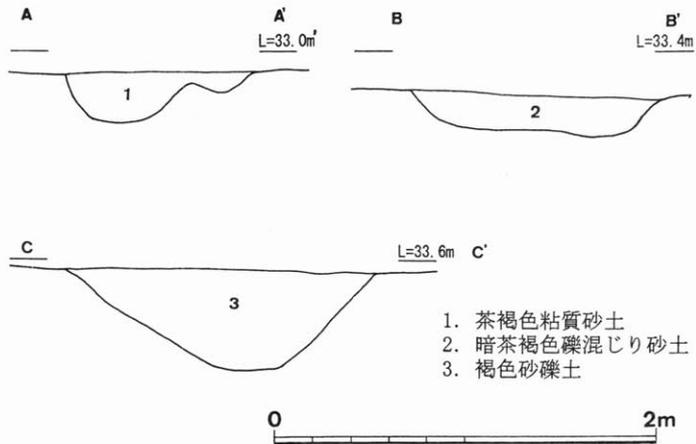
陶器、瓦器、製塩土器、瓦、土製品、フイゴ羽口、鉄製品、銅製品、石製品、鍛冶生産関連遺物など多種におよぶ。

(1) D地区

S K 01出土遺物(第29～31図、図版第36・38) 縄文時代～奈良時代後半頃の遺物が出土している。1～6は、杯B蓋である。1・2は宝珠つまみがつき、蓋内面にかえりが付くものである。3は、扁平な宝珠つまみが付くが、蓋にかえりは付かない。4は、口縁部に水平に延びる面を作りだし端部を下方に曲げるものである。5・6は、笠形天井から垂直に垂下する口縁端部をもつものである。7は杯身である。口縁部の立ち上がりの低い小振りのもので、古墳時代後期のものである。8～15は杯Aで、8～11は平底で口縁部をやや内湾気味に仕上げる椀形状のものである。



第24図 溝 S D 36 実測図



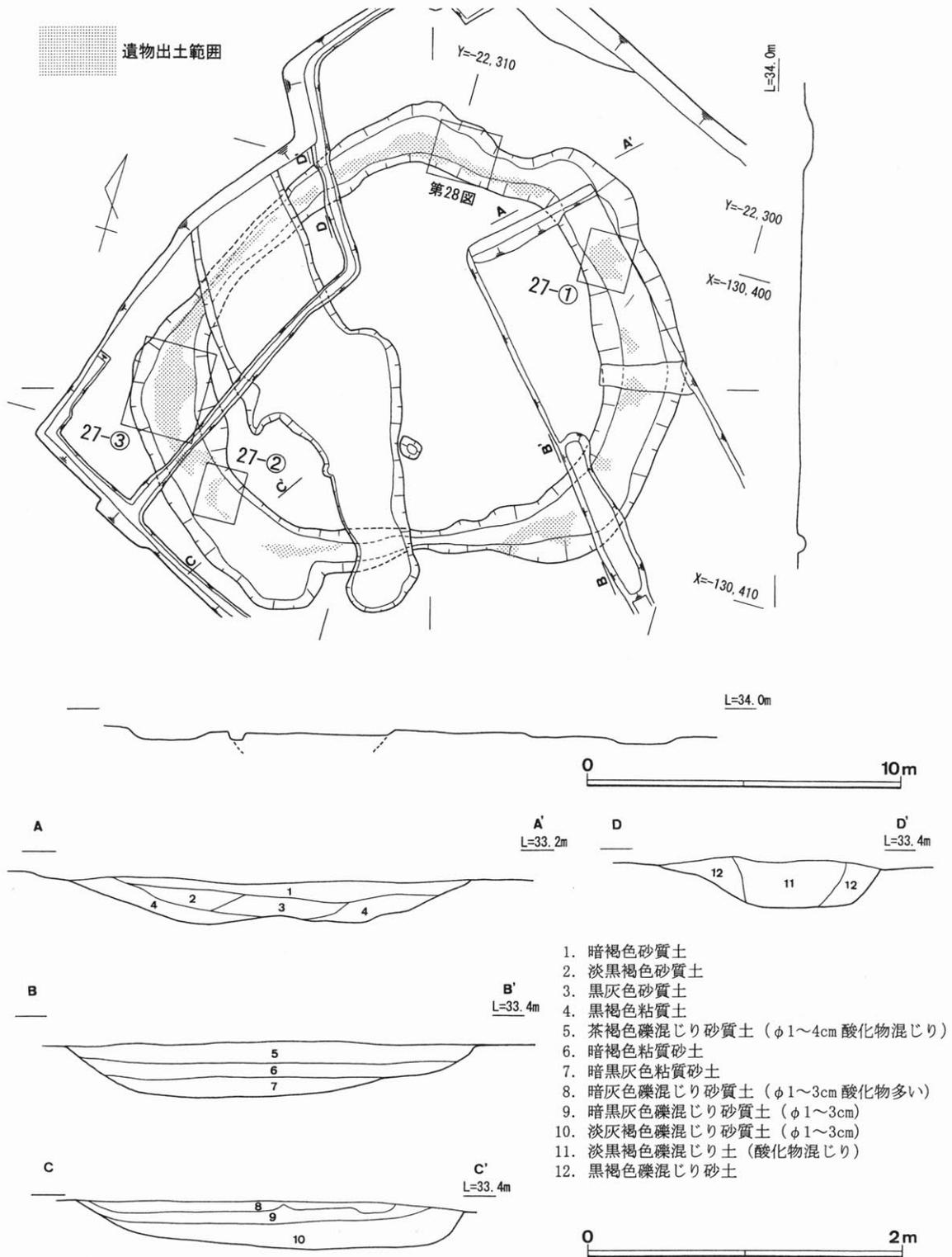
第25図 溝 S D 36 土層断面図

16~18は杯Bである。内外面とも回転ナデを施す。19は、緑釉陶器椀の高台部である。全面施釉で釉調は淡緑色で、素地は灰色である。20は、口径が小さく器高が高い高台をもつ杯である。21は壺である。22は短頸壺、23は壺の底部である。体部外面は回転ナデ、内面はナデ仕上げ、貼り付け高台である。

24・25は、土師器杯である。24は内面に暗文を施す。体部外面はユビオサエ、口縁部は横方向のナデ、25は、内面は横方向のミガキにより調整し、体部外面は、ユビオサエの痕跡を留め、口縁部は横方向のミガキにより調整し椀状に仕上げる。26は甑である。体部内・外面をハケ調整し仕上げる。27は鍋である。口径38.7cmを測る。28は鉢である。

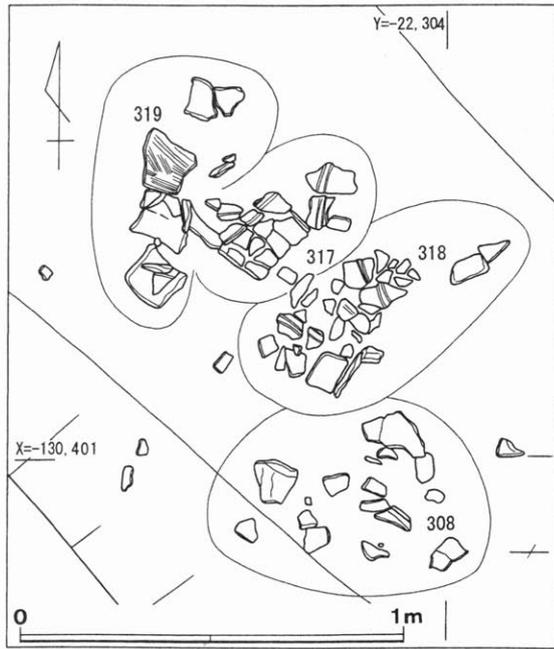
29~32は甕である。体部が球形を成す小型もの(29)と、大形の甕(30~32)がある。30は口径19.7cm。内湾しながら上方に立ち上がる体部と、「く」の字状に屈曲し斜め上方に短く立ち上がる口縁部からなり、端部は内上方に尖るもの(30)と平坦なもの(31・32)がある。33は凝灰岩製の砥石である。砥面は4面で、残存長5.9cm、幅3.75cmを測る。34~36は、土師質の土錘である。流弾型の形態を成し小型品である。34は全長3.3cm、幅0.9cm、重量2.5g。

37~39は鉄製品である。37は薄い鉄板状のもので、飾り金具等の一部と考えられる。38は鎌で基部のみ残存する。39は紡錘車である。残存長さ5.75cm、直径0.8cmの軸

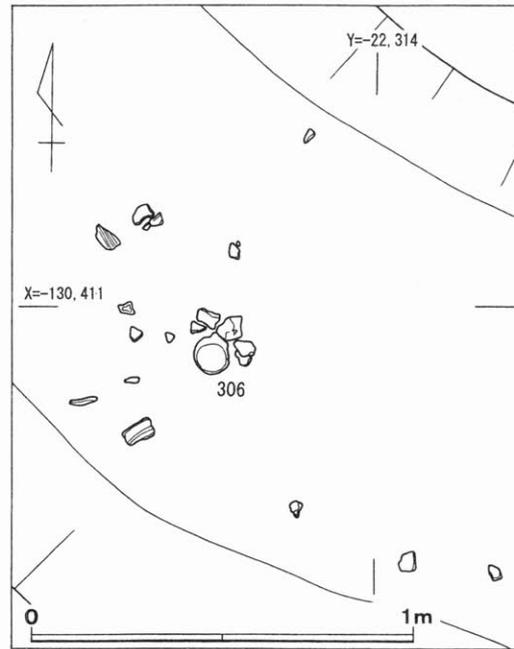


第26図 薪狭道1号墳S D20実測図

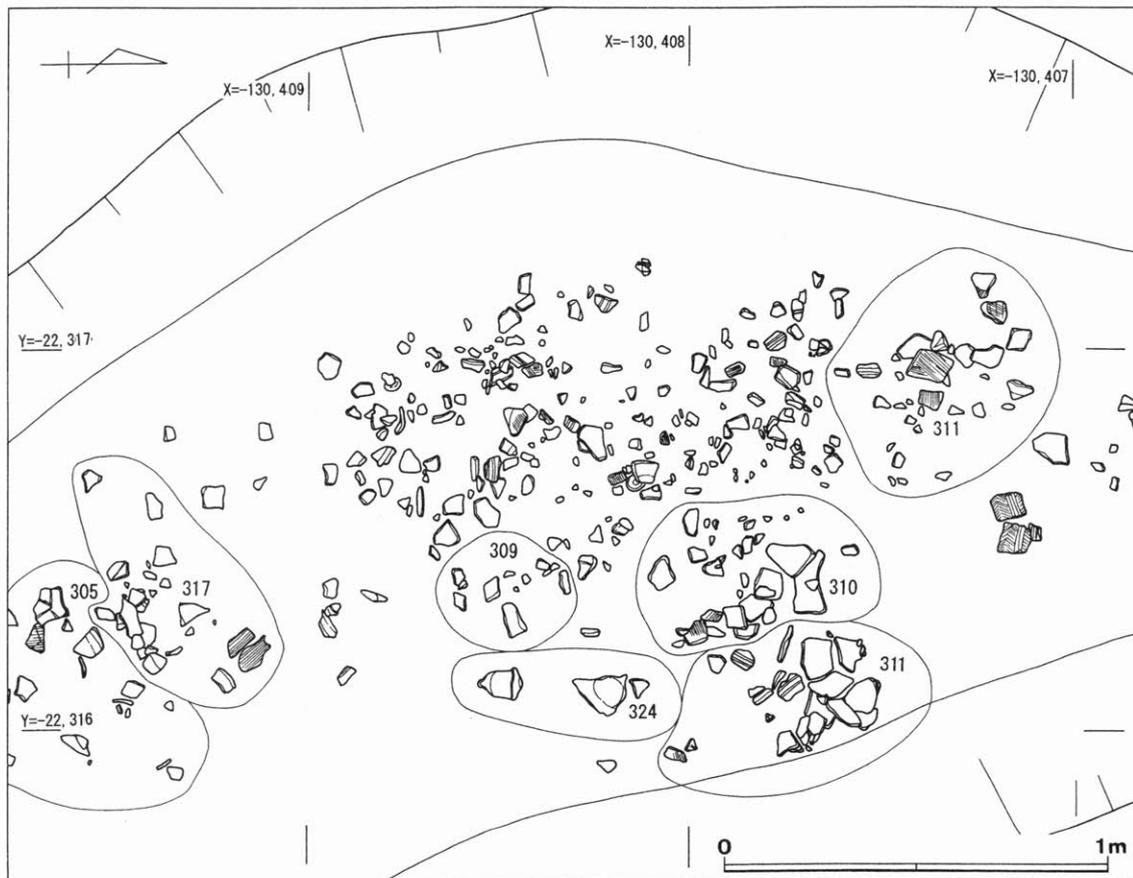
に、厚さ0.8cm、直径4.1cmの紡輪を付けたものである。40は椀形鍛冶滓である。冶金学的分析を行い、結果を末尾に掲載した。41は銅製帯金具蛇尾である。砲弾型を成し、長さ2.6cm、幅2.3cm、厚0.7cmを測る。3か所に直径2mmの帯留めの鉤が認められる。42は平基式打製石鏃であり、先端の一部を欠損する。残存長3.27cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm。石材はサヌカイトで、縄文時代である。



27-①

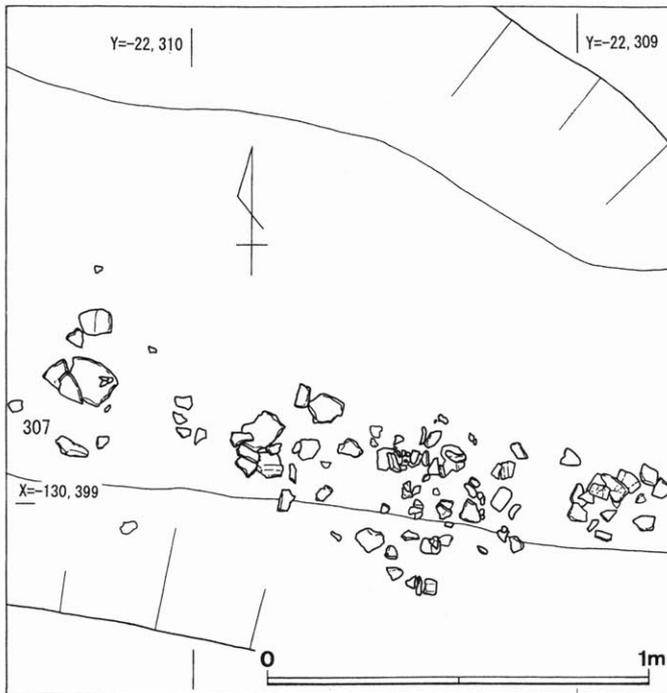


27-②



27-③

第27図 薪狭道1号墳S D20遺物出土状況図(1)(遺物番号は実測図に対応)



第28図 薪狭道1号墳S D 20遺物出土状況図(2)
(遺物番号は実測図に対応)

24.2cmを測る。59・60は土師器高杯である。60の筒部は面取りされているが、小片のため形状は不明。61は土師器甕である。頸部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。62は円筒形土製品である。内外面ともハケ調整が施され下方には笠形の突帯が付き、裏側には工具による刺突痕が全周に巡っている。63は凝灰岩製の砥石で、砥面は2面である。残存長9.7cm、幅8.9cm、厚さ3.9cmを測る。64は鍛冶滓である。冶金学的分析を行い、末尾に結果を掲載している。

薪高木1号墳S D 30出土遺物(第33図、図版第37) 円筒埴輪ないし朝顔形埴輪と考えられる破片は多く出土しているが、図化できるものは少ない。65は朝顔形埴輪口縁部片である。口縁端部を欠損する。外面は細かなタテハケ、内面はヨコハケを施す。66は円筒埴輪タガ部分である。粗いヨコハケ目が残し、外面にベンガラと思われる彩色が認められる。他にも多くの破片があり、全体が彩色されていた可能性がある。67～71は草摺形埴輪の破片である。いずれも同一個体である。71は周溝内、70はS K 01、67～69は包含層中から出土した。いずれも削平に伴い移動したものである。68・70は端部が残る。横位の梯子状文様を上下に設けた内側に連続した山形の鋸歯文を施し1単位としたものである。1単位の間は素文帯が巡り、69は3単位、3素文帯が残る。分割帯に当たる部分は7条以上に線刻された縦線帯により分割される。これらは革製品をモデルとしたもので、山形の鋸歯文に見られるように刺繍状の革の縫い目を表現したものである。72は短甲の前胴の引合板などを表現した可能性がある。これらの遺物は、古墳時代中期初頭と考えられる。

薪高木2号墳S D 70出土遺物(第34～36図、図版第36・37) 73・74は須恵器蓋である。73は天

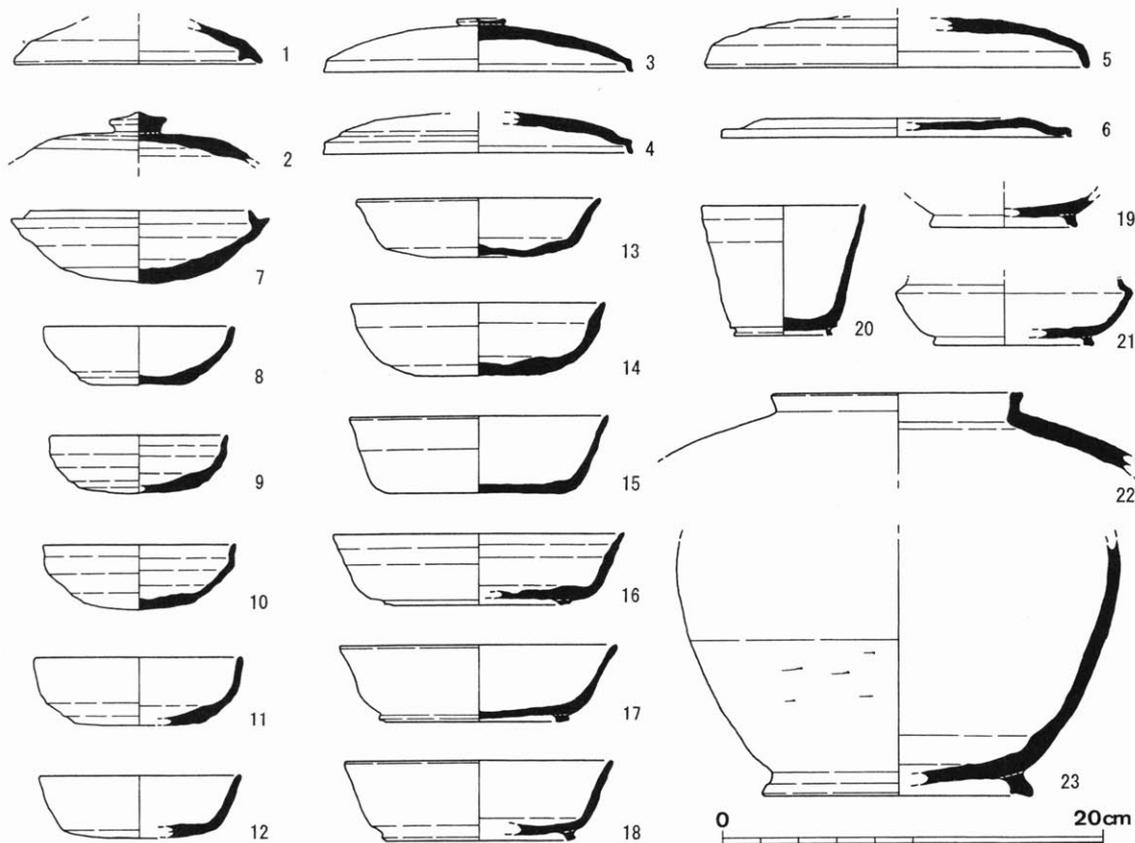
S D 10出土遺物(第32図、図版第38)

43は縄文土器深鉢の口縁部片である。口縁外面に縄文を施し、板状の工具によるヨコナデを施す。縄文時代後期である。44～47は須恵器杯蓋である。44・45は内面にかえりをもち、46は退化した宝珠つまみを付けたものである。時期は飛鳥時代である。47は笠形天井から垂直に垂下する口縁部をもつものである。48～53は須恵器杯である。小型のものである。48は焼け歪みが認められる。54～57は土師器杯で内面に放射状暗文を施し、54～55は体部外面をユビオサエシ、口縁部は横方向のナデにより仕上げる。57の体部外面はミガキを施す。58は土師器皿である。口径

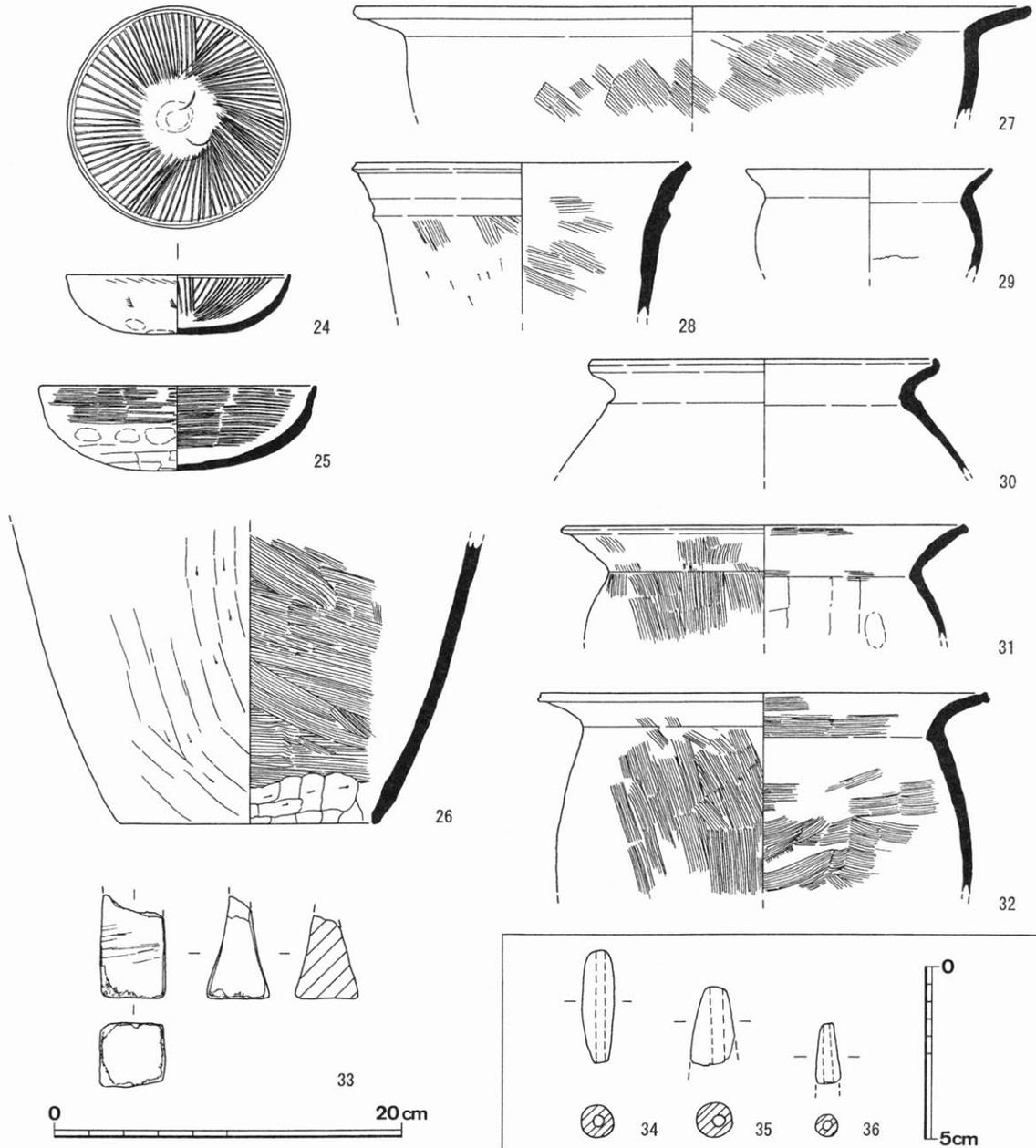
井部外面にカキ目が施されてる。口径13cm、器高4.05cmを測る。古墳時代後期である。73~90は須恵器杯身である。73~77は小振りのもので、口縁部の立ち上がりも低い。古墳時代後期。80~92は杯Aで、小型のものである。92は大型のもので口径13.6cm、器高4.2cmを測る。古墳時代の杯蓋を反転した形態のものも含まれる。93~95は杯Bである。いずれも高台が底部内寄りに付される。96は須恵器高杯である。97はハソウである。孔部分下端の残存する部分を見る限りでは注口状に突出している。98・99は短頸壺である。100は瓶子である。101~105は須恵器甕である。102は、直立する短い口縁部をもつ。103は「く」字状の単純口縁をもつ。体部外面はカキ目が残り、内面は同心円文タタキである。全体がわかる103は、口径28.4cm、器高55.8cm、104は口径21cm、器高47.3cmを測る。

106~110は土師器杯である。内面は放射状に暗文が施され、体部外面はユビオサエ、口縁付近はミガキを施す。107は口径15.4cm、器高5.45cmを測る。111・112は土師器鉢とした。暗文は施されないが、111は外面をハケ調整する。112は内面をハケ、体部外面をヘラケズリ、口縁付近をハケ調整する。いずれも淡褐色の色調を呈する。113は土師器高杯脚部である。「ハ」字形に開く脚部をもつ。114・115は、口径に対して体部が長い甌である。内外面ともハケ調整。外部中に把手の痕跡が残る。115~121は、土師器甕である。116~118は、体部が球形に近い小型甕である。119は、布留式甕である。120~122は大型の甕である。

123は、凝灰岩製砥石である。砥面は5面である。残存長6cm、幅5cm、欠損する砥石中央部で厚さ3.3cm、各面とも研ぎ減りしている。124は鍛冶滓である。



第29図 D地区出土遺物実測図(1)



第30図 D地区出土遺物実測図(2)

125は円筒形土製品である。完形に近いもので、62と同様のものである。上方が広く、下方が狭い埴輪状をなし、内外面ともハケ調整し、上下二段に笠形の突帯をつける。両端部内面はケズリを施す。突帯の内側には細い板状の工具で刺突した痕跡が全周にまわる。土師器の調整方法、厚さなど土師器の甕や甑との親近感を感じ、埴輪とは異なるものと判断した。

薪高木3号墳S D90出土遺物(第37図、図版第35・38) 126・127は須恵器杯身である。126はやや大型品である。口径12cm、器高4.3cm、126は口径8.6cmを測る。古墳時代後期である。128～132は須恵器杯Aで、小型のものである。古墳時代の杯蓋を反転した形態のものも含まれる。133は扁平な宝珠つまみをもつ蓋である。134～136は須恵器杯Bで、135は底部端に高台が付く。奈良時代後半である。137は須恵器高杯か壺の脚部である。138は須恵器長脚高杯脚部である。全面にハケ調整後、沈線を二段に施す。139・140はハソウである。139は口径12.8cmを測る。140は内

部中央底に、径1cmの棒状工具で何度か押した痕跡が残る。141～143は須恵器甕である。141は全体がわかるもので、口径21cm、器高44.1cmを測る。143は口径33.6cmを測り、口縁部外面に二段にわたり波状文を施す。

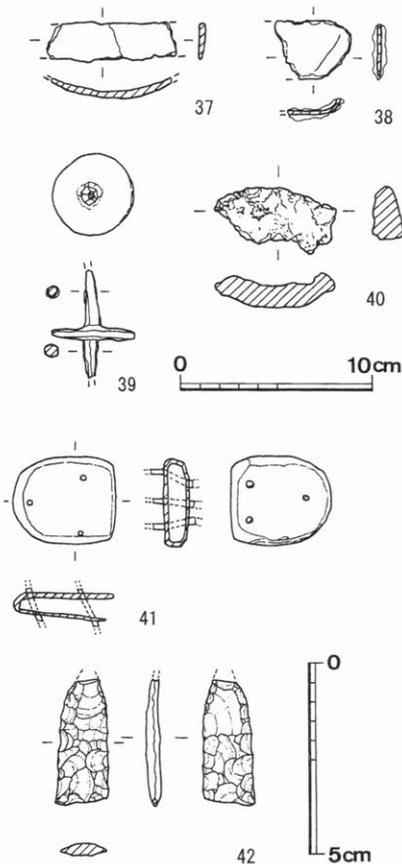
144は土師器鉢とした。内外面ともハケ調整。145は土師器皿である。146は土師器高杯で椀状の杯部をもち、杯部内面に暗文が施される。147は甑で内外面ともハケ調整。148～152は土師器甕である。基本的に内外面ともハケ調整を主体としている。153は滑石製紡錘車である。円錐形の断面を呈し、側面を二段に分けて匙面取りする。直径5.3cm、高さ1.25cm、重量40gである。体部・底部とも工具による調整痕や文様は残っておらず、全体が良く研磨されている。154・155は鍛冶滓である。155は冶金学的分析を行い、末尾に結果を掲載している。

その他の遺構出土遺物（第37図、図版第35・38） 156～161はS K 13から出土したものである。156・157は須恵器蓋である。156は口径10.4cm、器高3.4cmを測る。古墳時代後期である。158は須恵器杯である。高台が底部端よりやや内側に付くものである。159は平瓶、160は、肩の張った須恵器壺である。161は土師器甕である。

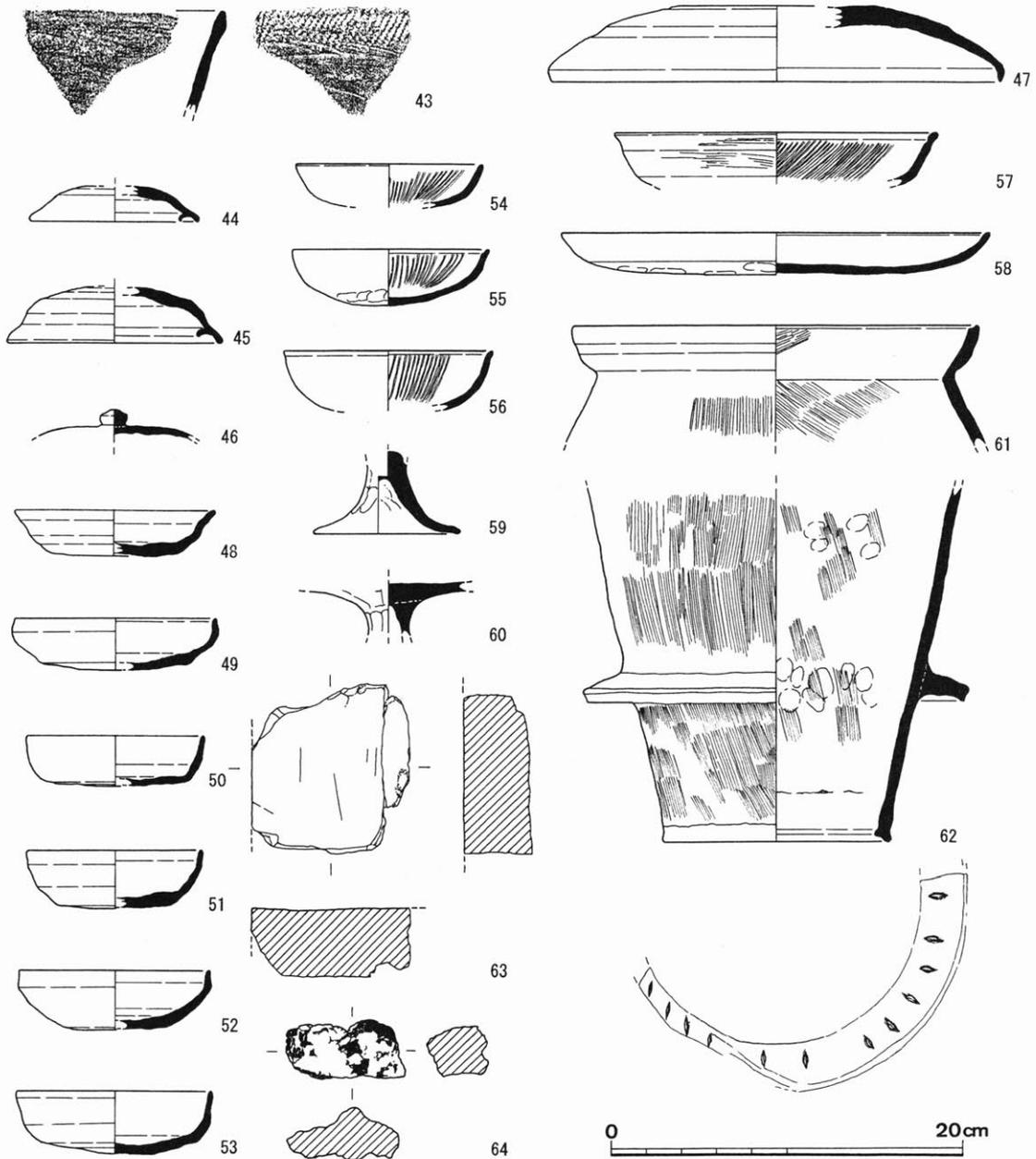
162・163・167・168・170はS D 09から出土したものである。遺構は近世以降と考えられ、混入品である。162は須恵器杯身で口径9.1cm、器高3.15cmを測る。古墳時代後期である。163は須恵器杯で口径10.2cm、器高2.65cmを測る。167は、土師器皿で内面に暗文が施され、体部外面はハラケズリ調整する。168は、土師器高杯で脚筒部は8面の面取りを施す。170は、須恵器甕で口径20.4cm測る。外面は平行タタキ、内面は同心円文タタキを施す。

164～166・169はS D 26から出土した。164は、須恵器杯Bである。165・166は土師器杯である。内面は放射状暗文が残り、体部外面はユビオサエ、口縁部周辺はミガキを施す。169は、瓦器椀で内面のミガキがやや粗い。外面はユビオサエで仕上げる。170は須恵器甕で口径20.4cmを測る。

171～175・178はS K 78、176はS D 33、177はS K 73、179はS P 103、180はS P 81、181はS P 77から出土したものである。171は須恵器壺蓋と考えられる。外面に自然釉がかかる。172・173は緑釉陶器である。172は削り出し高台で全面施釉される。173は削り出し高台で内面底に沈線が認められる。外面は底部のみ露胎である。174は、無釉陶器皿である。175は圈足円面硯である。脚を欠損するが、縦透孔の痕跡が確認できる。復元硯面径は9.2cmを測る。176は、土師器杯である。177は、平瓶口縁部である。178は、黒色土器椀底部である。貼り付け高台で全面ミガキが施される。179は、土師器甕である。内外面ともハケ調整である。180は須恵器甕である。口径



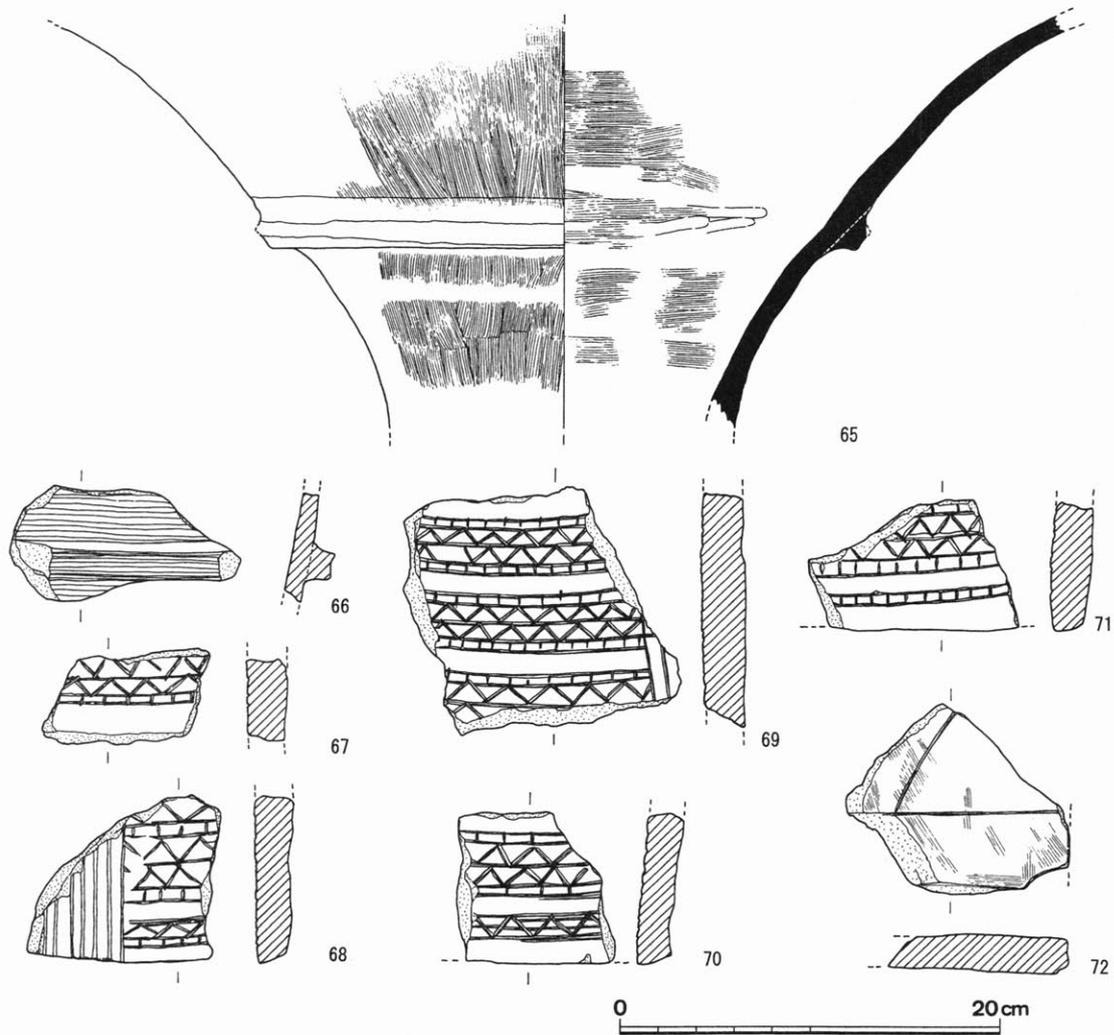
第31図 D地区出土遺物実測図(3)



第32図 D地区出土遺物実測図(4)

17.8cmを測る。体部外面下半は平行タタキ、部分的にカキ目を施す。上半は平行タタキ後ナデ調整する。内面は、下半に同心円タタキが残る。181は凹基式打製石鎌である。先端と逆刺の一部を欠く。残存長3.2cm、残存幅1.65cm、厚さ0.34cm。石材はサヌカイトで、重量2.01gである。縄文時代後期と考えられる。

包含層出土遺物 (第39図、図版第38) 包含層中からも多種の遺物が出土した。中でも細片化した鉄製品が多く出土したが、図化できたものは少ない。古墳の副葬品とも考えられるものが多く認められた。182は須恵器蓋である。口径8.1cmを測る。天井部外面につまみが剥離した痕跡が認められる。183は杯Aである。口径8.8cm、器高3.6cmをはかる。184~185は須恵器杯Bである。いずれも高台が外に踏ん張る。184は口径13cm、器高8.4cmを測る。186はハソウである。187・188は土師器甕である。189・190は瓦器椀である。内面にやや粗いミガキが施され、口縁端部内面に

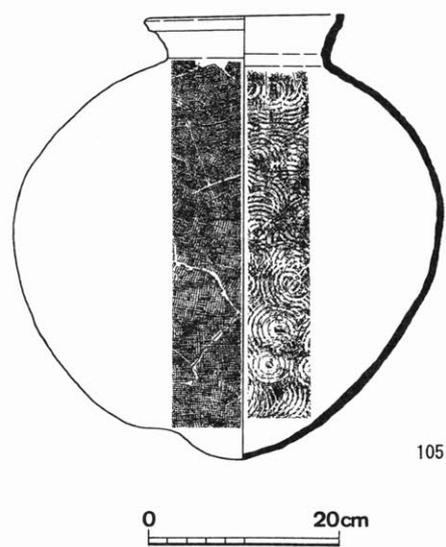
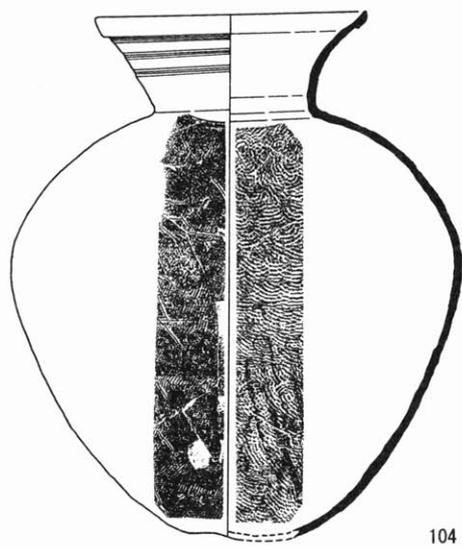
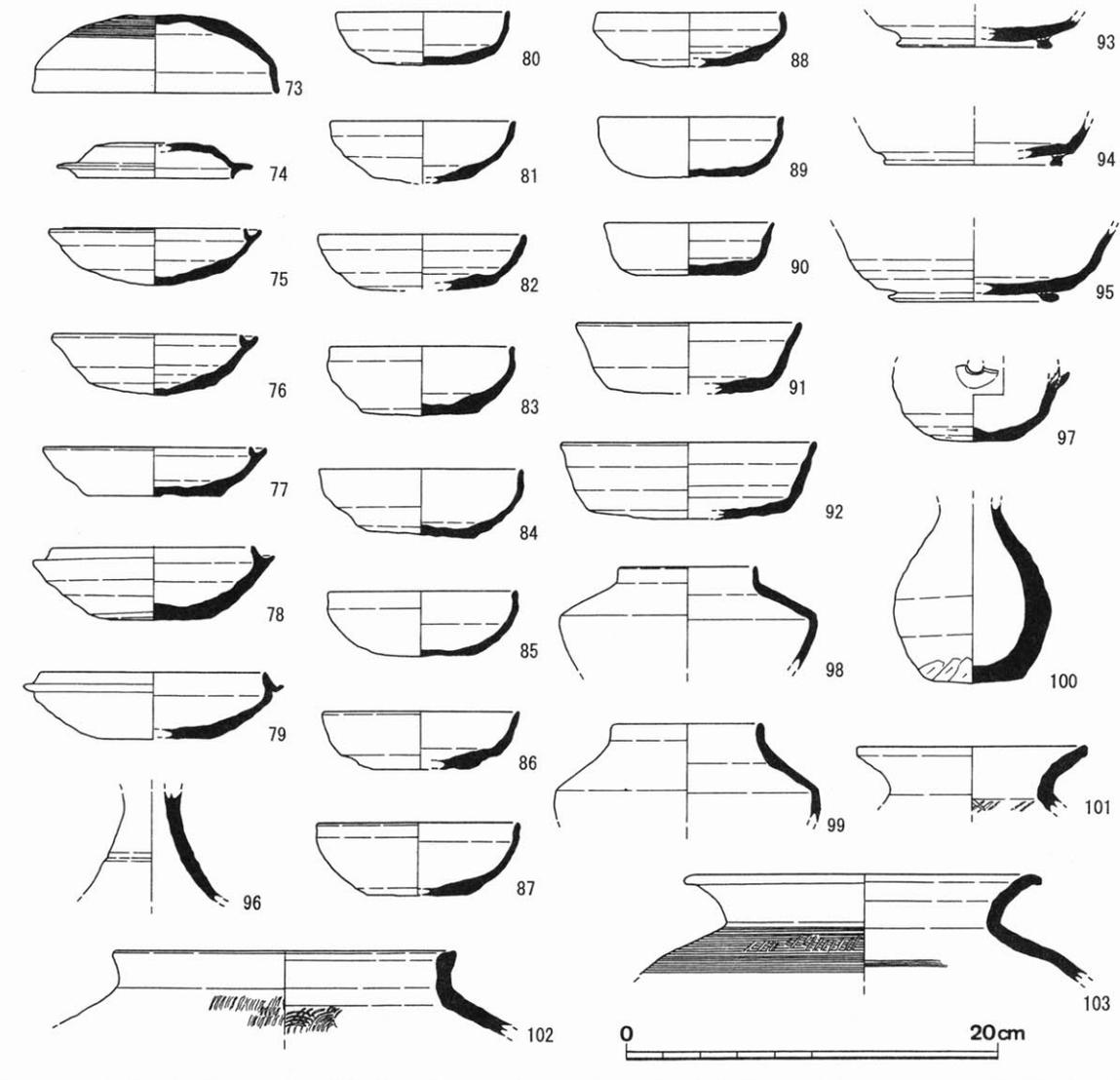


第33図 D地区出土遺物実測図(5)

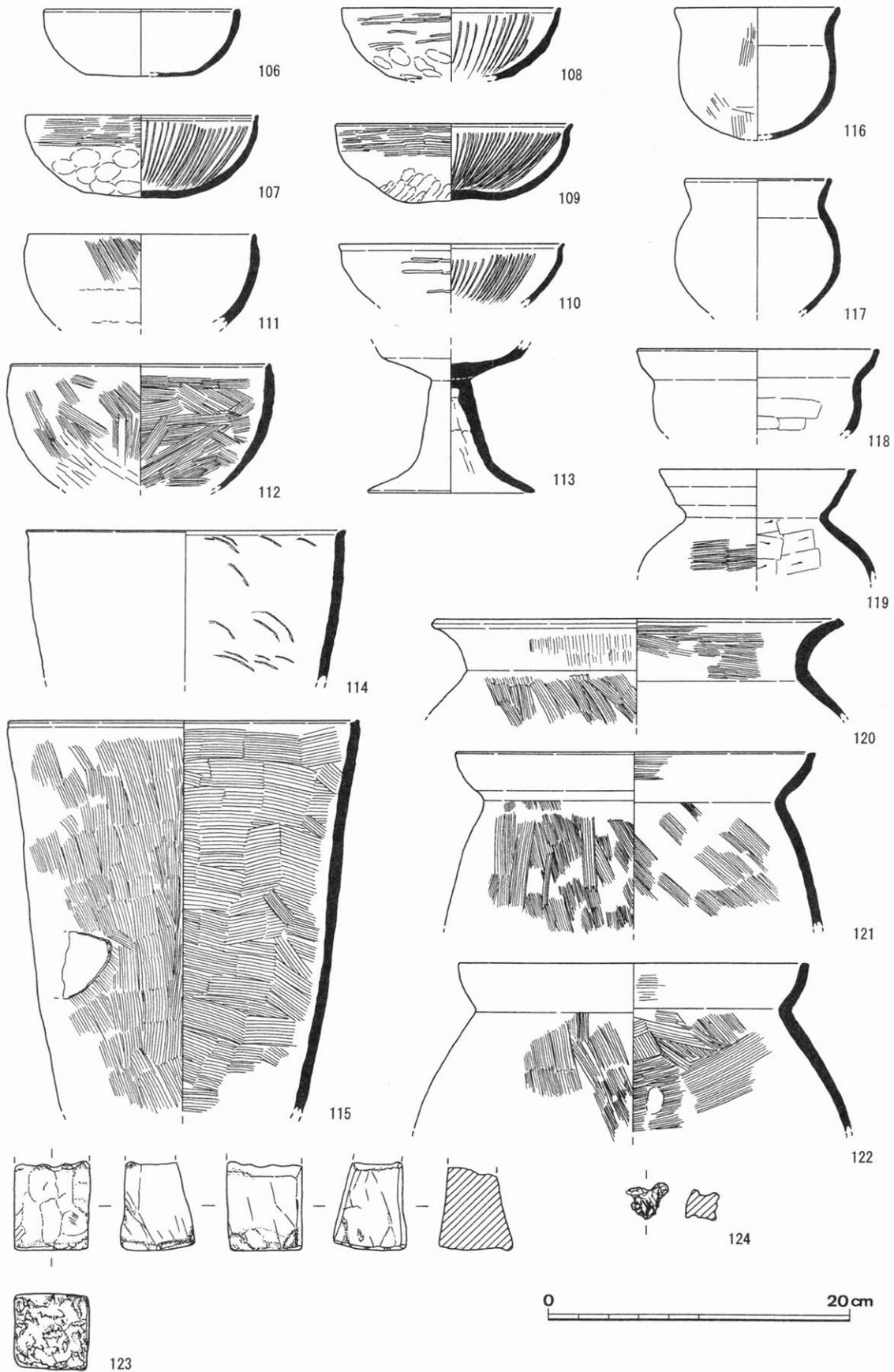
は一条の段をもつ。189は口径14cm、器高4.55cmを測る。大和型である。12世紀後半と考えられる。191は土師器羽釜である。内湾した口縁部の端部を直立させている。胴部内面には当て具の痕跡が認められる。口径27.1cmを測る。192・193は刀子で刀身みの破片である。194は鉄鎌、195は刀の茎部分か鎌と考えられる。196は鋤先で、大きさからミニチュア品と考えられる。197は鉸具の可能性ある「L」字状に屈曲したものである。これらは古墳の副葬品であった可能性がある。

(2) E地区

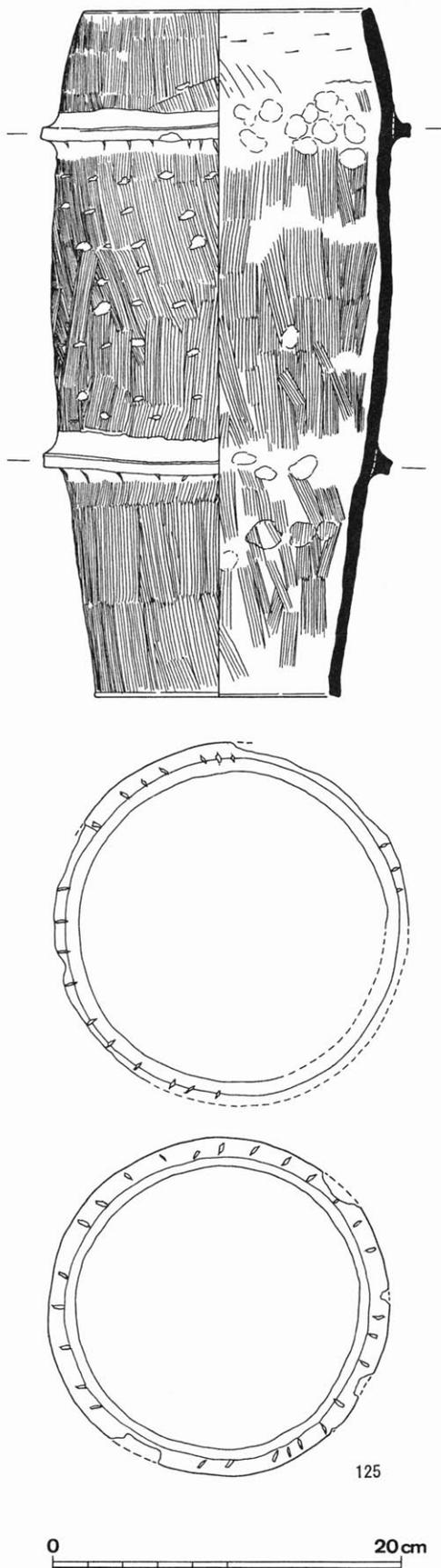
S K 40出土遺物(第40~44図、図版第35・36) 古墳時代後期~奈良時代後半頃の遺物が出土している。198は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりが低い杯身である。古墳時代後期である。199は杯蓋Aである。200~209は、須恵器杯Aで平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。201は、口径13.4cm、器高5.6cmを測り、器高が高い。208は口径14cm、器高3.5cmを測る。210・211は、圈足円面硯である。210は、脚を欠損するが、縦透孔の痕跡が確認できる。復元硯面径は9.2cmを測る。211は、大型のもので復元硯面径22.6cm、同脚径約40cm、器高13cmを測る。



第34図 D地区出土遺物実測図(6)



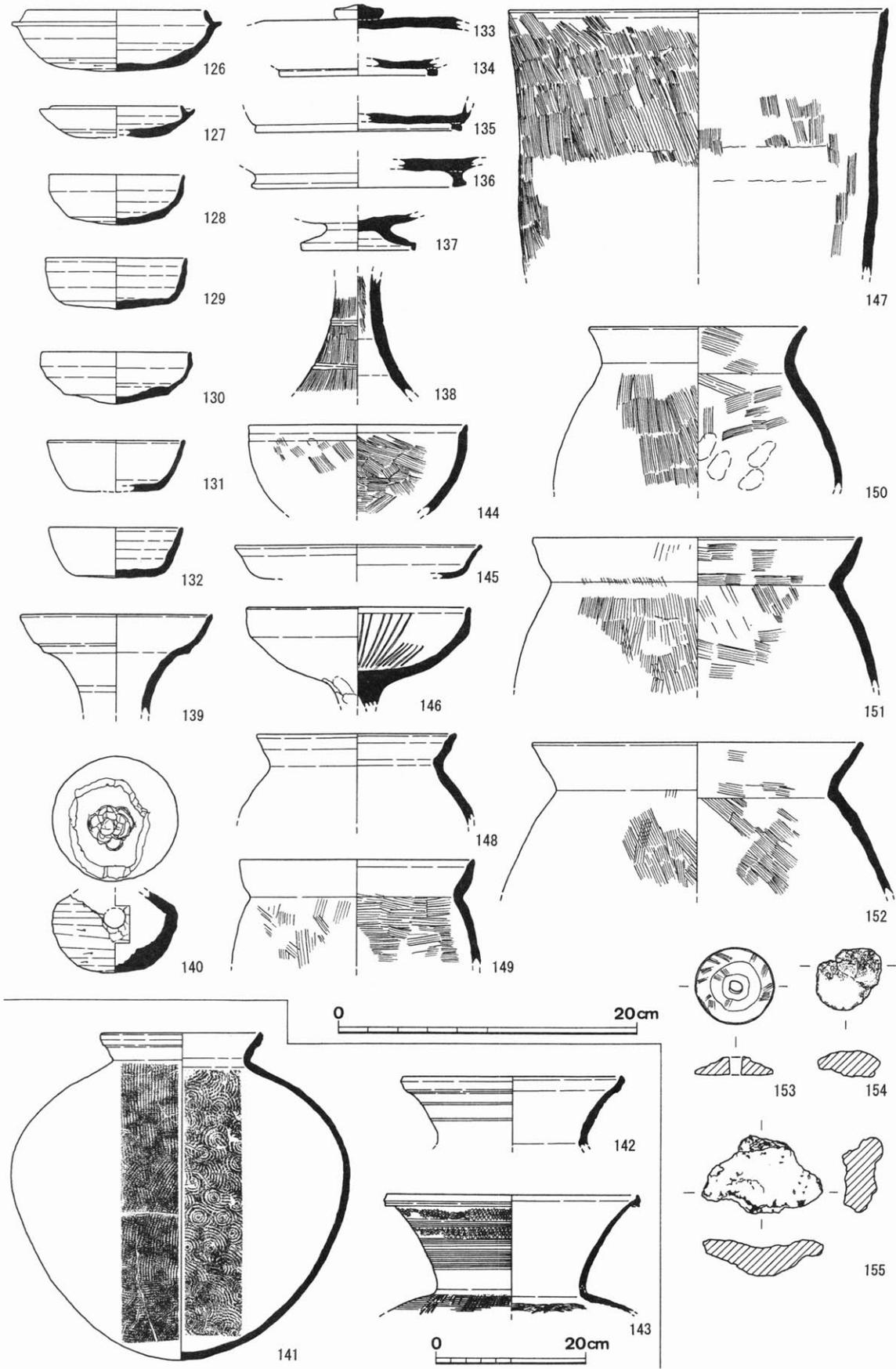
第35図 D地区出土遺物実測図(7)



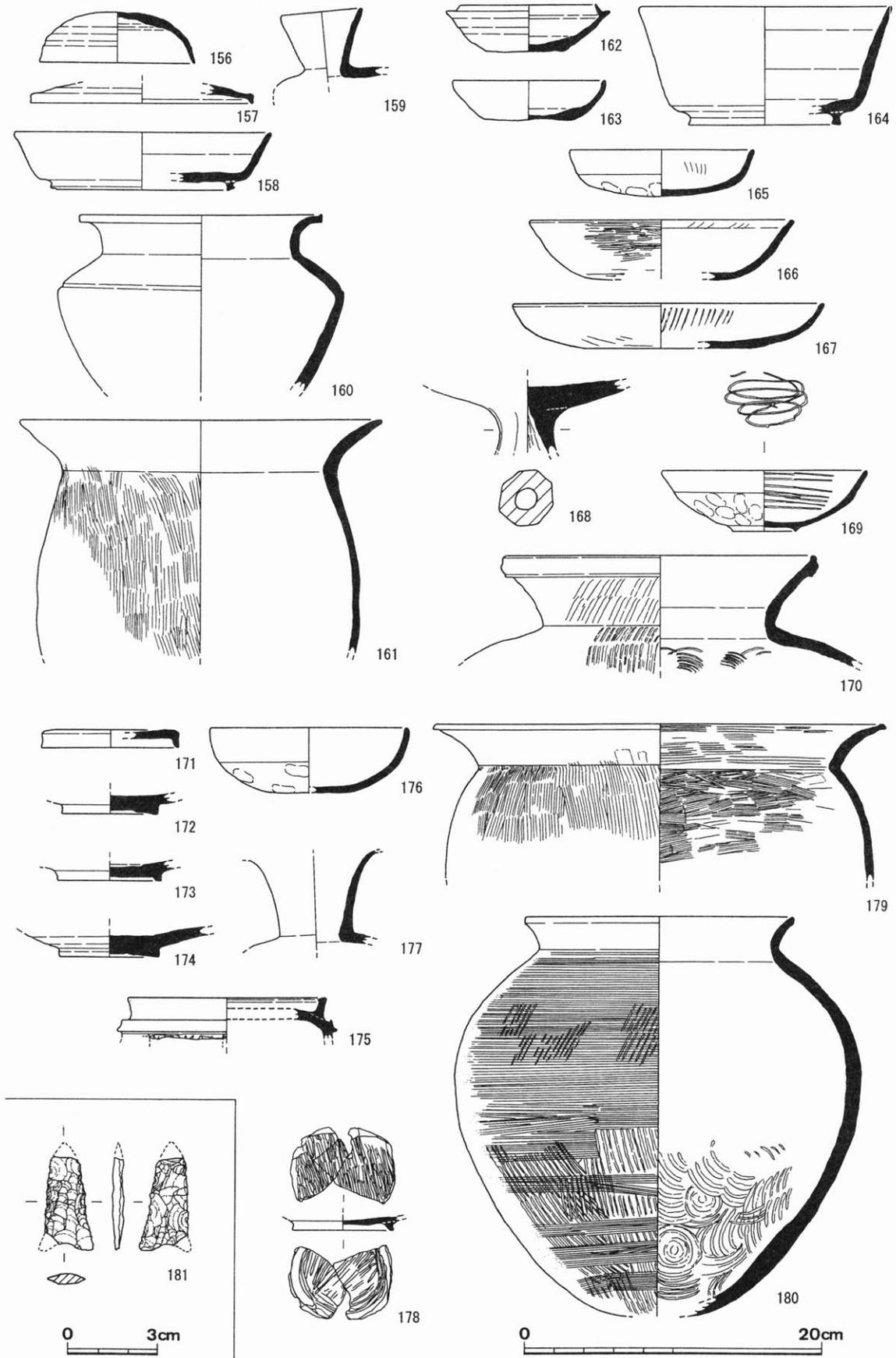
第36図 D地区出土遺物実測図(8)

透孔は、脚上方が円形、下方が半円透で中央部に両者を十字透で繋いでおり人形状を成している。212~220は杯B蓋である。扁平な宝珠つまみが付くが蓋にかえりは付かない。221~226は杯Bである。222・223は、口径が小さく器高が高い。224~226は口径に対して器高が低いものである。内外面とも回転ナデを施す。227は須恵器皿である。口径18.6cm、器高2.8cmを測る。231・235・236は壺である。235・236は、「ハ」字状に開く脚部を付す。237は須恵器鉢である。口径20.8cmを測る。238・239は、須恵器甕である。239は体部中位に環状の把手が付く。

240~245は、土師器碗である。240・242は、暗文の痕跡は磨滅のため認められないが、口縁部内面に沈線が認められる。421は口径13cm、器高3.3cmを測る。246は鉢とした。247~268は、土師器皿である。247・249は口径の小さいものである。250・252・254は内面に放射状の暗文が残る。口縁部は丸くおさめるものと、外方にのぼしてから内湾気味に仕上げるものがある。250は口径13.2cm、器高2.3cm、255は口径19cm、器高3.1cm、260は口径21.7cm、器高2.9cmを測る。263・264は高台をもつものである。265~267は、土師器甕である。全面ハケ調整により仕上げる。265は、口径に対して体部が長いもので、円筒形土製品の可能性もある。268~270は、製塩土器である。砲弾型の体部に尖底をもつものと思われる。調整はユビオサエとナデが主体である。口縁部の形状は、内湾するものと、外反するものがある。268は口径13.4cm、270が14.5cmを測る。271・272は、土師器高杯である。271は筒部内にしほり痕があり、8面取りする。272は、筒部は9面取りされている。273~275は、土師器甕である。丸い体部をもつ小型のもので、275は口縁部が大きく開く。276~278は土師器鍋である。276は、体部外面および口縁部内面をハケ調

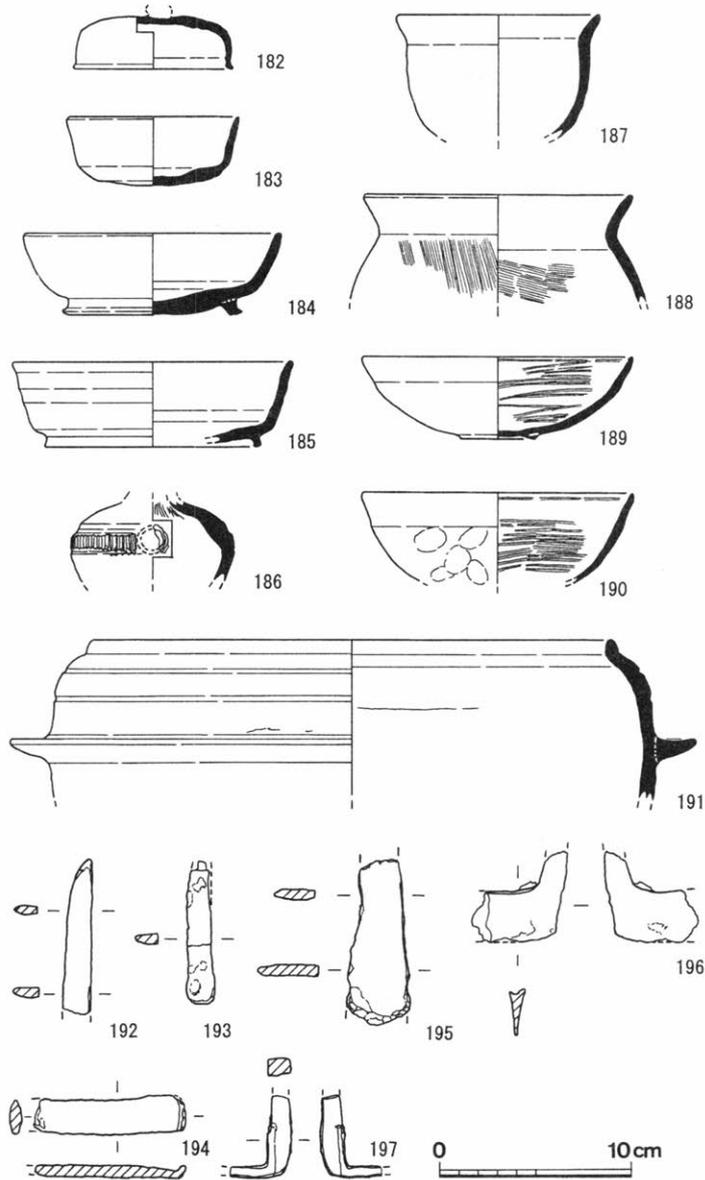


第37図 D地区出土遺物実測図(9)



第38図 D地区出土遺物実測図(10)

整により仕上げる。口径34cm、287は口径32cmを測る。279～283は、大型の土師器甕である。内外面ともハケ調整される。いずれも長胴甕と思われる。279は口縁端部に面をもつ。口径26.4cmを測る。283は全体がわかるもので、口径26.4cm、器高29.1cmを測る。288～300は土師器甕である。基本的に内外面をハケ調整する。297・298は把手付の土師器甕である。297は三角形の把手を付す。298は、体部中位の三角形の把手間を繋ぐ凸帯が巡る。口径42.2cmを測る。



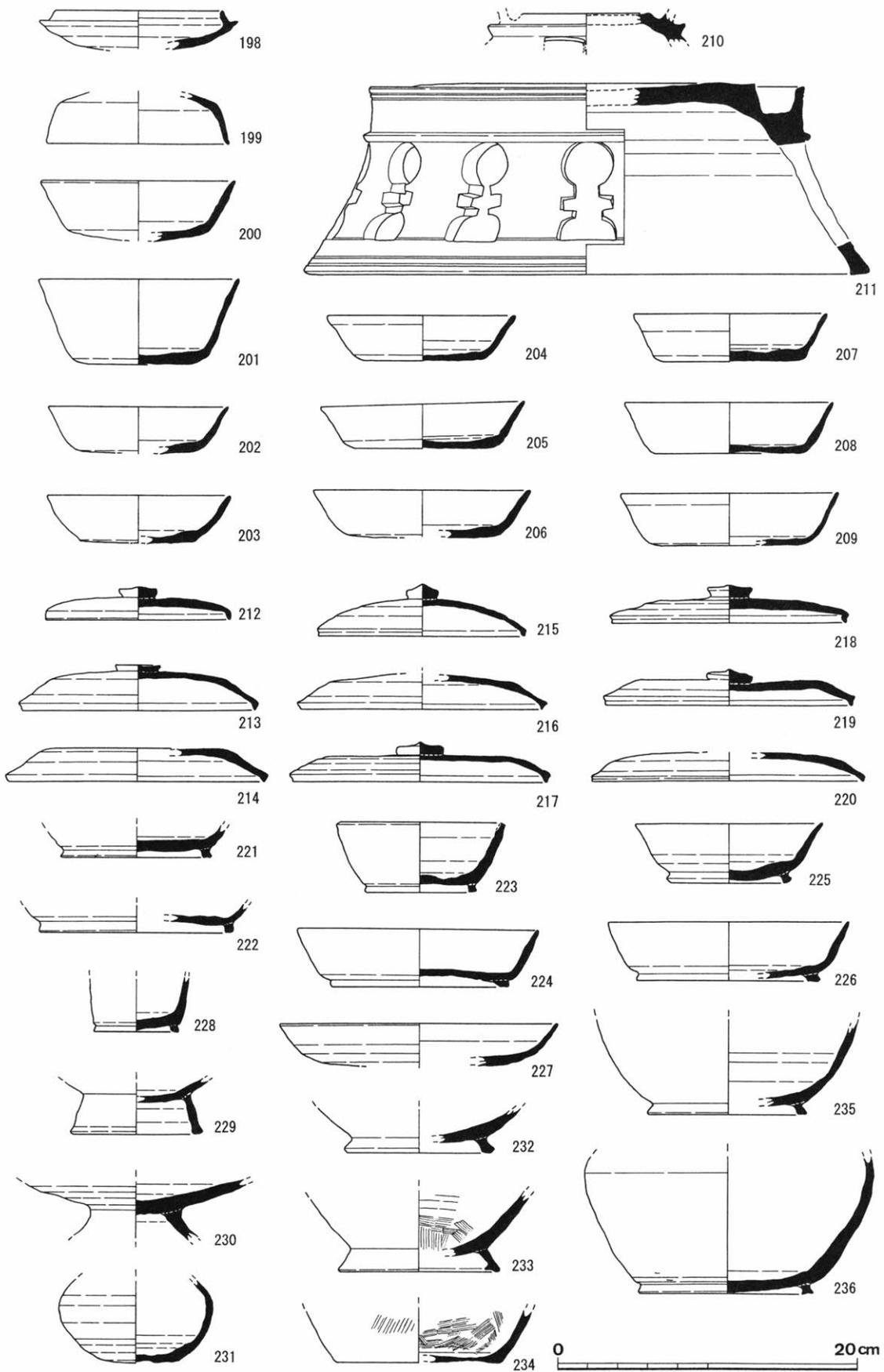
第39図 D地区出土遺物実測図(11)

柱穴出土遺物(第45図)
299は、S P 27より出土した台付皿である。奈良時代前半と考えられる。300はS P 25より出土した杯Bである。口径14.7cmを測る。奈良時代後半と考えられる。301～303は土師器皿である。301・303はS P 01より出土

した。301は口径8.1cm、器高1.55cmを測る。302はS P 04より出土した。口径9.7cm、器高1.6cmを測る。304は瓦器碗である。口径15.8cm、器高4.85cmを測る。12世紀後半頃と考えられる。

薪狭道1号墳S D 20出土遺物(第46～49図、図版第35・37・38) 周溝内から須恵器、土師器、鉄器、円筒埴輪、朝顔形埴輪、馬形埴輪・家形埴輪・鶏形埴輪・盾形埴輪・甲冑形埴輪、鉄製品が出土した。

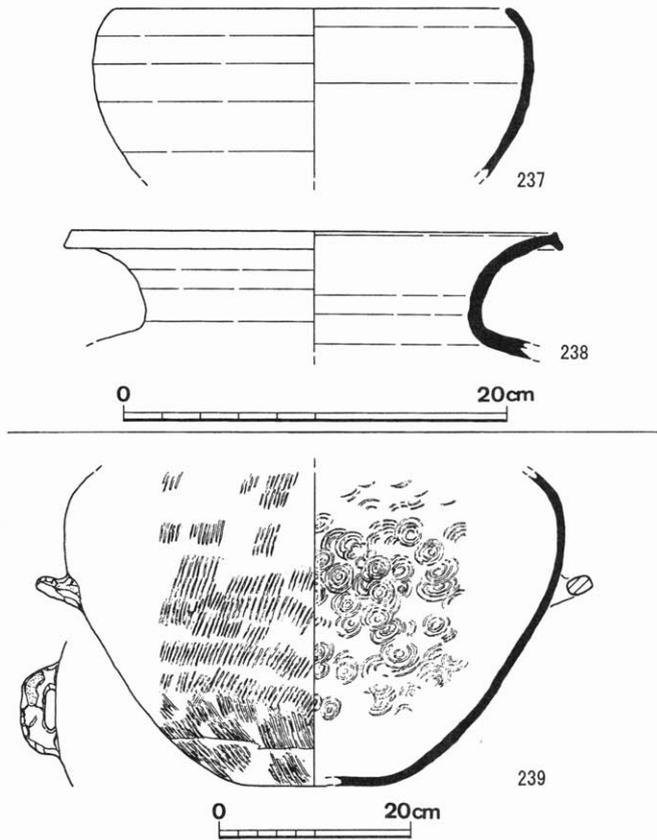
305は、須恵器広口壺である。口縁端部を欠損するが、口縁部に二段にわたり波状文を施す。体部外面は平行タタキ後ヨコハケ調整する。306は須恵器横瓶で体部側面は回転削りで仕上げる。307は土師器杯である。内面口縁付近は斜め、底にかけては放射状の暗文が二段に施されている。外面は磨滅により調整は不明。古墳を破壊した時期を示すもので、8世紀前半と考えられる。口径18.5cm、器高4.1cmを測る。308は、土師器甕である。内外面とも磨滅が著しい。口径30cmをはかる。309は、鉄斧である。長さ11.4cm、幅5.8cmを測る。305・306・309は副葬品と思われ、古墳



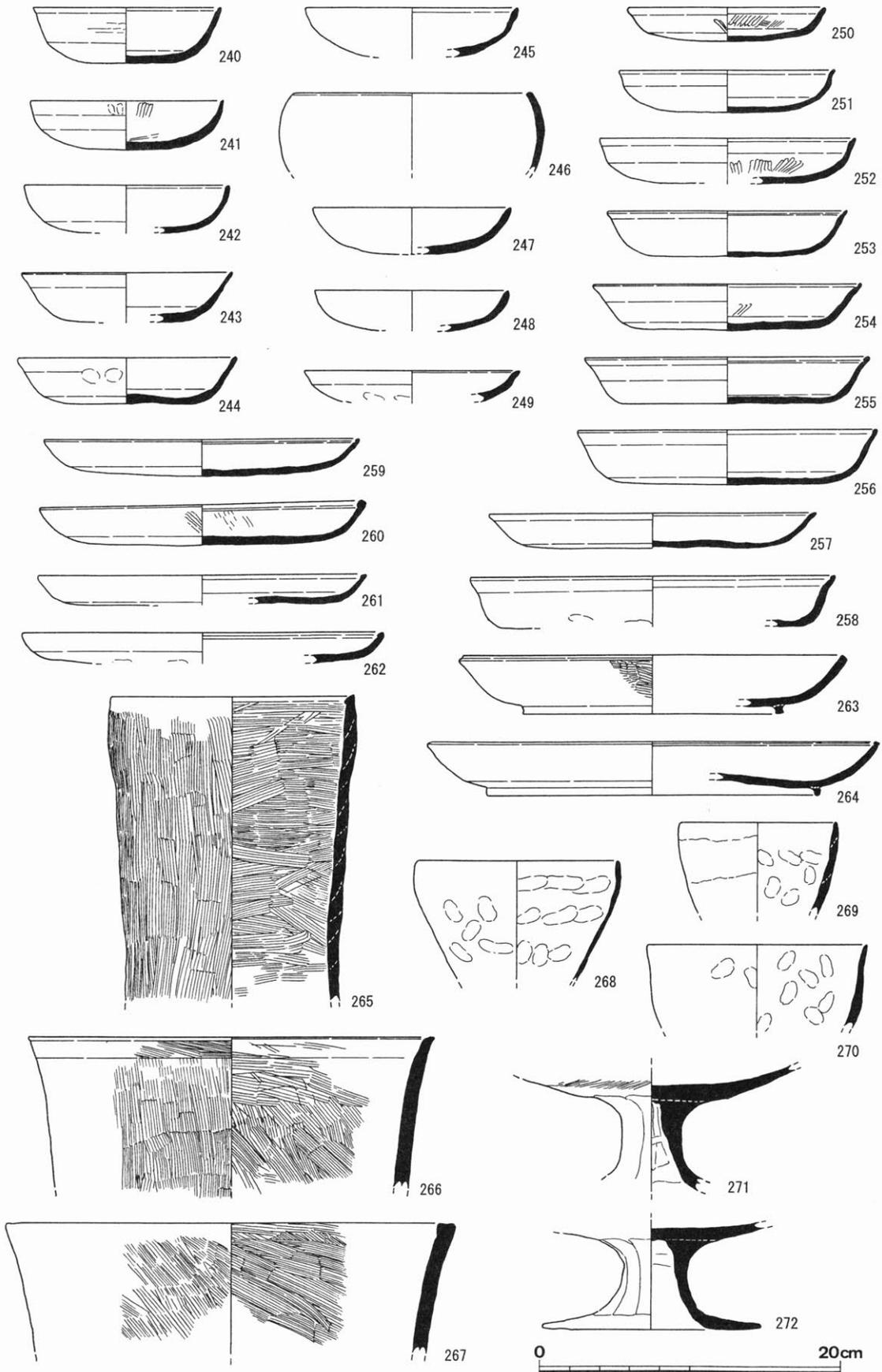
第40図 E地区出土遺物実測図(1)

時代後期初頭と考えられる。310～318は円筒埴輪である。310は全体がわかるもので4段3条の突帯をもつ。口径21.4cm、底径12.2cm、器高44.45cmを測る。2段目と3段目に交互に2カ所の一對の透かし孔がある。311～315は上部片である。口径20cm前後のものであるが、315は17.6cmとやや小さい。透かし孔は基本的に2段目と3段目に設ける。また、外面に314は、1段目と2段目、315は1段目に径1.2cmほどの浅い円孔が認められる。310・311・313は口縁部がやや外反する。316～318は底部片である。319は朝顔形埴輪である。外面はタテハケ、内面はヨコハケ後、斜め方向のハケを施す。320～324は馬形埴輪である。320は目より前方の顔から顎にかけての部分である。突帯により面繫、轡を表現している。322は鬣で馬体への接合痕が残る。323は尻尾先端部分である。324は馬体の馬具を繋ぐ革ひもか、手綱を突帯により表現したものと思われる。325は鞍で前輪が残る。下鞍から障泥上へ下がる輪鐙が線刻されている。手綱を表現した破片と思われる。325は鶏形埴輪である。筒上の頸部に頭部右側が一部残存する。肉垂が残り、目は穿孔されている。326は盾形埴輪である。盾の上辺か下辺の端部近くと思われ、綾杉文が施される。327は切妻の家形埴輪である。妻壁の一部と破風板の欠損した痕跡が軒先まで残存する。屋根の一部にベンガラにより彩色されていた痕跡が残る。妻壁の中央部には円孔(透かし孔)がある。329は甲冑形埴輪である。襟から頸鎧、肩鎧が残存する。円筒形の胴部を頸鎧まで作り上げ、その上に肩鎧になる粘土を貼り付ける。全面ハケ調整後、鉄板を線刻し表現する。冑は小札鋸留のもので、頂部は伏板上の伏鉢の欠損した痕跡が残る。地板第1・2の間の胴巻き部分が残る、腰巻きも認められる。小札は線刻されるが、鋸は表現されていない。鋸・眉庇部分は欠損する。

包含層出土遺物 (第50図、図版第36) 330～341は、薪狭道1号墳東側からSK01周辺にかけての包含層中より出土したものである。342～350は、薪狭道1号墳北側から湿地にかけて出土したものである。330・331は須恵器杯蓋である。内面にかえりもち、宝珠つまみを付けるものである。時期は飛鳥時代である。332～335は須恵器杯Bである。332は口径16cm、器高4cmを測る。奈良時代後半と考えられる。336は大型の長頸壺頸部と考えられる。337はこね鉢である。底部外面に多数の小孔を穿つが浅いもので、貫通はしていない。内面は使用に伴い磨滅する。338は壺である。339は須恵器鉢である。340は緑釉陶器碗底部である。内外面とも施釉される。素地は灰



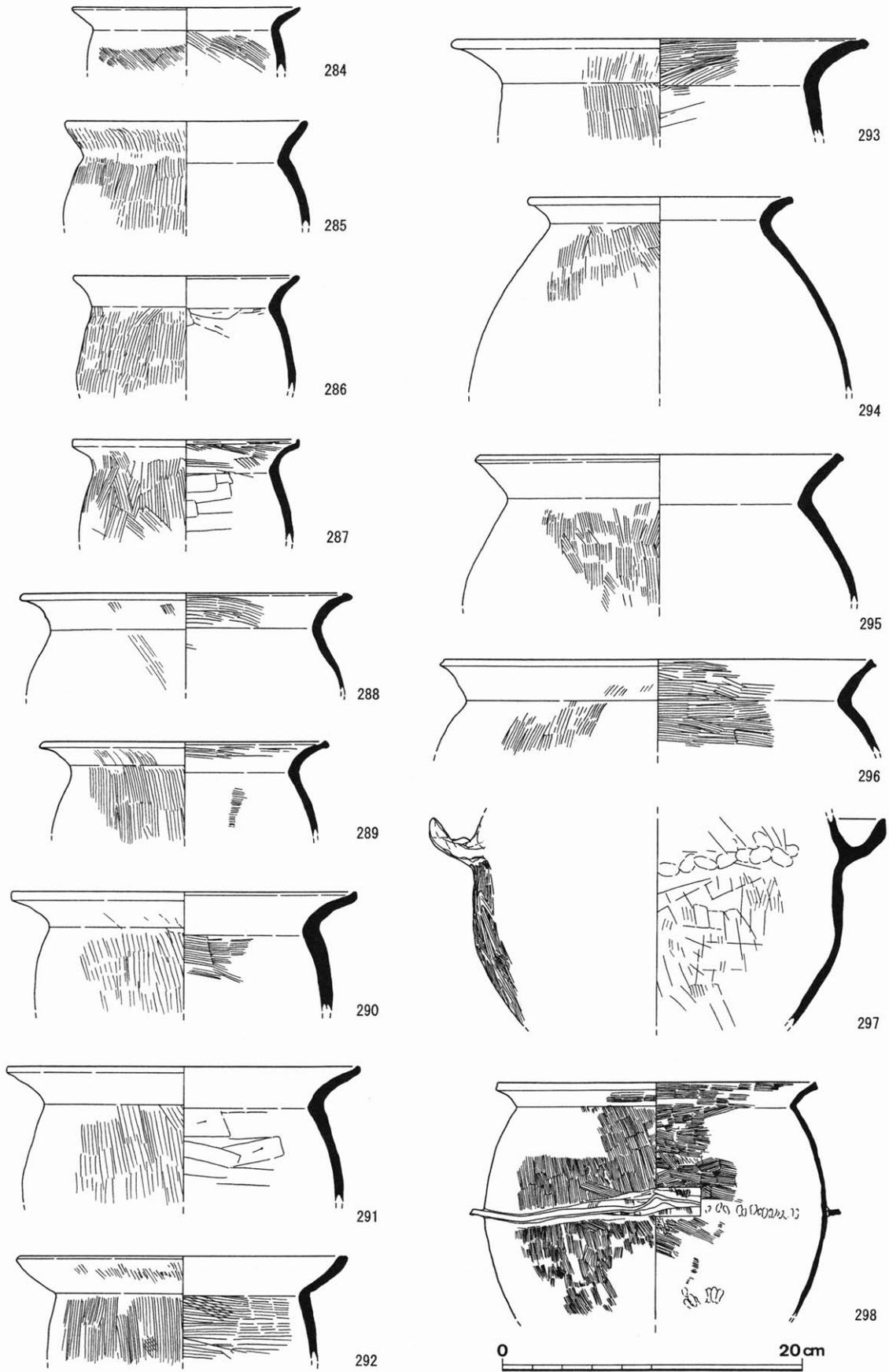
第41図 E地区出土遺物実測図(2)



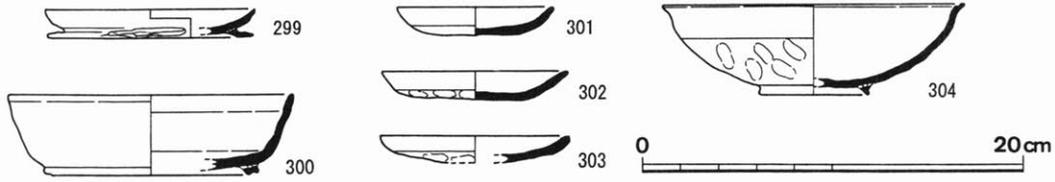
第42図 E地区出土遺物実測図(3)



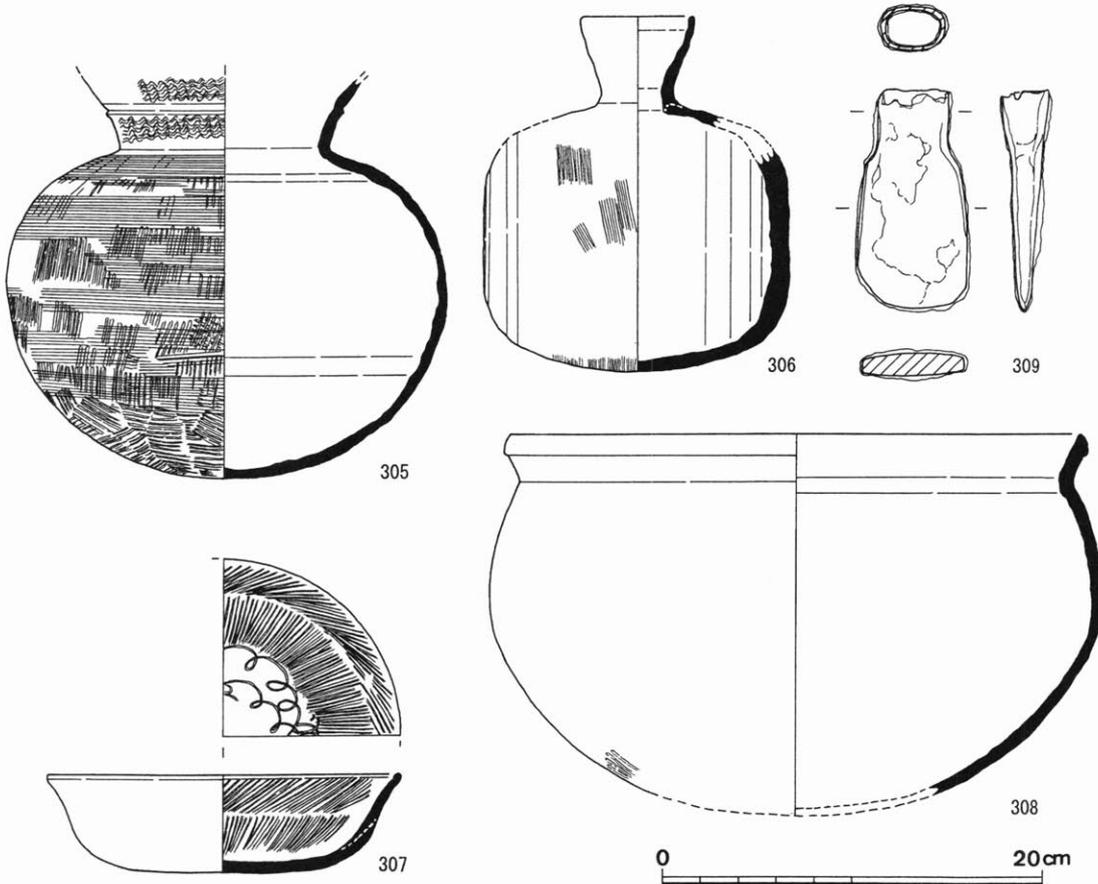
第43図 E地区出土遺物実測図(4)



第44図 E地区出土遺物実測図(5)



第45図 E地区出土遺物実測図(6)

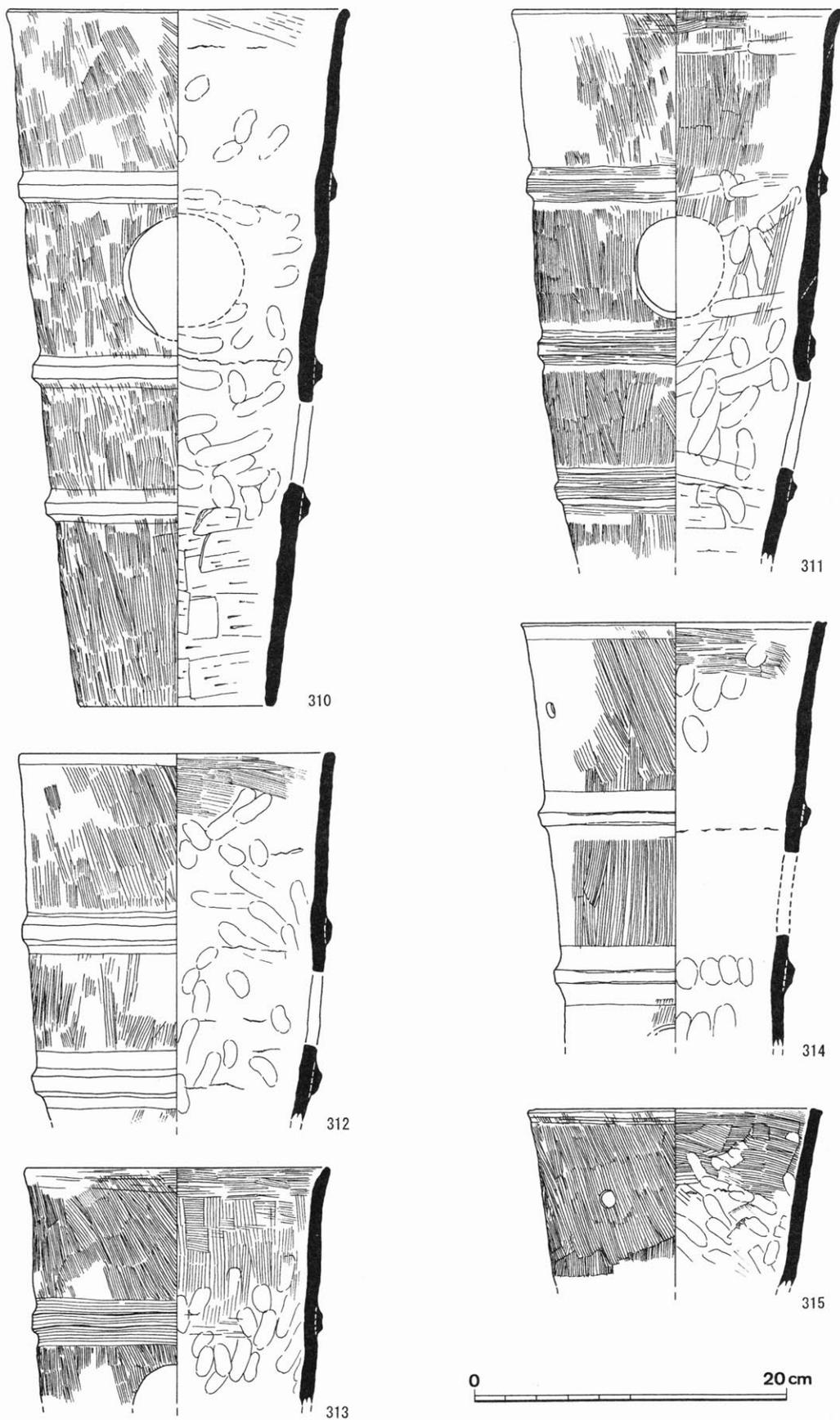


第46図 E地区出土遺物実測図(7)

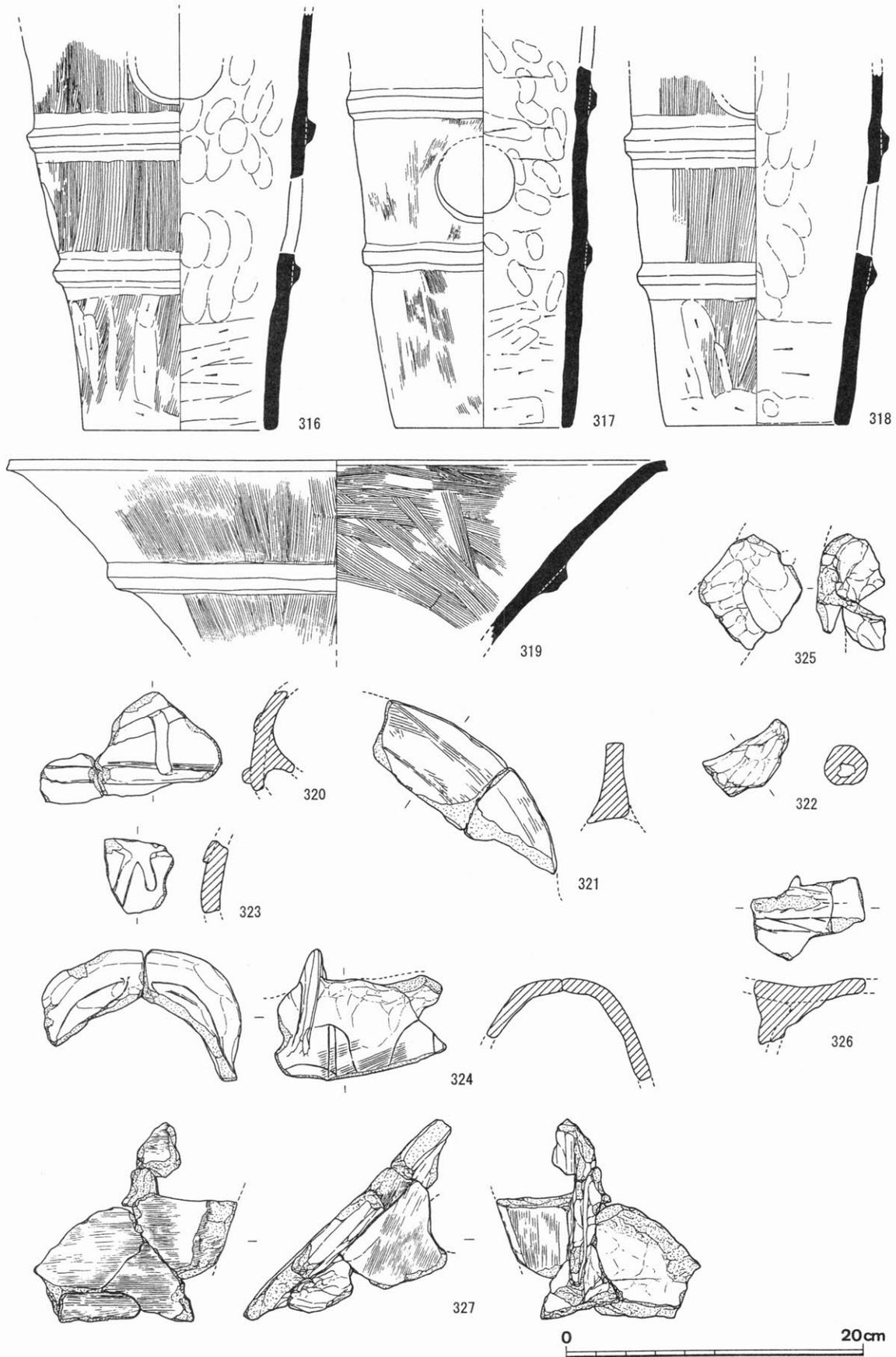
色である。341は土師器杯である。平底で口縁部をやや内湾気味に仕上げる椀形状のものである。口径9.2cm、器高3.5cmを測る。内面は黒漆が付着する。漆のパレットとして使用されたものと考えられる。341は土師器甕である。体部が球形に近い甕である。内外面ともハケ後ナデ調整する。342は瓦器椀である。ややいびつな楕円形で内面は密なミガキが施される。口縁端部内面に沈線が認められる。343は青磁椀である。内外面とも磨滅が著しい。344～347は土師器皿である。346・347は「て」の字状口縁をもつ。348～350は土師器羽釜である。350は口径25.5cm、焼成は良好で、色調は褐色である。10世紀代と推定される。

5. まとめ

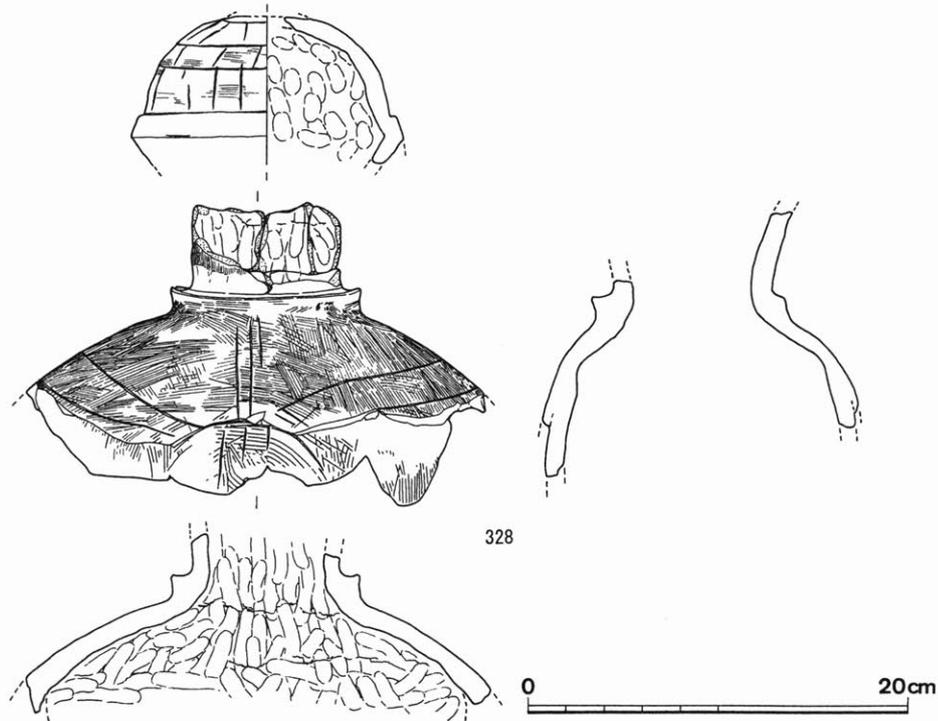
調査地北側、東側では道路や水田畦畔・水路によって方形に区画された条里形地割の様相を残す景観が広がるが、形成時期についてはわかっていない。道路建設路線帯より西側は扇状地形に沿った湾曲した畦畔が認められ、手原川によって運ばれた土砂の堆積が地割りを乱している



第47図 E地区出土遺物実測図(8)



第48図 E地区出土遺物実測図(9)



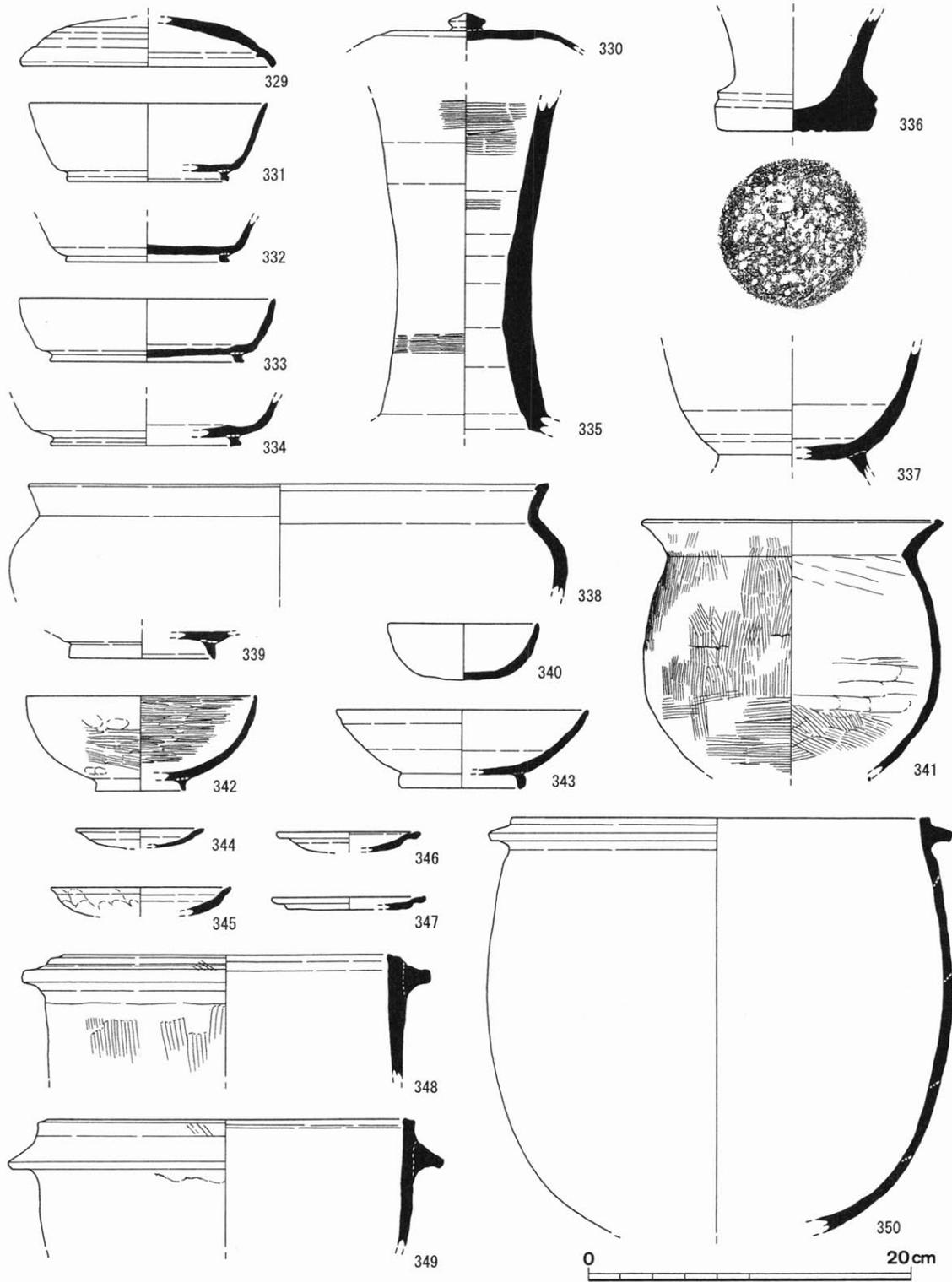
第49図 E地区出土遺物実測図(10)

もされている。扇状地が形成された後も手原川の流路は幾度となく変更し、第3～4次調査地北西端の現手原川の下方付近に流れる川が扇状地形成後の基本流路と考えられる。扇状地内を流れる大小の流路跡は、調査結果からみると現在の道路と流路跡が重なっている場所が多いように思われる。C地区に見られるように、基本流路周辺では氾濫を受けるたびに水田を作りなおした痕跡が各所に認められる。D・E地区では、耕作に伴う南北方向の溝も確認されたが、近世以降のものである。検出された薪高木1・3号墳は現状の畦畔に沿って墳形が残っており、このことから考えると現薪集落が形成されている扇状地最高所までは条里形地割は設けられておらず、扇状地開発が始まった頃から居住域として利用されていた可能性はある。

これまでの調査の結果、縄文時代においては第6次調査で竪穴式住居が検出され中期後半のムラ的一端を知ることができた。その後、A地区では顕著な遺構は確認されず、土坑等の存在から集落中心の周辺部の可能性が考えられた。C～D地区では、A地区に続く縄文時代後期前半の土坑や、わずかに残る縄文時代の遺物包含層を確認するにとどまった。C地区では流路跡内からまとまった土器や石皿、近畿地方でも最大級の石棒が出土した。この周辺に、石棒祭祀が行なわれていた集落の存在を考えることができるが、道路用地内のみに限られた調査で不明なことが多く、今後周辺での調査に期待したい。

弥生時代については、少量の遺物が検出されたのみで遺構等は見つかっていない。

古墳時代においては、薪高木1号墳は中期初頭、2・3号墳は後期末、薪狭道1号墳は後期初頭と築造時期の異なる4基の古墳の存在が明らかになった。扇状地開発の先がけとも言うべきものである。また、第2次調査地で埴輪が出土していることや、遺跡内に「大塚」といった小字名が認められることから、さらに多くの古墳が存在する可能性がある。薪高木1号墳は規模は明ら



第50図 E地区出土遺物実測図(11)

かでないが、周辺から出土した円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに、盾形埴輪・家形埴輪・甲冑形埴輪など形象埴輪が出土しており、地域の首長墓であったと考えられる。遺跡背後の丘陵上には多くの古墳が築造されており、このうち郷土塚2号墳(中期)、堀切7号墳(後期前半)からは形象埴輪の出土が認められ、扇状地の開発を進めた豪族の性格やその変遷を考える上で重要な資料となる。古墳時代後期末段階では、丘陵上では堀切横穴墓が作られているのに対し、扇状地上では新

高木2・3号墳が築造されるという対照的な展開が見られる。今後の調査に期待したい。古墳の築造が終了し、7世紀後半を過ぎると扇状地の開発が安定し、定住生活が行なわれるようになり、遺構は検出されなかったが、多くの煮炊き、供膳土器が出土している。A・D・E地区からは飛鳥時代から平安時代前期にかけての土器が多数出土したことから、周辺に大規模な集落の存在が考えられる。これらとともに鍛冶生産も行われており、拠点集落であった可能性もある。

古墳は、7世紀後半～8世紀前半には破壊され、奈良時代後半には新たな土地利用に伴いさらに削平を受けている。薪高木2・3号墳の場合、築造後100年たたないうちに破壊されたことになる。扇状地の開発で一定の地位や経済力を持った有力者が、中央政権との関係を利用したものとも考えられる。調査地の東側約300mには、古代の官道である古山陰道が推定されており、銅製帯金具の出土や大型の円面硯の出土などから、文字を使う地方官衙的な施設や役人の居住地、鉄生産関係の工房の造営などが想像させられる。また、堀切10号横穴からは、8世紀と考えられる銅製帯金具が出土しており、薪遺跡との関係が注目される。

A地区では、奈良時代後半の主軸がほぼ南北方向に向く掘立柱建物跡2棟を検出しているが、E地区では奈良時代前半のやや方向が異なる掘立柱建物跡1棟が検出されるにとどまった。平安時代前期以降中世までは遺物は確認されたが、遺構は柱穴がわずかに検出されるにとどまった。

(増田孝彦)

注1 鷹野一太郎「薪遺跡発掘調査概要」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第30集 京田辺市教育委員会) 2000

柴暁彦「薪遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

竹原一彦「薪遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第106冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

高野陽子「薪遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

竹井治雄「薪遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第110冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

増田孝彦・柴暁彦「薪遺跡第7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第121冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

注2 調査参加者(順不同、敬称略) 杉江貴宏・大谷博則・阿保悠希・山中春香・竹内梨絵・浅井達也・田中拓史・川端祐樹・兼子拓也・村上優美子・栃木道代・川端美恵・徳田智恵子・松下道子・荒川仁佳子・稲垣あや子・陸田初代・藤井矢壽子

付載

薪遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

1. いきさつ

薪遺跡は京田辺地区薪高木・狭道に所在する。第8次調査(D地区)からは、8世紀前半～後半に推定される土坑、溝などが検出されている。またそれに伴い、鍛冶滓が複数出土しているため、遺跡周辺での鉄器生産の様相を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table1に示す。鍛冶関連遺物(椀形鍛冶滓)2点の調査を行った。

2-2. 調査項目

(1)肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。この結果をもとに、分析試料の採取位置を決定している。

(2)顕微鏡組織

鉍滓の鉍物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、100～400倍で写真撮影を行った。

(3)ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。

試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は200gfで測定した。

(4)化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム

(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化リン(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO₂) : ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

TKG-1 : 椀形鍛冶滓片

(1) 肉眼観察 : 平面がやや細長い多角形状の椀形鍛冶滓の破片である。滓の色調は暗灰色。上下面は資料本来の表面で、細かい木炭痕が散在する。側面は6面全面が破面で、横断面は比較的浅い椀形を呈する。気孔は少なく緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織 : Photo. 1①~③に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト(Wustite : FeO)、淡灰色柱状結晶ファイヤライト(Fayalite : 2FeO · SiO₂)が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(3) ビッカース断面硬度 : Photo. 1①の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は408Hvであった。ウスタイトの文献硬度値(注1)450~500Hvよりやや軟質の値を示すが、測定時の亀裂の影響による誤差と推測される。

(4) 化学組成分析 : Table2に示す。全鉄分(Total Fe)54.82%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.02%、酸化第1鉄(FeO)61.22%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)10.31%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は25.01%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)2.13%と低値である。また他の随伴微量元素は、二酸化チタン(TiO₂)0.25%、バナジウム(V)0.01%、酸化マンガン(MnO)0.14%、銅(Cu)<0.01%といずれも低値であった。

当資料は鉍石(塊鉍・砂鉄)起源の脈石成分(CaO、MgO、MnO、TiO₂、V)は低値で、鉄酸化物と、炉材(羽口・炉壁)ないしは鍛接剤(藁灰・粘土汁)の熔融物起源の造滓成分とで構成される。この特徴から、純度の高い鉄素材を熱間で鍛打加工時に生じた、鍛錬鍛冶滓と推定される。

TKG-2 : 椀形鍛冶滓片

(1) 肉眼観察 : 椀形鍛冶滓の側面端部破片である。側面2面が破面。滓の色調は暗灰色である。上面は平坦気味で、下面端部に瘤状の突出部がみられる。横断面は比較的浅い椀形を呈する。破面には上下方向に伸びる気孔が若干観察されるが、緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織 : Photo. 1④~⑧に示す。④は滓中のごく微細な木炭破片で、木口面が観察される。発達した道管が分布しており広葉樹材と推定される。

⑤~⑧は滓部である。発達した淡灰色盤状結晶ファイヤライト、白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。また⑥中央のウスタイト粒内の微細な暗褐色結晶は、ヘーシナイト(Hercynite : FeO · Al₂O₃)と推測される。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(3) ビッカース断面硬度 : Photo. 1⑧の淡灰色柱状結晶の硬度を測定した。硬度値は544Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値600~700Hvよりやや軟質の値を示すが、測定時の亀裂の影響

響による誤差と推測される。

(4)化学組成分析：Table2に示す。全鉄分(Total Fe)48.07%に対して、金属鉄(Metallic Fe) $<0.01\%$ 、酸化第1鉄(FeO)48.57%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)14.75%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は32.62%と高値であるが、塩基性成分の割合は(CaO+MgO)1.61%と低い。また他の随伴微量元素は、二酸化チタン(TiO₂)0.16%、バナジウム(V) $<0.01\%$ 、酸化マンガン(MnO)0.18%、銅(Cu) $<0.01\%$ と、いずれも低値であった。

当資料も梔形鍛冶滓((TKG-1)と同様、鉍石起源の脈石成分の含有率はごく微量で、鉄酸化物と、炉材ないしは鍛接剤の溶融物(造滓成分)とで構成される。やはり鍛錬鍛冶滓と推定される。

4. まとめ

新遺跡から出土した梔形鍛冶滓2点を分析調査した結果、次の点が明らかとなった。

今回、分析調査を実施した梔形鍛冶滓(TKG-1、2)は、共に鉄酸化物(FeO)と造滓成分(SiO₂、Al₂O₃)主体の滓であった。

純度の高い(ほとんど製錬滓～精錬鍛冶滓を含まない)鉄素材を、熱間で鍛打加工した際の吹き減り(鉄材の酸化に伴う損失)で生じたものと推定される。この結果から、当遺跡では鉄器製作(小鍛冶)用に調整された鉄素材(新鉄)か、廃鉄器(古鉄)を鍛冶原料として、鍛造鉄器を作っていた可能性が高いと考えられる。両鉄滓はTKG-1がウスタイト多量晶出から高温沸し鍛接工程の先発、TKG-2はファイヤライト主体から低温(800～900℃)素延べの後発が想定されて、連続作業からの派生物と解釈できよう。

また梔形鍛冶滓(TKG-2)中の微細な木炭破片から、鍛冶炭に広葉樹材を用いていたと推測される。

(注)

(1)日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』1968

ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

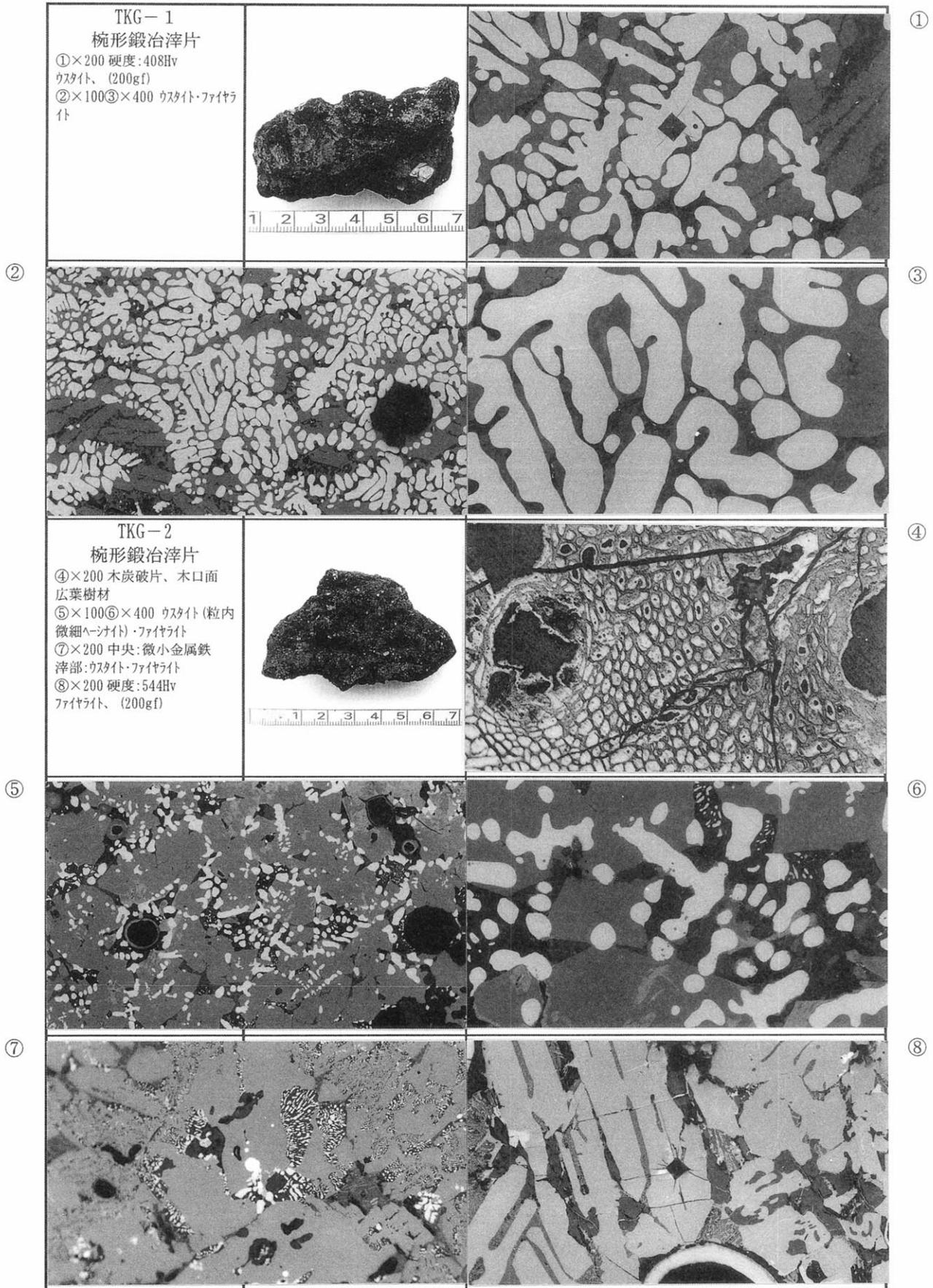


Photo. 1 椀形鍛冶滓片の顕微鏡組織

圖 版



(1) 調査地全景(上が北西)



(2) D地区全景(上が南西)



(1) E地区全景(上が南東)



(2) E地区掘立柱建物跡S B50・竪穴式住居跡S H45(上が北東)



(1) D地区調査前全景(南東から)



(2) D地区トレンチ全景(南東から)



(1) D地区トレンチ全景(北西から)



(2) D地区新高木1～3号墳S D30・70・90近景(南東から)



(1) D地区土坑S K01完掘状況(北東から)



(2) D地区土坑S K01遺物出土状況(北西から)



(1) D地区土坑S K01断面(北から)



(2) D地区溝S D10遺物出土状況及び断面(北東から)



(1) D地区溝S D10遺物出土状況(南西から)



(2) D地区薪高木1号墳S D30完掘状況(南東から)



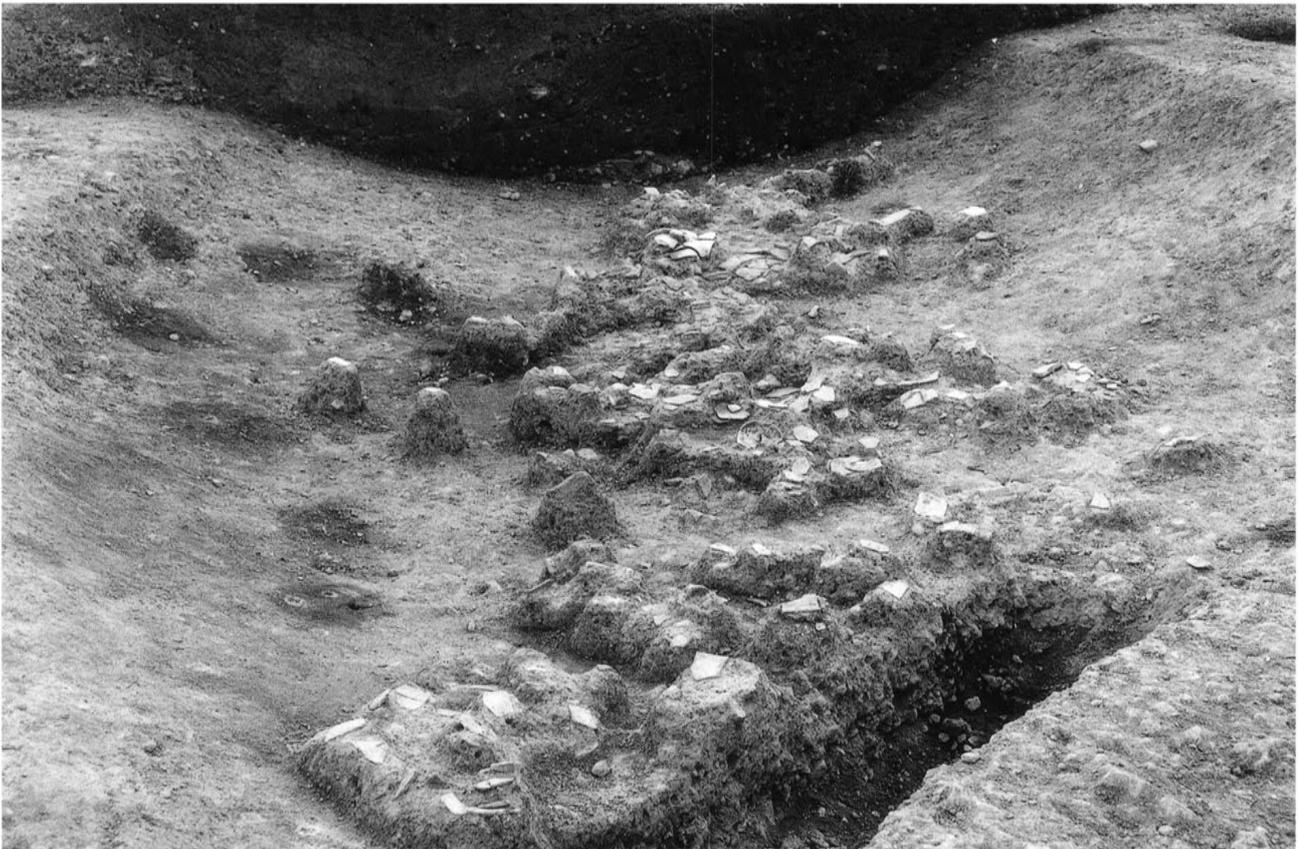
(1) D地区薪高木1号墳S D30完掘状況(北から)



(2) D地区薪高木1号墳S D30埴輪出土状況(南東から)



(1) D地区薪高木1号墳S D30埴輪出土状況(南東から)



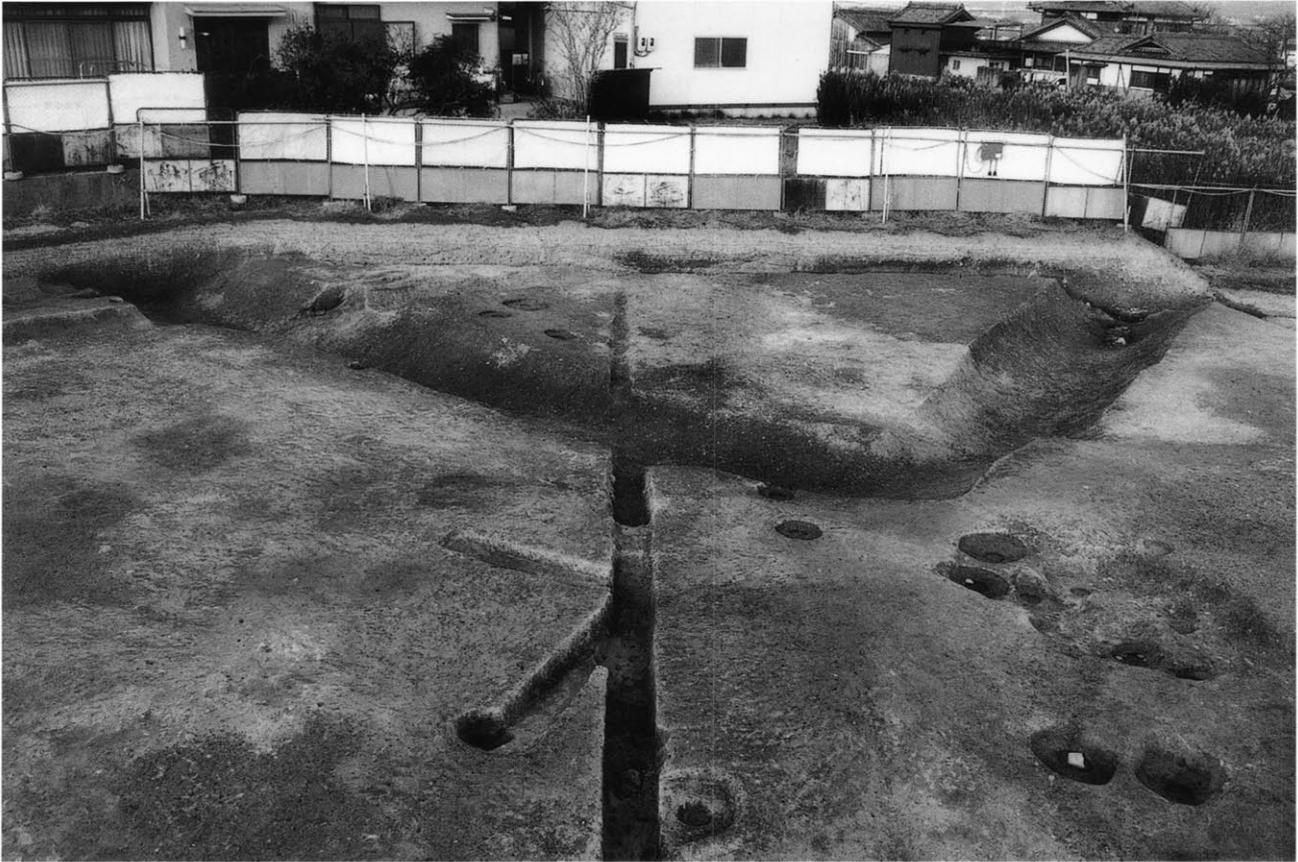
(2) D地区薪高木1号墳S D30埴輪出土状況(北から)



(1) D地区薪高木1号墳S D 30埴輪出土状況(北から)



(2) D地区薪高木1号墳S D 30断面(南から)



(1) D地区薪高木2号墳S D70全景(南西から)



(2) D地区薪高木2号墳S D70南西側(南東から)



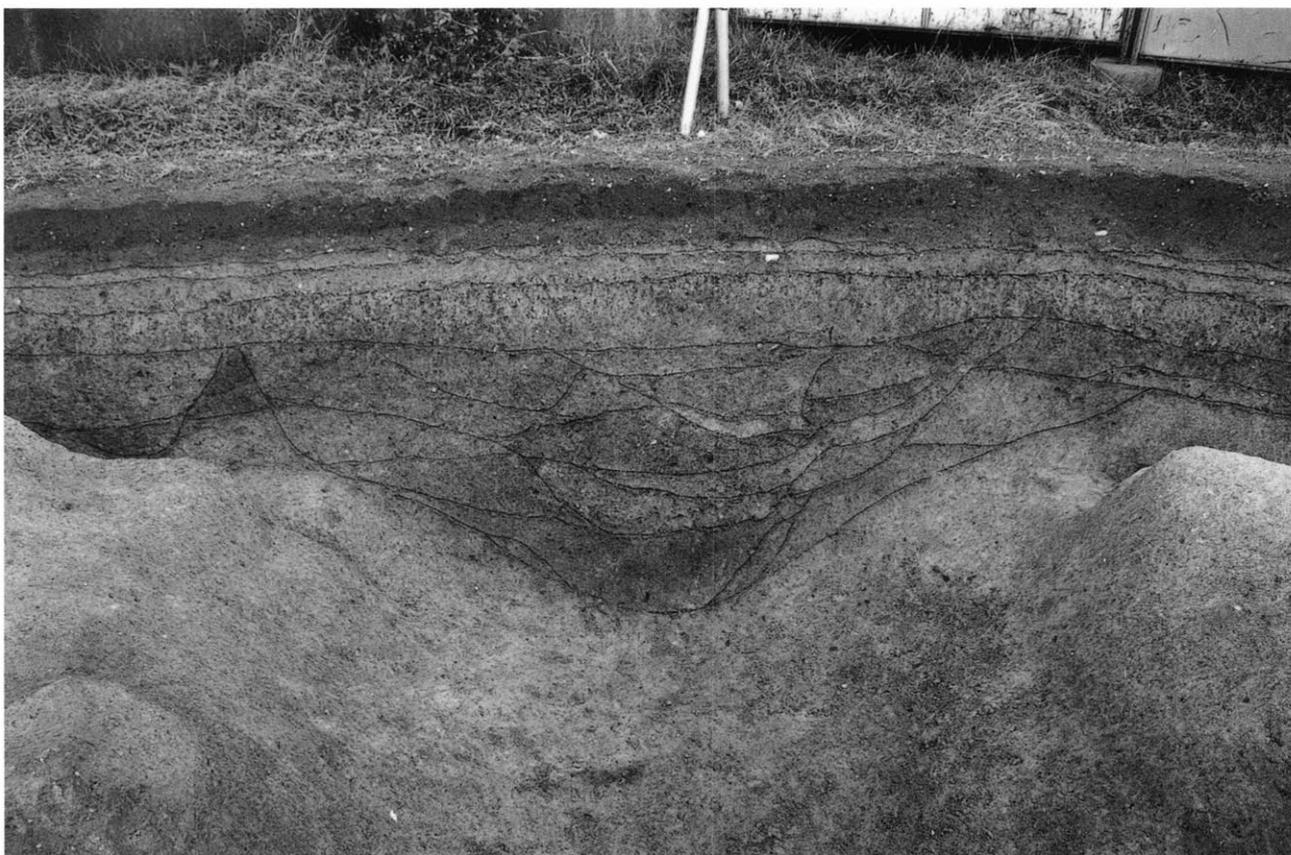
(1) D地区薪高木2号墳S D70南東側(南西から)



(2) D地区薪高木2号墳S D70南東側遺物出土状況(南西から)



(1) D地区薪高木2号墳S D70南東側遺物出土状況(南東から)



(2) D地区薪高木2号墳S D70南西側断面(南東から)



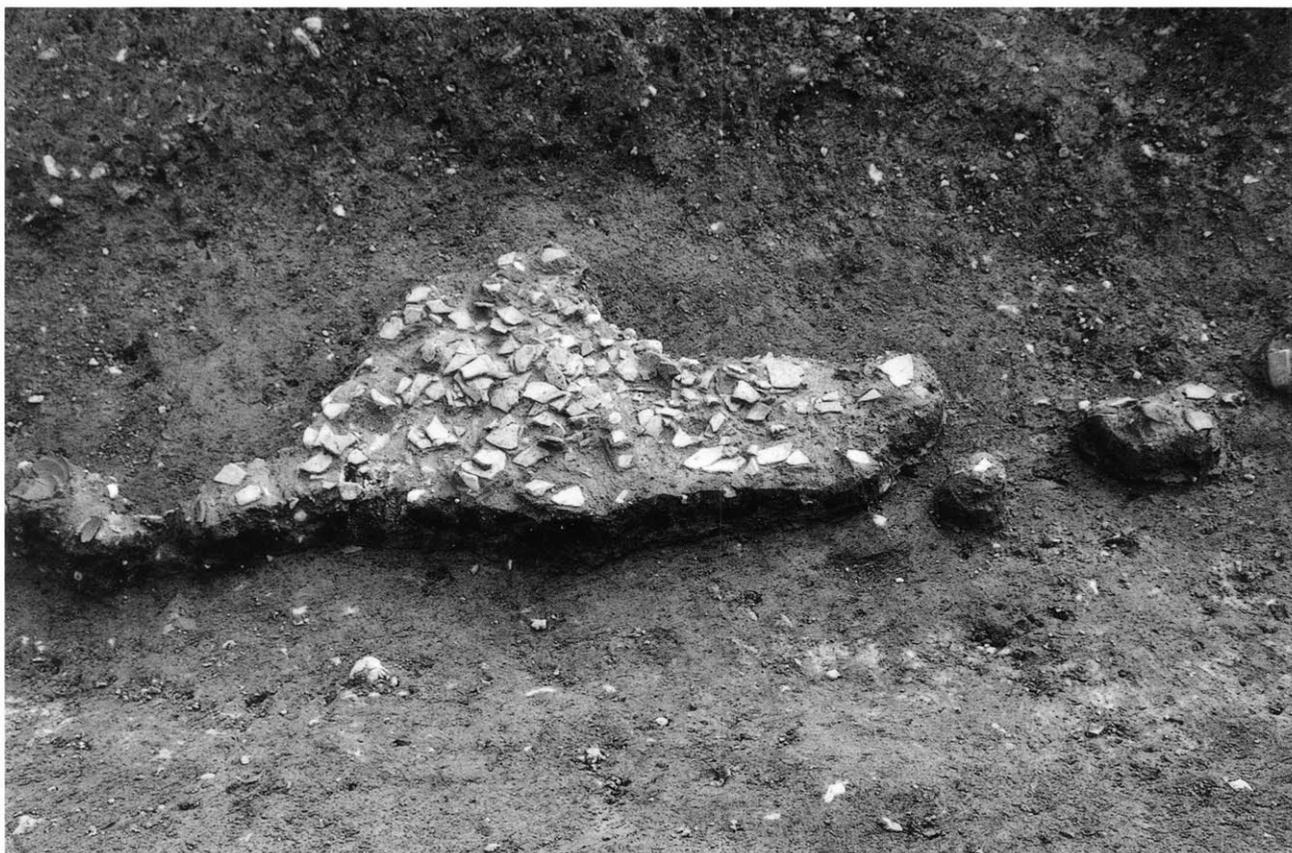
(1) D地区薪高木2号墳S D70南東側断面(南西から)



(2) D地区薪高木3号墳S D90全景(北西から)



(1) D地区薪高木3号墳S D90北西側(南西から)



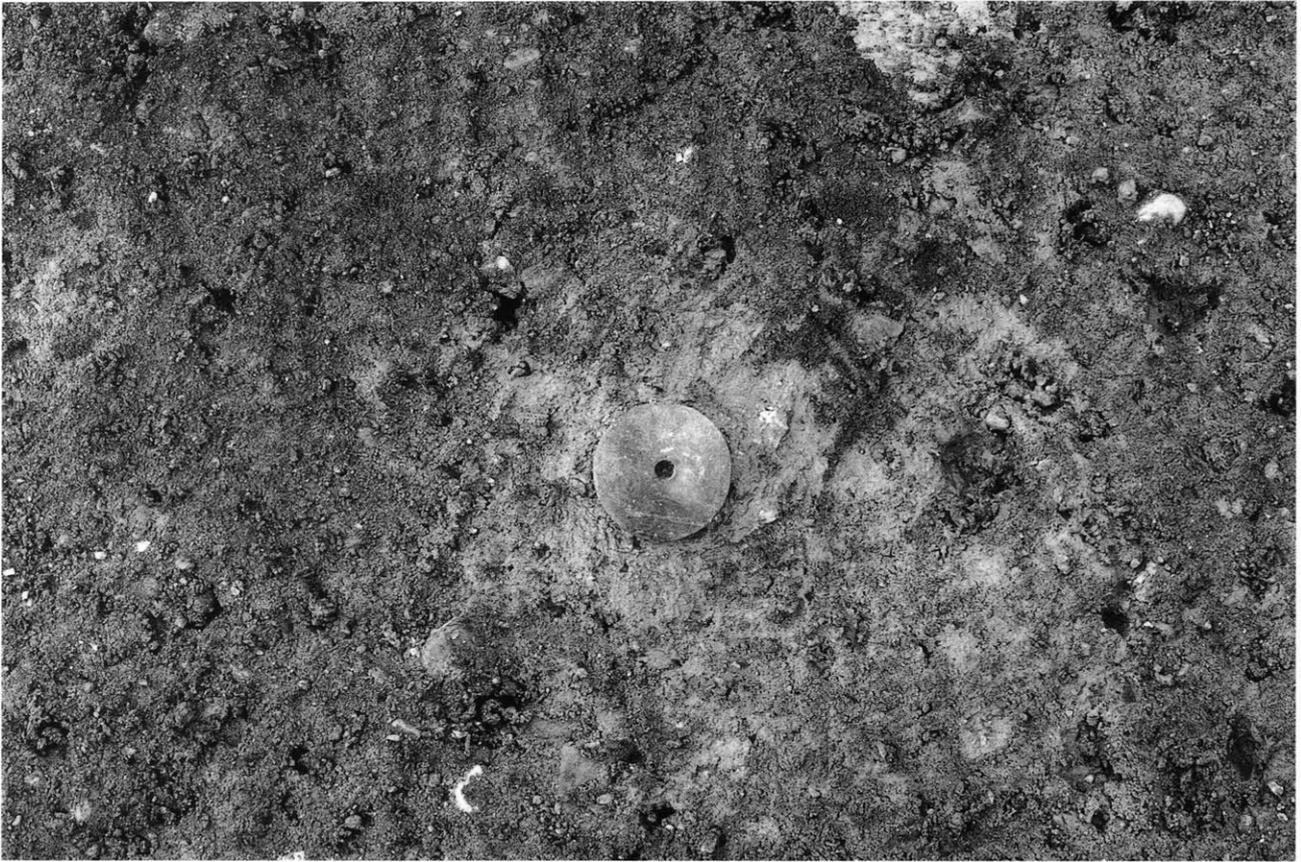
(2) D地区薪高木3号墳S D90北西側遺物出土状況(北西から)



(1) D地区薪高木3号墳S D90北東側(北西から)



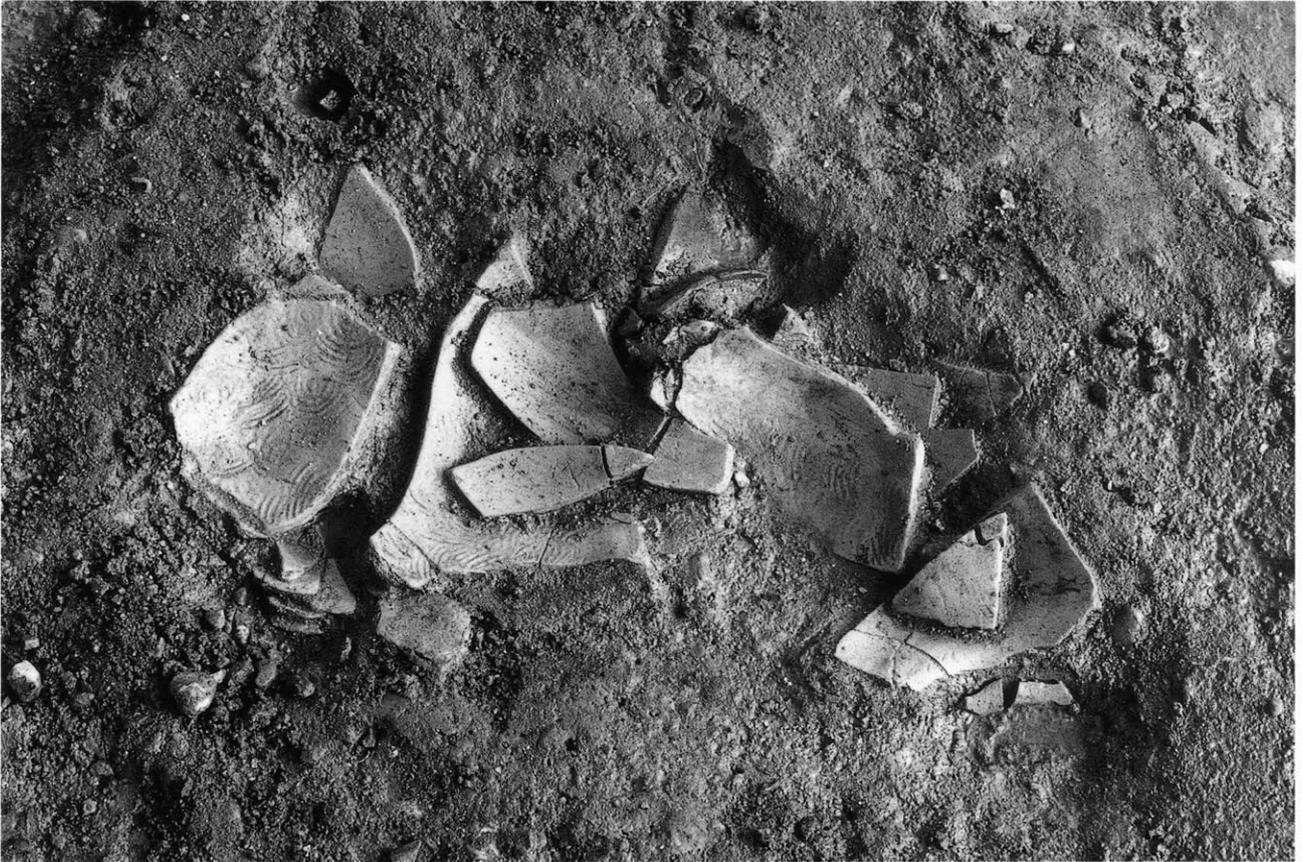
(2) D地区薪高木3号墳S D90北東側(南東から)



(1) D地区薪高木3号墳S D90南東側遺物出土状況(北西から)



(2) D地区薪高木3号墳S D90北西側(北東から)



(1) D地区薪高木3号墳S D90北西側遺物出土状況(北から)



(2) D地区薪高木3号墳S D90南西側(北西から)



(1) D地区薪高木3号墳S D90北西側断面(南西から)



(2) D地区薪高木3号墳S D90南西側断面(北西から)



(1) E地区調査前全景(南東から)



(2) E地区1トレンチ全景(東から)



(1) E地区トレンチ全景(北西から)



(2) E地区薪狭道1号墳S D20全景(上が西)



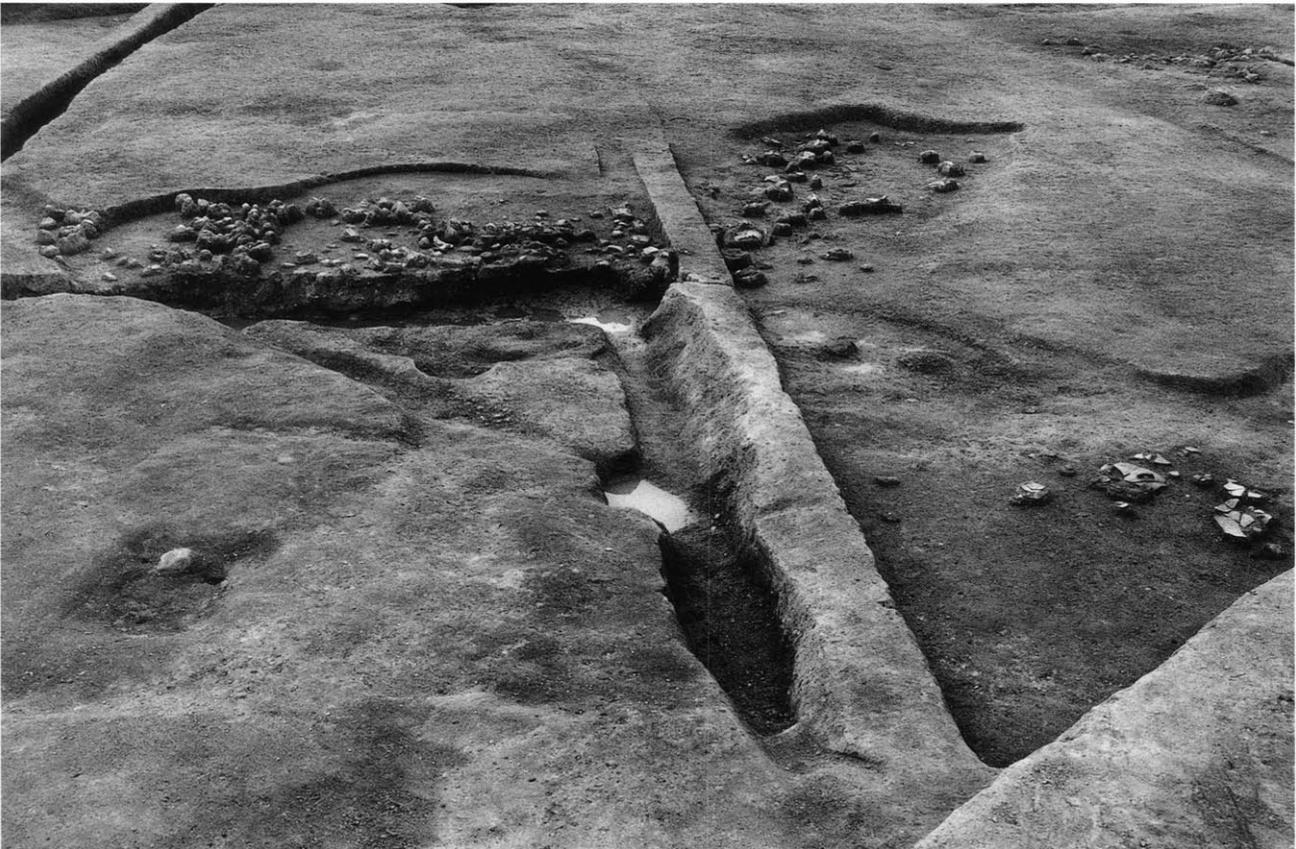
(1) E地区掘立柱建物跡S B50・竪穴式住居跡S H50(南東から)



(2) E地区土坑S K40完掘状況(南東から)



(1) E地区土坑S K40遺物出土状況(北西から)



(2) E地区土坑S K40遺物出土状況(北東から)



(1) E地区土坑S K 40遺物出土状況(北西から)



(2) E地区土坑S K 40遺物出土状況(南東から)



(1) E地区土坑S K 40遺物出土状況(南東から)



(2) E地区土坑S K 40遺物出土状況(北西から)



(1) E地区土坑S K40中央断面(南東から)



(2) E地区土坑S K40中央断面(南東から)



(1) E地区第5次調査トレンチ南壁断割り断面(北東から)



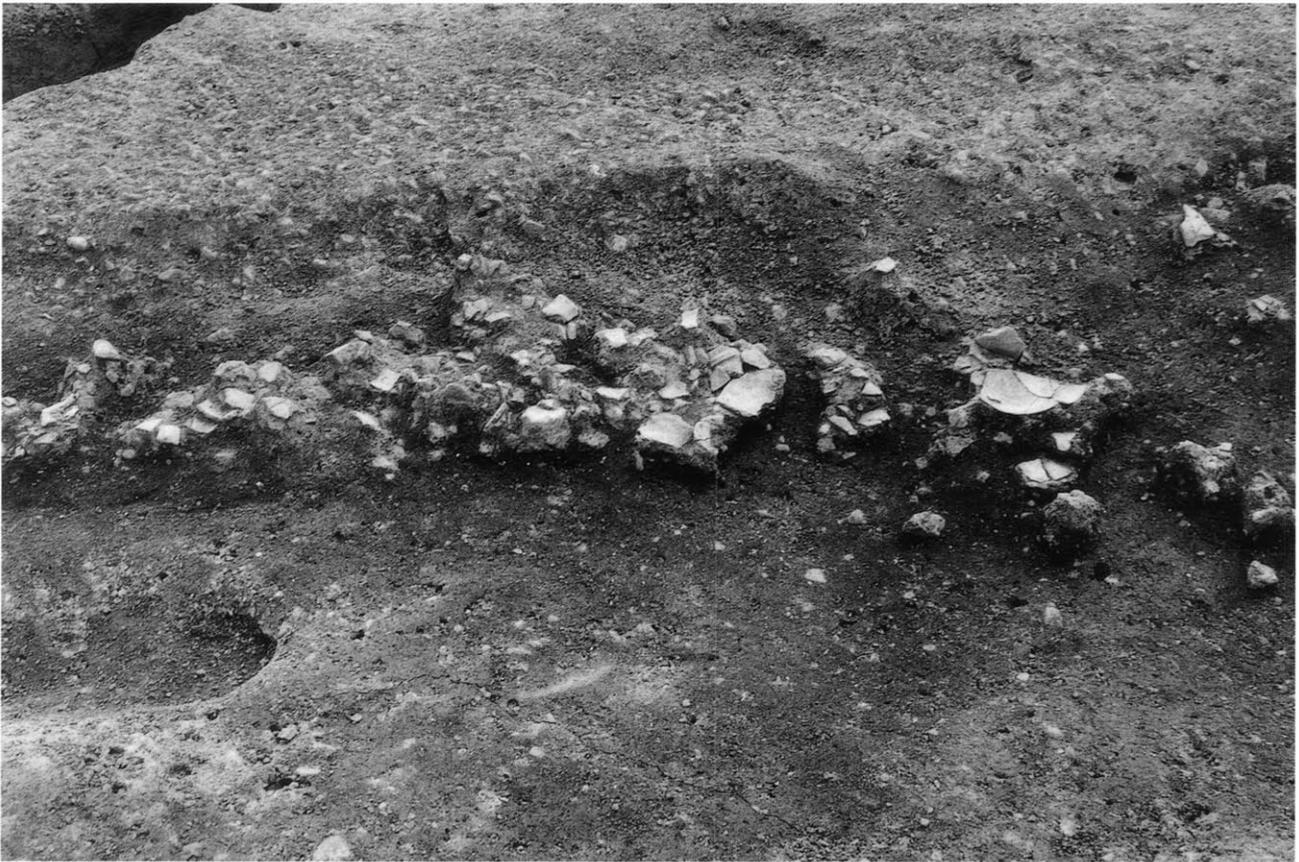
(2) E地区薪狭道1号墳S D20埴輪出土状況(東から)



(1) E 地区薪狭道 1 号墳 S D 20 埴輪出土状況(東から)



(2) E 地区薪狭道 1 号墳 S D 20 北側埴輪出土状況(南から)



(1) E 地区薪狭道 1 号墳 S D20 北側埴輪出土状況 (北から)



(2) E 地区薪狭道 1 号墳 S D20 北側土師器杯出土状況 (北から)



(1) E地区薪狭道1号墳S D20北側埴輪出土状況(北から)



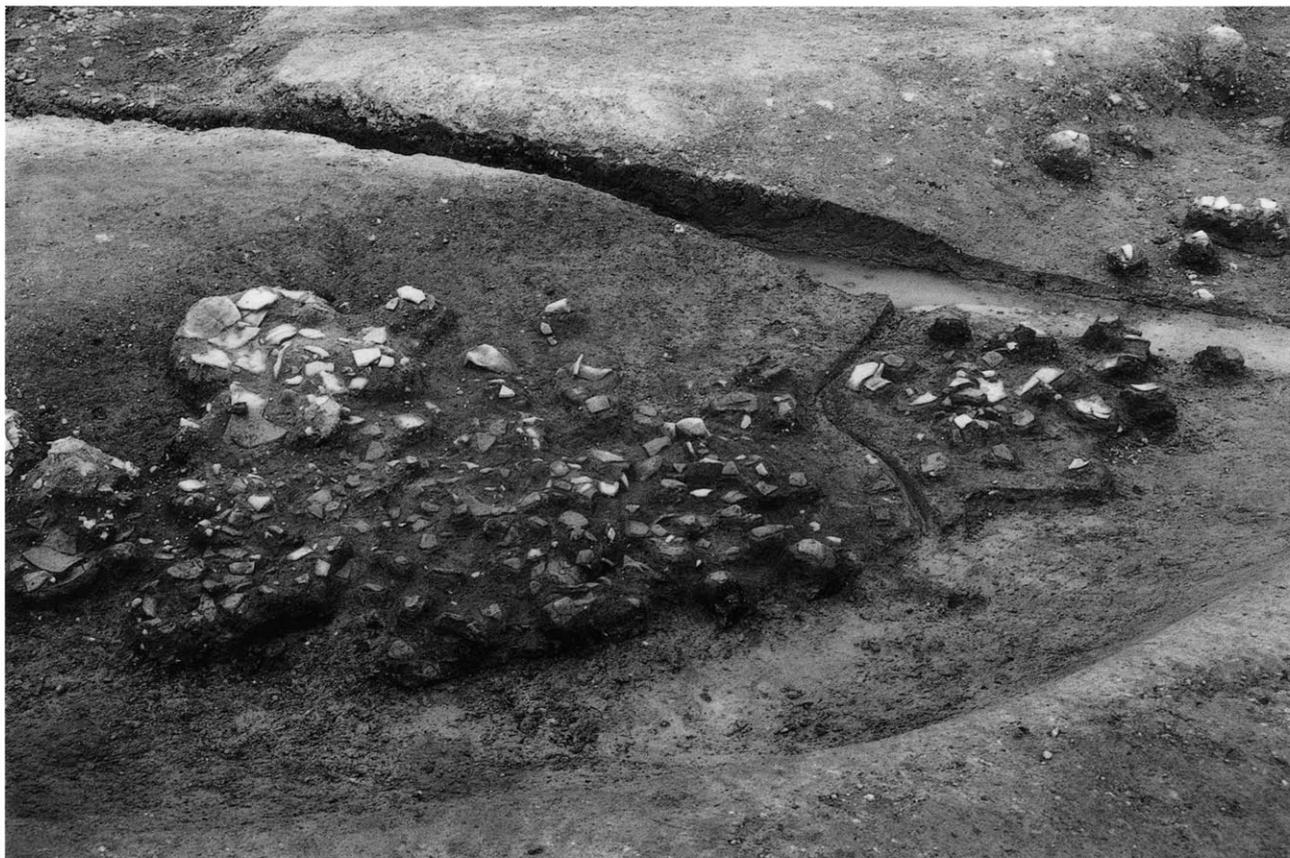
(2) E地区薪狭道1号墳S D20北側埴輪出土状況(北から)



(1) E地区薪狭道1号墳S D20西側埴輪出土状況(南西から)



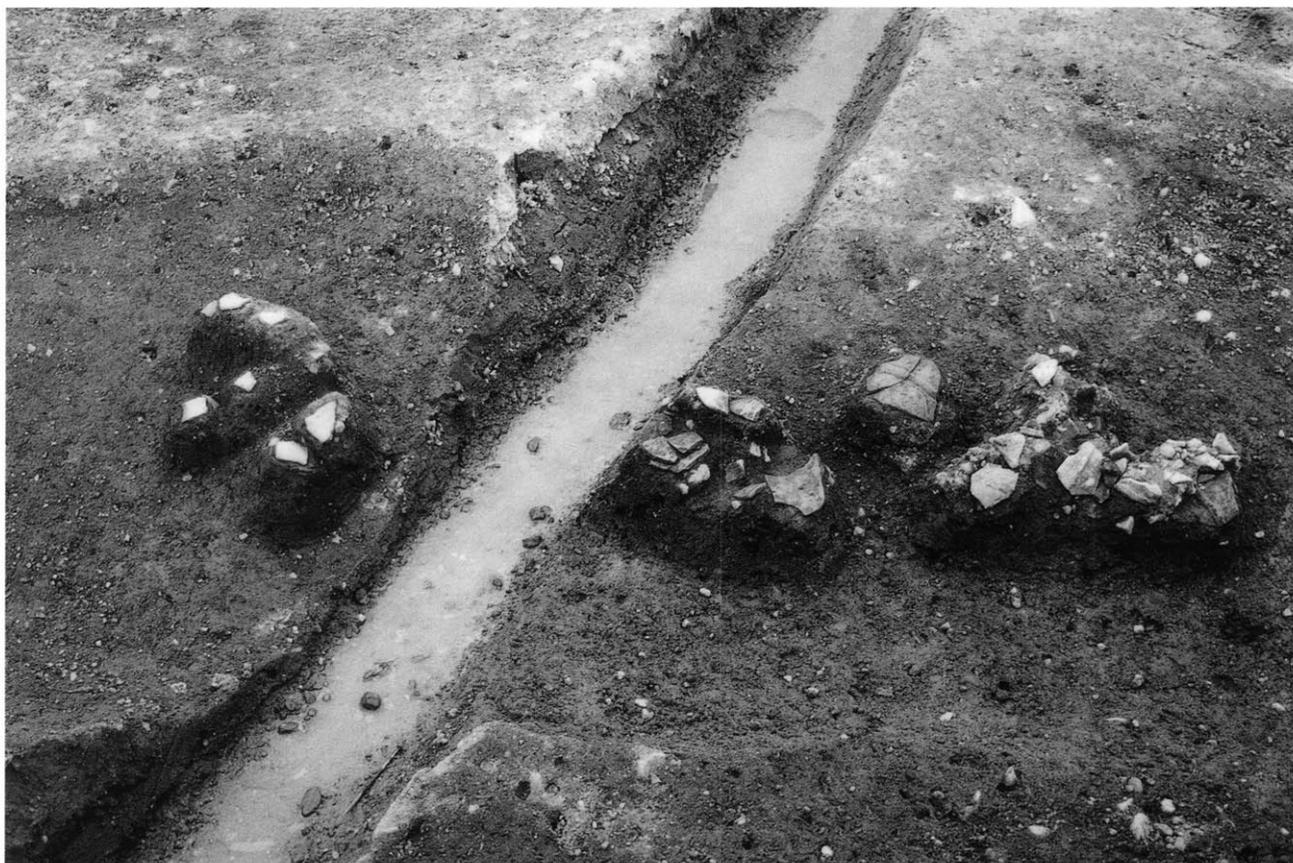
(2) E地区薪狭道1号墳S D20西側埴輪出土状況(北東から)



(1) E地区薪狭道1号墳S D20西側埴輪出土状況(西から)



(2) E地区薪狭道1号墳S D20西側埴輪出土状況(西から)



(1) E地区薪狭道1号墳S D20南側埴輪出土状況(南から)



(2) E地区薪狭道1号墳S D20東側埴輪出土状況(北東から)



(1) E地区薪狭道1号墳S D20北側断面(南東から)



(2) E地区薪狭道1号墳S D20南側断面(南から)



126



219



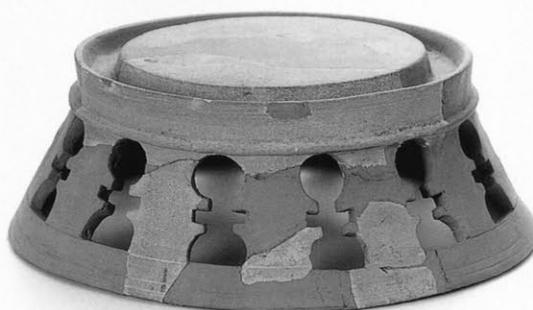
201



129



205



211



224



305



223



160



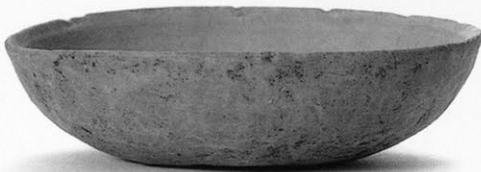
225



104



275



24



283



107



298



307



276



342



125



310



65



325



328



321



320



322



69



68

71



324

